

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 543 集

いち かわ 市の川 I 遺跡・いち かわ 市の川 II 遺跡・やまぐち 山口遺跡・
おがわ やしき 小川屋敷遺跡・むい かい いち 六日市遺跡・はってんきた 八天北遺跡
発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業更木新田地区関連遺跡発掘調査

2008

岩手県県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室
(財)岩手県文化振興事業団

市の川Ⅰ遺跡・市の川Ⅱ遺跡・山口遺跡・
小川屋敷遺跡・六日市遺跡・八天北遺跡
発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業更木新田地区関連遺跡発掘調査

序

岩手県には旧石器時代から連続と続く数多くの遺跡が残されています。先人達が創造してきたこれらの貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私達県民に課せられた責務であるといえましょう。一方、広大な面積を有し、その大部分が山地である本県にあっては地域開発による社会資本の充実も県民の切実な願いであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和は今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもと、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業に関連して平成19年度に発掘調査を行った北上市更木新田地区に所在する市の川Ⅰ遺跡・市の川Ⅱ遺跡・山口遺跡・小川屋敷遺跡・六口市遺跡・八天北遺跡の調査結果をまとめたものであります。

発掘調査によって、この地域に平安時代の集落跡が存在していたことが明らかになりました。他には縄文時代の陥し穴状遺構や石鏃などの遺物が見つかっており、縄文時代の狩猟場であったことも判りました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財行政に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助・御協力を賜りました岩手県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室・北上市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成20年11月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田牧雄

例 言

- 1 本報告書は岩手県北上市更木新田地区に所在する市の川Ⅰ遺跡・市の川Ⅱ遺跡・山口遺跡・小川屋敷遺跡・六日市遺跡・八天北遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、経営体育成基盤整備事業に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と岩手県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。なお、費用負担は岩手県教育委員会が岩手県南広域振興局北上総合支局農林部に農家負担分を補助している。
- 3 本遺跡の調査成果は、すでに「平成19年度発掘調査報告書」(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第524集)において発表しているが、内容については本書が優先する。
- 4 岩手県遺跡登録台帳に登録されている市の川Ⅰ遺跡・市の川Ⅱ遺跡・山口遺跡・小川屋敷遺跡・六日市遺跡・八天北遺跡の遺跡番号と遺跡略号は次の通りである。

市の川Ⅰ遺跡	遺跡番号	ME 46 - 0343	遺跡略号	I K I - 07
市の川Ⅱ遺跡	遺跡番号	ME 46 - 0374	遺跡略号	I K II - 07
山口遺跡	遺跡番号	ME 36 - 2394	遺跡略号	Y G - 07
小川屋敷遺跡	遺跡番号	ME 46 - 0374	遺跡略号	O G Y - 07
六日市遺跡	遺跡番号	ME 46 - 0392	遺跡略号	M K I - 07
八天北遺跡	遺跡番号	ME 47 - 2051	遺跡略号	H T K - 07

- 5 野外調査の面積・期間・担当者は次の通りである。

	調査面積	野外調査期間	野外調査担当者
市の川Ⅰ遺跡	290 m ²	平成19年4月10日～4月16日	溜浩二郎
市の川Ⅱ遺跡	393 m ²	平成19年4月17日～4月27日	溜浩二郎
山口遺跡	1,320 m ²	平成19年4月10日～5月18日	藤原大輔
小川屋敷遺跡	3,473 m ²	平成19年5月16日～7月13日	溜浩二郎・藤原大輔
六日市遺跡	1,905 m ²	平成19年4月10日～5月15日	杉沢昭太郎・田中美穂
八天北遺跡	1,343 m ²	平成19年5月1日～6月8日	杉沢昭太郎・田中美穂

- 6 室内整理の期間・担当者は次の通りである。

	室内整理期間	室内整理担当者
市の川Ⅰ遺跡	平成19年12月3日～平成19年12月14日	藤原大輔
市の川Ⅱ遺跡	平成19年12月17日～平成19年12月31日	藤原大輔
山口遺跡	平成20年2月1日～平成20年3月31日	溜浩二郎
小川屋敷遺跡	平成20年1月1日～平成20年3月31日	藤原大輔
六日市遺跡	平成19年12月3日～平成20年1月31日	田中美穂
八天北遺跡	平成20年2月1日～平成20年2月29日	田中美穂

- 7 遺物の鑑定は次の機関に依頼した。

石材鑑定：花崗岩協会

- 8 基準点測量は株式会社キタテックに委託した。

- 9 野外調査・室内整理にあたって次の方々のご協力・御指導をいただいた(敬称略)。

北上市教育委員会

- 10 本報告書の編集については、溜が行った。各章の執筆については第Ⅰ章「調査に至る経過」は岩手県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室に原稿を依頼し、執筆していただいたものである。第Ⅱ章「遺跡周辺の地理的環境」は藤原と田中が分担して行った。第Ⅲ章～第Ⅶ章は溜、第Ⅷ章・第Ⅸ章は杉沢が執筆した。

- 11 本遺跡の調査で得られた一切の資料、出土遺物・撮影写真・遺構実測図・遺物実測図などは岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡周辺の地理的環境	
1	遺跡の位置	2
2	地形と地質	2
3	遺跡周辺の歴史的環境	7
III	調査の経過と方法	
1	野外調査の経緯	11
2	野外調査の方法	11
3	室内整理の手順と方法	14
IV	市の川 I 遺跡	
1	遺跡の立地	16
2	基本土層	16
3	調査の概要	16
4	出土遺物	16
5	ま と め	16
V	市の川 II 遺跡	
1	遺跡の立地	18
2	基本土層	18
3	調査の概要	18
4	ま と め	18
VI	山口遺跡	
1	遺跡の立地	20
2	基本土層	20
3	調査の概要	20
4	検出遺構と出土遺物	22
5	ま と め	28

VII 小川屋敷遺跡

1 遺跡の立地	30
2 基本土層	30
3 調査の概要	30
4 検出遺構と出土遺物	32
5 ま と め	57

VIII 六日市遺跡

1 遺跡の立地	58
2 基本土層	58
3 調査の概要	58
4 検出遺構と出土遺物	63
5 ま と め	77

IX 八天北遺跡

1 遺跡の立地	78
2 基本土層	78
3 調査の概要	78
4 検出遺構と出土遺物	78
5 ま と め	90
報告書抄録	147

表 目 次

第 1 表 周辺の遺跡一覧表	9
----------------	---

< 市の川 1 遺跡 >

第 2 表 土器観察表	16
-------------	----

< 山口遺跡 >

第 3 表 古代土器観察表	29	第 6 表 石器観察表	29
第 4 表 縄文土器観察表	29	第 7 表 土器重量表	29
第 5 表 金属遺物観察表	29		

< 小川屋敷遺跡 >

第 8 表 古代土器観察表	53 ~ 56	第 10 表 金属遺物観察表	56
第 9 表 縄文土器観察表	56	第 11 表 土器重量表	56

<六日市遺跡>

第12表	古代土器観察表	75・76	第15表	金属遺物観察表	76
第13表	縄文・弥生土器観察表	76	第16表	石器観察表	76
第14表	陶磁器観察表	76	第17表	石製品観察表	76

<八天北遺跡>

第18表	柱穴観察表	84	第21表	陶磁器土器観察表	89
第19表	古代土器観察表	89	第22表	金属遺物観察表	89
第20表	縄文観察表	89	第23表	石器類観察表	89

図版目次

第1図	遺跡位置図	3	第6図	市の川Ⅰ・市の川Ⅱ・山口・小川屋敷・ 六日市遺跡グリッド配置図	12
第2図	周辺地形と調査範囲①	4	第7図	八天北遺跡グリッド配置図	13
第3図	周辺地形と調査範囲②	5	第8図	凡例図	15
第4図	地形分類図	6			
第5図	周辺の遺跡分布図	10			

<市の川Ⅰ遺跡>

第9図	調査区、基本土層	17
-----	----------	----

<市の川Ⅱ遺跡>

第10図	基本土層	18	第11図	調査区	19
------	------	----	------	-----	----

<山口遺跡>

第12図	基本土層	20	第17図	3号竪穴住居跡・出土遺物	25
第13図	遺構配置図	21	第18図	1号焼土	26
第14図	1号竪穴住居跡・出土遺物	22	第19図	1号溝状遺構	26
第15図	2号竪穴住居跡	23	第20図	1号～3号柱穴状土坑	27
第16図	2号竪穴住居跡出土遺物	24	第21図	遺構外出土遺物	28

<小川屋敷遺跡>

第22図	基本土層	30	第33図	6号竪穴住居跡・出土遺物	40
第23図	遺構配置図	31	第34図	7号竪穴住居跡・出土遺物	41
第24図	1号竪穴住居跡	32	第35図	1号住居状遺構	42
第25図	1号竪穴住居跡出土遺物	33	第36図	1号住居状遺構・出土遺物	43
第26図	2号竪穴住居跡	34	第37図	1号～6号焼土・出土遺物	45
第27図	2号竪穴住居跡・出土遺物	35	第38図	1号～4号土坑	48
第28図	3号竪穴住居跡	36	第39図	5号～9号土坑・出土遺物	49
第29図	3号竪穴住居跡出土遺物	37	第40図	1号井戸跡	50
第30図	4号竪穴住居跡・出土遺物	38	第41図	1号陥し穴状遺構・1号溝状遺構	50
第31図	4号竪穴住居跡出土遺物	39	第42図	1号柱穴状土坑	51
第32図	5号竪穴住居跡	39	第43図	遺構外出土遺物	52

<六日市遺跡>

第44図	基本土層	58	第52図	1号竪穴住居跡出土遺物(1)	69
第45図	調査区全体図	59	第53図	1号竪穴住居跡出土遺物(2)	70
第46図	遺構配置図(1)	60	第54図	2号竪穴住居跡出土遺物(1)	71
第47図	遺構配置図(2)	61	第55図	2号竪穴住居跡出土遺物(2)	72
第48図	遺構配置図(3)	62	第56図	2号竪穴住居跡出土遺物(3)、 遺構外出土遺物(1)	73
第49図	1号竪穴住居跡	66	第57図	遺構外出土遺物(2)	74
第50図	2号竪穴住居跡	67			
第51図	1号・2号陥し穴状遺構、1号焼土	68			

<八天北遺跡>

第58図	基本土層	78	第63図	柱穴群(1)	86
第59図	調査区全体図	79	第64図	柱穴群(2)	87
第60図	遺構配置図(1)	80	第65図	柱穴群(3)	88
第61図	遺構配置図(2)	81	第66図	出土遺物	89
第62図	1号～3号溝跡	85			

写真図版目次

遺構

<市の川Ⅰ遺跡>

写真図版 1	航空写真	93
--------	------	----

<市の川Ⅰ遺跡・市の川Ⅱ遺跡>

写真図版 2	航空写真、調査区、基本土層	94
--------	---------------	----

<山口遺跡>

写真図版 3	航空写真、基本土層	95	写真図版 7	3号竪穴住居跡	99
写真図版 4	1号竪穴住居跡	96	写真図版 8	1号溝状遺構、1号焼土	100
写真図版 5	2号竪穴住居跡	97	写真図版 9	1号～3号柱穴状土坑、調査区	101
写真図版 6	3号竪穴住居跡	98			

<小川屋敷遺跡>

写真図版 10	航空写真、1号竪穴住居跡	102	写真図版 16	6号・7号竪穴住居跡	108
写真図版 11	2号竪穴住居跡	103	写真図版 17	1号住居状遺構、1号井戸跡	109
写真図版 12	2号竪穴住居跡	104	写真図版 18	1号～3号・5号土坑	110
写真図版 13	3号竪穴住居跡	105	写真図版 19	4号・6号～9号土坑、2号焼土	111
写真図版 14	4号竪穴住居跡	106	写真図版 20	1号・3号～6号焼土、基本土層	112
写真図版 15	5号竪穴住居跡	107			

<六日市遺跡>

写真図版 21	航空写真	113	写真図版 24	1号竪穴住居跡	116
写真図版 22	調査前風景、調査区	114	写真図版 25	1号竪穴住居跡	117
写真図版 23	調査区	115	写真図版 26	2号竪穴住居跡	118

写真図版 27	2号堅穴住居跡	119	写真図版 29	3号陥し穴状遺構、1号溝跡ほか	121
写真図版 28	1号焼土、1号・2号陥し穴状遺構	120			

<八天北遺跡>

写真図版 30	航空写真、遺跡遠景	122	写真図版 37	中央部調査区(4)	129
写真図版 31	調査前風景	123	写真図版 38	中央部調査区(5)、1号焼土、 1号～4号土坑	130
写真図版 32	調査前風景、基本土層、北部調査区	124	写真図版 39	5号・6号土坑、1号～3号溝跡、 柱穴群(1)	131
写真図版 33	北部調査区	125	写真図版 40	柱穴群(2)ほか	132
写真図版 34	中央部調査区(1)	126			
写真図版 35	中央部調査区(2)	127			
写真図版 36	中央部調査区(3)	128			

遺物

<市の川I遺跡・山口遺跡>

写真図版 41	市の川I遺跡・山口遺跡出土遺物	133
---------	-----------------	-----

<小川屋敷遺跡>

写真図版 42	遺構内出土遺物(1)	134	写真図版 45	遺構内出土遺物(4)	137
写真図版 43	遺構内出土遺物(2)	135	写真図版 46	遺構外出土遺物	138
写真図版 44	遺構内出土遺物(3)	136			

<六日市遺跡>

写真図版 47	遺構内出土遺物(1)	139	写真図版 51	遺構内出土遺物(5)	143
写真図版 48	遺構内出土遺物(2)	140	写真図版 52	遺構外出土遺物(1)	144
写真図版 49	遺構内出土遺物(3)	141	写真図版 53	遺構外出土遺物(2)	145
写真図版 50	遺構内出土遺物(4)	142			

<八天北遺跡>

写真図版 54	出土遺物	146
---------	------	-----

I 調査に至る経過

市の川Ⅰ遺跡・市の川Ⅱ遺跡・山口遺跡・小川屋敷遺跡・六日市遺跡・八天北遺跡は「経営体育成基盤整備事業 更木新田地区」のほか場整備工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

本事業区域は、北上川左岸に広がる北上市と花巻市に跨る水田地帯であり、水田は10 a程度と小さく、用排水路も土水路やコンクリート水路の老朽化により漏水が激しいなど、農作業の効率化が図られず不便をきたしている。

そのため、水田の大区画化、用水のバイブライン化、農道の改良などを行うことで、農作業の効率化、担い手を中心とした大規模経営体系を確立させ、併せて農村環境の改善と農業経営の安定を図るものである。

本事業の施工に係る埋蔵文化財の取扱いについては以下のとおりである。

<市の川Ⅰ遺跡・小川屋敷遺跡>

北上地方振興局農林部農村整備室から平成15年11月26日付北地農整第631号「経営体育成基盤整備事業更木新田地区に関する埋蔵文化財の試掘調査依頼について（依頼）」ほかにより岩手県教育委員会に対して試掘調査依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は、平成15年12月15日～平成18年1月17日にかけて試掘調査を実施し、工事に着手するには発掘調査が必要となる旨を平成17年2月16日付教生第1605号「経営体育成基盤整備事業更木新田地区における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」などにより農村整備室へ回答があった。

<市の川Ⅱ遺跡・六日市遺跡>

北上地方振興局農林部農村整備室から平成16年11月2日付北地農整第556号「経営体育成基盤整備事業更木新田地区における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」ほかにより岩手県教育委員会に対して試掘調査依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は、平成17年1月25日～平成18年1月17日にかけて試掘調査を実施し、工事に着手するには発掘調査が必要となる旨を平成17年2月16日付教生第1605号「経営体育成基盤整備事業更木新田地区における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」などにより農村整備室へ回答があった。

<山口遺跡>

北上地方振興局農林部農村整備室から平成15年11月26日付北地農整第631号「経営体育成基盤整備事業更木新田地区に関する埋蔵文化財の試掘調査依頼について（依頼）」ほかにより岩手県教育委員会に対して試掘調査依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は、平成15年12月15日～平成17年3月1日にかけて試掘調査を実施し、工事に着手するには発掘調査が必要となる旨を平成16年3月30日付教生第2018号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」などにより農村整備室へ回答があった。

<八天北遺跡>

北上地方振興局農林部農村整備室から平成17年10月11日付北地農整第460号「経営体育成基盤整備事業更木新田地区における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は、平成 17 年 10 月 12 日～平成 18 年 1 月 17 日にかけて試掘調査を実施し、工事に着手するには発掘調査が必要となる旨を平成 18 年 3 月 31 日付教生第 1887 号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」などにより農村整備室へ回答があった。

以上の結果を踏まえ、農村整備室は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成 19 年 4 月 2 日付で財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(岩手県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室)

II 遺跡周辺の地理的環境

1 遺跡の位置

市の川 I 遺跡・市の川 II 遺跡・山口遺跡・小川屋敷遺跡・六日市遺跡・八天北遺跡が所在する北上市更木新田地区は北上市北東部の北緯 39 度 20 分 49 秒～39 度 21 分 09 秒、東経 141 度 08 分 44 秒～141 度 08 分 58 秒の地点に位置し、北上山地の北西端部、北上川左岸に立地する。遺跡は国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図「花巻」NJ-54-13-16（盛岡 16 号）および「北上」NJ-54-14-13（一岡 13 号）の図幅に含れる。

北上市は県都盛岡市から南方約 47 km の距離にあり、総面積は 437.55 m²。北に花巻市、南に金ヶ崎町、東に奥州市、西に西和賀町が隣接する。古くから交通の要衝として栄え、藩政時代の黒沢尻は北上川舟運の南部藩最南端の商港であった。平成 3 年 4 月に旧北上市、和賀町、江釣子村の 3 市町村が合併し、現在の北上市となった。

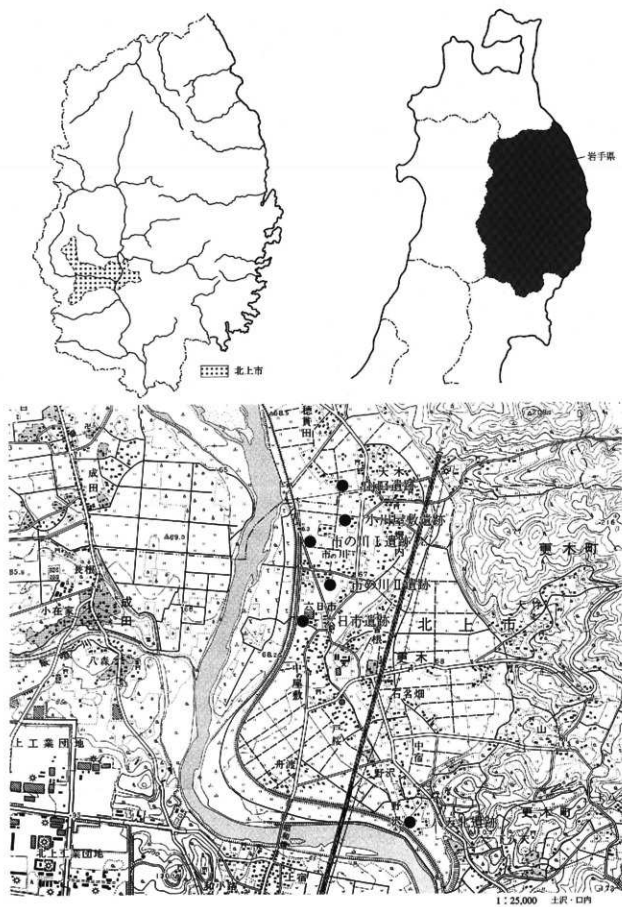
2 地形と地質

遺跡は北上市と花巻市の東側を蛇行し、南流する北上川左岸に立地し、地形的には北上川河谷平野に載る。この平野は北上川の流路変遷の過程を示す谷底平野及び氾濫平野や自然堤防、旧河道などで構成され、一様に低平ではない低地が発達している。この北上川河谷平野を境にして東西で地形は大きく異なり、対照的な様相を呈する。北上川より東側は早池峰山（標高 1,914 m）を最高峰に剣ヶ峰（1,827 m）・中岳（1,679 m）・鶏頭山（1,445 m）・毛無森山（1,427 m）などの高山が東西に連なった「早池峰連峰」を形成する北上山地が広がるが、遺跡周辺は北上山地の西縁丘陵地域で、比較的なだらかな山地が広がり、水乞山（287 m）・物見山（294 m）・明神岳（356 m）・館山（329 m）などの低山が概ね標高 300 m 前後、丘陵地は標高 150～300 m の中小起伏山地帯が広がっている。また、地質は花崗岩類・蛇紋岩・安山岩で構成される古生層と砂層・頁岩で構成される鮮新層を基盤とする山地や丘陵地が入り組んで発達している。対して北上川西側は、急峻で起伏の大きな奥羽山脈が分布し、その東側の断層崖下には奥羽山脈から発した急勾配の支流が北上川へ合流する。ゆえに砂礫の堆積は著しく、扇状地性台地が発達している。

表層地質においても地形同様に北上川河谷平野を境として東西で対照的な様相を呈している。北上山地側では第三紀の安山岩質岩石が大部分を占め、奥羽山脈側では沖積世の砂礫層を挟むように第四紀のロームが広がっている。遺跡のある北上川河谷平野は未固結堆積物である沖積世の砂礫層で構成されている。（藤原）

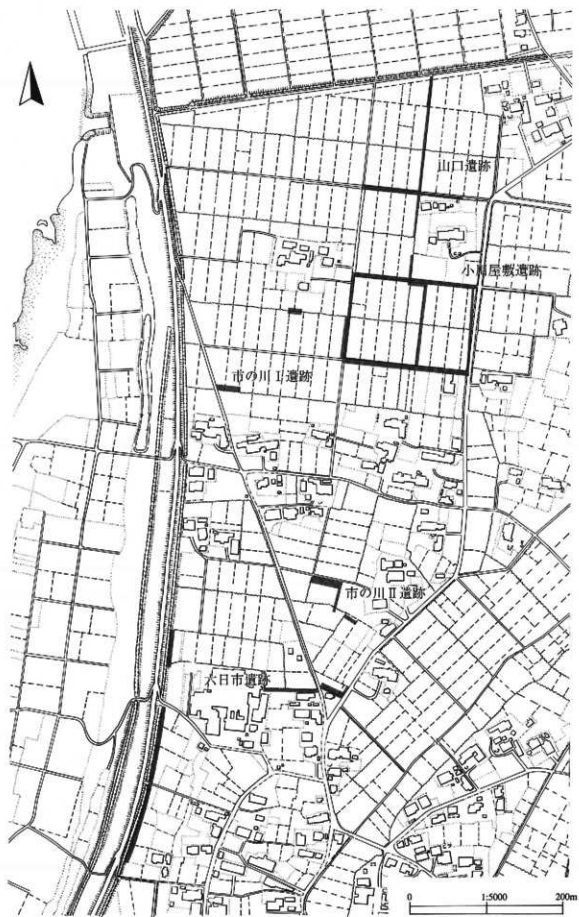
参考文献

- 岩手県企画開発室（北上山系開発） 1976 『北上山系開発地域 土地分類基本調査 花巻』
岩手県企画開発室（北上山系開発） 1976 『北上山系開発地域 土地分類基本調査 北上』

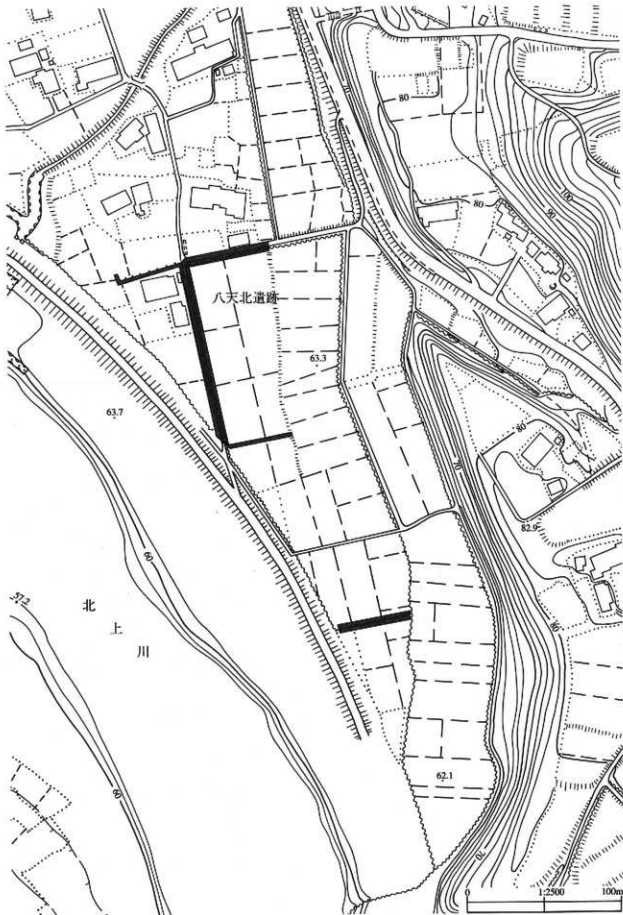


第1図 遺跡位置図

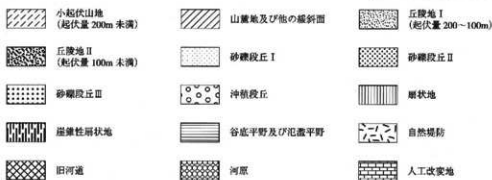
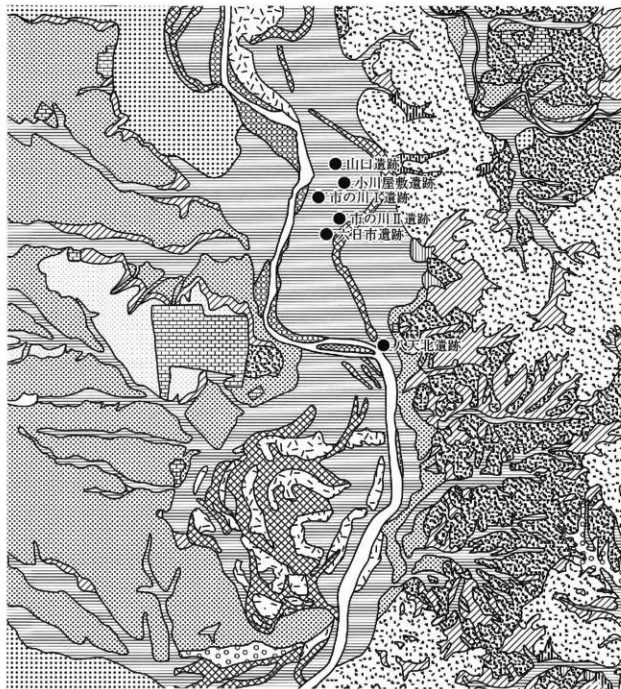
1 遺跡の位置



第2図 周辺地形と調査範囲①



第3図 周辺地形と調査範囲②



第4図 地形分類図

3 遺跡周辺の歴史的環境

(1) 北上市の遺跡

平成 17 年 3 月現在、岩手県教育委員会が作成した「岩手県遺跡情報検索システム（花巻・北上地方振興局管内）」によれば、北上市内では 498 箇所、遺跡が登録されている。時代別の内訳は旧石器時代 3 箇所、縄文時代 239 箇所、弥生時代 3 箇所、古墳時代が 3 箇所、奈良・平安時代 153 箇所、古代 19 箇所、中世 55 箇所、近世 8 箇所等となっており、縄文時代の遺跡が全体の半数近い約 48% を占める。遺跡のある北上川の沖積平野上には主に古代の集落遺跡が多く、東側の北上山地縁辺部にあたる丘陵地上には縄文時代の遺跡や中世城館があり、全体としては、沖積平野に占地する縄文時代の遺跡は段丘あるいは山地に位置する遺跡に比べて少ない傾向にある。

(2) 周辺の遺跡

更木地区とその周辺には、縄文時代から近世にかけての遺跡が多く分布している。特に平安時代の集落跡や中世城館跡が多く見受けられるが、そのなかには縄文時代・弥生時代などを含む複合遺跡もあり、古来より人々が生活の場として利用し続けていたことがわかる。周辺の遺跡分布図（第 5 図）には今回調査を行った遺跡周辺に分布する北上市に所在する 83 遺跡を掲載した。

今回、調査を実施した市の川Ⅰ遺跡・市の川Ⅱ遺跡・山口遺跡・小川屋敷遺跡・六日市遺跡・八天北遺跡からは、縄文時代の陥し穴や平安時代の竪穴住居跡などが検出され、縄文時代には狩場、平安時代には生活の場として利用されていたことがわかった。ここでは、更木地区とその周辺の遺跡を中心に時代ごとに概観していきたい。

縄文時代の遺跡で注目されるのは、国指定史跡になっている八天遺跡である。八天遺跡は、縄文時代中期後半から後期にかけての集落跡であり、巨大な円形の大形住居跡や仮面に用いられたと思われる土製の耳・鼻・口といった土製品、大量の焼人骨が発見されている。特に円形大形住居跡は、円形住居としては縄文時代最大級の例である。また、更木地区とは離れるため図には示していないが、北上市の著名な縄文時代の遺跡として、樺山遺跡と九年橋遺跡が挙げられる。樺山遺跡は、北上市稲瀬町に所在し、縄文時代中期の配石遺構群として知られている。九年橋遺跡は、縄文時代晩期後半の遺跡とされ、日常生活を営んでいた痕跡があまりみられないのにも関わらず、大量の土器が出土していることが注目される。土器には日常的に使用されたものと祭祀用のものがあり、他にもさまざまな道具が出土している。更木地区の周辺には、他にも童子洞遺跡、神行田遺跡、根岸遺跡など多くの縄文時代の遺跡が見つかる。

弥生時代から古墳時代・奈良時代には目立った集落跡は見受けられないが、律令国家の支配下に置かれる 9 世紀以降になると再び北上川流域を中心として多くの集落が営まれるようになる。平安時代の集落跡は 9 世紀から 10 世紀にかけてのものが多く、今回調査した遺跡もこの時期に相当し、他にも秋子沢遺跡、下川端遺跡、西川日遺跡、堰向Ⅱ遺跡などの集落跡が存在する。秋子沢遺跡では、竪穴住居跡が 16 棟検出されており、土師器・須恵器の他に緑釉陶器の破片や刀子、鉄製紡錘車などが出土している。須恵器には、「永」「十」などと墨書されているものもあり、当時の有力者が住む大規模な集落跡であったことがうかがえる。西川日遺跡では竪穴住居跡や掘立柱建物跡など多くの遺構が検出されている。遺物は土師器や須恵器があり、1 棟の竪穴住居跡からは土鍾が 300 点近く出土している。堰向Ⅱ遺跡でも竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されており、土師器や須恵器の他に施釉陶器や硯など特徴的な遺物が出土しているため、隣接する西川日遺跡とあわせて当時の拠点的な集落であったと

される。また、11世紀には国見山麿寺を中核として寺院が建てられるが、更木地区周辺の古代寺院跡としては大竹麿寺跡と白山麿寺跡がある。大竹麿寺跡は更木地区大竹の標高180mの山頂付近に所在し、桁行5間、梁間4間の巨大な堂宇の跡が検出された。金堂跡と推定されているその堂宇からは、土師器や須恵器、須恵系土器などの遺物の他に鉄鐘も出土している。白山麿寺跡は、白山権現の十一面観音像を鎮守とした寺院である。移動されている礎石もあるが、桁行き約11間、梁行き約5間、礎石が径4尺という瓦葺きの経蔵をもった11世紀頃の寺院であることがわかっている。

中世になると梅ヶ沢館、天王館、下欠野館、三坊木館など中世の城館が多く築かれるようになる。天王館では空堀・主郭・腰郭が、下欠野館では主郭と堀跡が確認されている。また、更木地区には和賀郡を治めていた中世領主である和賀氏の本城であったとされる更木館があったが、開田工事によってその形状が失われているため詳細は不明である。和賀氏は黒岩城から更木館に移り、最後に二子の地に城を構えたといわれている。それが、和賀氏の最後にして最大の城館であった二子城跡（飛勢城跡）である。今回、更木地区と北上川を挟んで対岸にある成田地区で調査した成田岩田堂館遺跡のある地域も、二子城跡の搦手としての機能を果たしていたとされ、古くから馬場野という地名も残っている。また、和賀氏の家臣であった成田藤内の居館があったと伝えられており、建物跡も検出されている。二子城跡は、天正18(1590)年の奥州仕置によって、和賀氏が追放されるまで本城としての役割を果たしていた。周辺には家臣屋敷や寺社、城下町も存在し、政治的・経済的にも重要な役割を担っていたと考えられている。県内最大の中世墓である五輪壇遺跡は、和賀領主の墓である可能性が高いとされている。土壇の上には五輪塔が建てられ、その土壇の中に何体もの火葬骨がおさめられている。そして、その土壇を囲むように二重の塚が巡るという大規模な墓である。中世の墳墓には、他にも上川端塚群、四十九里田遺跡などがある。上川端塚群は、方形や円形の塚が8基以上現存しており、土葬墓で中世末～近世前半のものと推定されている。

近世においては、調査例が少なく、調査されていても遺跡内に散在する程度で詳細は不明な場合が多い。ここでは、成田・二子地区にある一里塚についてふれておきたい。県指定史跡の二子一里塚と成田一里塚である。この二つの一里塚は、慶長9(1604)年に江戸幕府によって全国の主要道路を整備した際に築かれたもので、塚が対になった状態で当初の原形を保ったまま残っている。特に成田一里塚には、塚を築いたときに植えられたとされるエノキが残っており貴重である。全国的にも珍しく、当時の交通史を考えるうえでも重要な遺跡である。

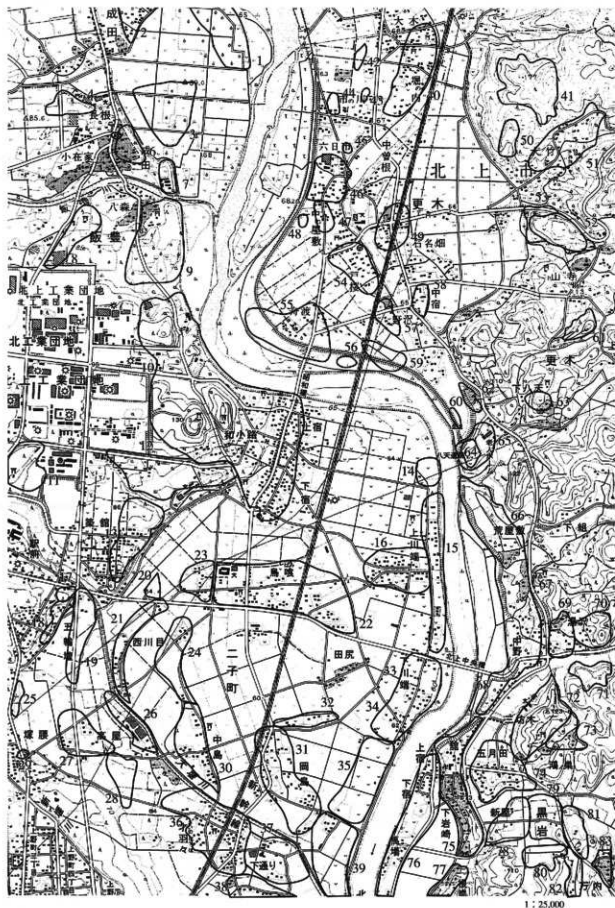
(田中)

参考文献

- 北上市 1968 『北上市史』第1巻 原始・古代(1)
 北上市立博物館 1984 『鶴文人の祈り―樺山・八天・九年橋―』北上市川流域の自然と文化シリーズ(6)
 北上市立博物館 1986 『古代仏教の盆地 国見山極楽寺』北上市川流域の自然と文化シリーズ(8)
 北上市立博物館 2000 『和賀氏一族の興亡』(総集編)『紋路の世界と一所懸命の拠点―城館の時代』
 北上市川流域の自然と文化シリーズ(21)

第1表 周辺の遺跡一覧表

No	遺跡名	類別	時代	遺構・遺物など	No	遺跡名	類別	時代	遺構・遺物など
1	成田Ⅰ	散布地	古代	土師器、須恵器	45	寺の川Ⅱ	散布地	平安、近世	土師器、陶磁器
2	成田Ⅱ	散布地	古代	土師器、須恵器	46	六日市	散布地	平安、近世、弥生、弥生	土師器、陶磁器、弥生土器
3	成田Ⅲ	散布地	平安	土師器	47	中の屋敷Ⅰ	散布地	平安	土師器
4	小学校西	集落跡	平安	土師器、須恵器、方頭人刀残欠	48	中の屋敷Ⅱ	散布地	平安	土師器
5	成田一思院	一思院	近世	一思院2基	49	石谷嶺	散布地	平安	須恵器
6	下成田	散布地	平安	縄文土器、須恵器	50	大森	散布地	平安	土師器、須恵器
7	成田堀	城跡跡	中世	-	51	童子洞	散布地	縄文	縄文土器(後期)、石器
8	成田	散布地	古代、縄文	縄文土器、土師器、須恵器、土坑	52	山田	散布地	縄文	縄文土器、石器
9	成田曹田堂跡	集落跡	縄文、古代、中世	縄文土器、石器	53	更木橋	城跡跡	中世	墨彩、墨切
10	二子城跡	城跡跡	中世、縄文	堀、帯柵、縄文土器、陶磁器	54	戸成	散布地	平安、近世、弥生、縄文	土師器、須恵器、弥生土器、縄文土器
11	伊勢	散布地	近世	-	55	舟渡Ⅰ	散布地	縄文、平安	土師器、石器
12	伏子沢	集落跡	平安	壺穴住居跡、土師器、須恵器	56	舟渡Ⅱ	散布地	近世	陶磁器(光澤赤)、加敷地、草が あつたとされる
13	薬師	散布地	平安	土師器、壺穴住居跡	57	野沢Ⅰ	散布地	縄文、平安	縄文土器(後期)、土師器、須恵器
14	上川堀塚群	墳墓	中世	墳丘	58	中曾	散布地	縄文	縄文土器、石皿、石斧
15	上川堀Ⅰ	散布地	平安	土師器、須恵器	59	野沢Ⅱ	散布地	平安	土師器
16	上川堀Ⅱ	散布地	古代	土師器	60	八天北	散布地	平安	土師器
17	五輪塚	塚墓	中世	土壇、冨溝	61	堀ノ沢原	城跡跡	中世	-
18	南田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	62	引久原	城跡跡	中世	-
19	南田Ⅰ	集落跡	縄文、平安	縄文土器、土師器、須恵器、壺穴 住居跡	63	又上原	城跡跡	中世	宇留、主部、墨彩
20	南田Ⅰ	散布地	縄文、古代	土師器、須恵器、石鏡	64	下久野原	城跡跡	中世	主部、墨
21	堀向Ⅱ	集落跡	古代	土師器、須恵器	65	八天	集落跡	縄文	縄文土器、石器、壺穴住居跡、土 製品
22	馬塚Ⅰ	集落跡	古代	土師器、須恵器	66	平沢堀ノ内	城跡跡	中世	墨
23	馬塚Ⅱ	散布地	古代	土師器	67	二杉木	散布地	平安、縄文	縄文土器、土師器、須恵器
24	西川Ⅱ	集落跡	古代	土師器、須恵器	68	三杉木堀	城跡跡	中世、縄文	縄文土器、土師器、須恵器
25	明神Ⅰ	散布地	古代	土師器	69	湯沢Ⅰ	散布地	古代	土師器、須恵器
26	明神Ⅱ	散布地	古代	土師器	70	湯沢Ⅱ	散布地	縄文、中世	縄文土器(中期)
27	高野Ⅰ	散布地	古代	須恵器	71	神好川	散布地	縄文	縄文土器(中期、晩期)、石器
28	高野Ⅱ	散布地	古代	須恵器	72	湯沢Ⅲ	散布地	縄文、平安	縄文土器、かわらけ
29	二子一草塚	塚墓	近世	一思院2基	73	湯沢Ⅳ	散布地	古代	土師器、須恵器
30	中島	散布地	古代	土師器	74	白山庵寺跡	寺院跡	平安	布目瓦、かわらけ、石製物跡
31	西島	散布地	古代	土師器、須恵器	75	思岩城跡	散布地	縄文、中世、平安	縄文土器(中期)、かわらけ、陶磁器、 墨、主部、墨彩
32	相野野	散布地	古代	土師器	76	思岩	集落跡	縄文、弥生、平安	縄文土器、弥生土器、かわらけ、 寄附
33	下川原	集落跡	平安	土師器、須恵器	77	旗井	散布地	縄文	縄文土器、須恵器、石斧、石鏡
34	沢引	集落跡	平安	土師器、須恵器	78	曹田	集落跡	縄文、古代	縄文土器、70ナ、土師器、須恵器、 かわらけ、壺穴住居跡
35	中村	集落跡	平安	縄文土器、土師器、須恵器	79	四十九星Ⅰ	散布地	縄文、平安	縄文土器、土師器
36	野田Ⅰ	散布地	縄文、弥生、平安	縄文土器(後、晩期)、弥生土器、 土師器、須恵器					
37	中宗廟Ⅱ	散布地	縄文、古代	縄文土器、土師器					
38	中宗廟Ⅰ	散布地	古代	土師器					
39	千刈	集落跡	平安	弥生土器、土師器、須恵器					
40	大木原の内	散布地	平安	土師器					
41	大竹薬寺跡	寺院跡	平安	土師器、須恵器、旗					
42	川口	散布地	平安	土師器					
43	小川薬敷	散布地	平安	土師器、須恵器					
44	馬の川Ⅰ	散布地	平安	土師器、須恵器					



第5図 周辺の遺跡分布図

Ⅲ 調査の経過と方法

1 野外調査の経緯

- 4月10日 市の川Ⅰ遺跡・山口遺跡・六日市遺跡調査開始。現場設営・環境整備。
4月11日 基準点設置。(～5月31日まで順次)
4月16日 市の川Ⅰ遺跡調査終了。
4月17日 市の川Ⅱ遺跡調査開始。
4月25日 市の川Ⅰ遺跡・市の川Ⅱ遺跡終了確認。
4月27日 市の川Ⅱ遺跡調査終了。
5月1日 八天北遺跡調査開始。プレハブ設置・環境整備。
5月11日 山口遺跡終了確認。
5月16日 市の川Ⅰ遺跡・市の川Ⅱ遺跡・山口遺跡・六日市遺跡航空写真撮影実施。
5月18日 山口遺跡調査終了。
6月7日 八天北遺跡終了確認。
6月8日 八天北遺跡調査終了。
6月27日 小川屋敷遺跡・八天北遺跡航空写真撮影実施。
7月6日 小川屋敷遺跡終了確認。
7月11日 更木・新山地区調査遺跡周辺の地権者を対象とした現地説明会。(24名参加)
7月13日 小川屋敷遺跡調査終了。現場撤収。
(*終了確認はいずれも委託者・岩手県教育委員会・埋文センターの3者による)

2 野外調査の方法

(1) グリッドの設定

＜市の川Ⅰ遺跡・市の川Ⅱ遺跡・山口遺跡・小川屋敷遺跡・六日市遺跡＞

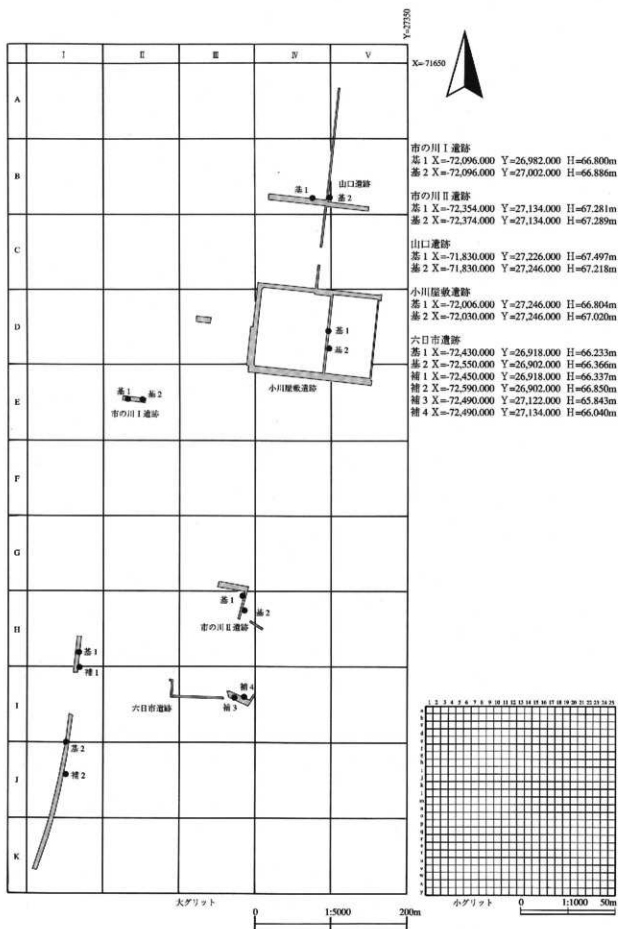
平面直角座標第X系の $X=-71,650,000$ 、 $Y=26,850,000$ を原点として $100 \times 100m$ の大グリッドを設定し、これを25等分し、 $4 \times 4m$ の小グリッドとしている。大グリッドの呼称は原点を起点に南方向へA～K、東方向へI～V、小グリッドの呼称は南方向へa～y、東方向へ1～25としている。小グリッドの呼称はIA1aとなる。

＜八天北遺跡＞

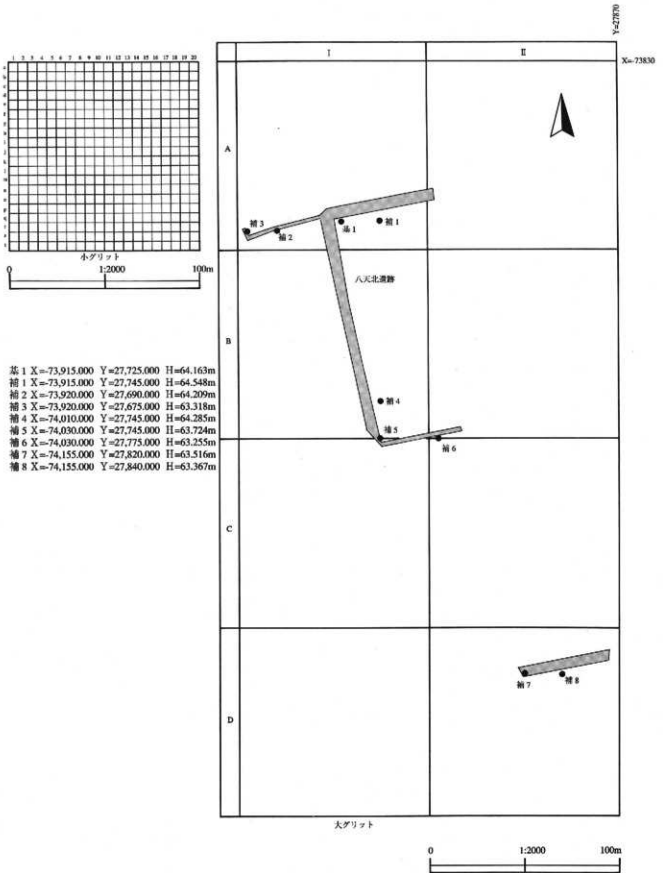
平面直角座標第X系の $X=-73,830,000$ 、 $Y=27,670,000$ を原点として $100m$ の大グリッドを設定し、これを20等分し、 $5m$ の小グリッドとしている。大グリッドの呼称は原点を起点に南方向へA～K、東方向へI～V、小グリッドの呼称は南方向へa～t、東方向へ1～20としている。小グリッドの呼称はIA1aとなる。

(2) 基準点の設定

遺構の実測に利用するため調査区内に基準点および補助点を株式会社キタテックに委託して打設した。各基準点および補助点の成果値と杭高は各遺跡のグリッド配置図(第6・7図)に付した。これらはいずれも世界測地系によるものである。



第 6 図 市の川Ⅰ・市の川Ⅱ・山口・小川屋敷・六日市遺跡グリッド配置図



第7図 八天北遺跡グリッド配置図

(3) 表土除去と遺構の検出

各遺跡の調査に先立って、県教委生涯学習文化課による事前の試掘調査が実施されている。この試掘により調査対象区内の水田・畑・未舗装道路などに盛土・耕作土が厚く堆積し、その下層に古代の遺構・遺物が包蔵されている層が確認されたため、表土除去は重機で行い、その後人力による遺構検出を行った。また、古代の遺構・遺物がない箇所についてはさらに重機で下層まで掘り下げ、縄文時代の遺構・遺物の有無を確認した。

(4) 遺構の精査と実測

調査で検出された遺構は以下の手順で調査を進めた。竪穴住居跡は4分法で土坑類・焼土遺構は二分法で行い、埋土の堆積状況の確認を行いながら掘り下げた。柱穴状土坑については検出時に柱痕を確認し、光波トランシット使用による平面図に作成後、セクションベルトを掛け、断面確認→完掘の順で作業を行った。平面図の作成は市の川Ⅰ遺跡・市の川Ⅱ遺跡・山口遺跡・小川屋敷遺跡では株式会社CUBICの遺構実測支援システムを使用して行った。

(5) 遺物の取り上げ方

遺物の取り上げは遺構内と遺構外に大別し、遺構内出土遺物については遺構名と相対的層位(検出面・上位・中位・下位・底面)を記し、遺構外出土遺物についてはグリッドおよび出土層位を記して取り上げたが、この際、グリッドをまたいで取り上げたものについてはグリッド名を複数記した。また、取り上げに際しては事前に必要に応じて出土地点の座標値の測量および写真撮影を行っている。

(6) 写真撮影

調査記録用に35mmモノクロームとカラーズライド各1台(六日市遺跡、八天北遺跡はカラーズライドの代わりにデジタルカメラ)、モノクローム6×7cm判カメラを使用した。また、調査時の補助としてデジタルカメラを使用した。撮影にあたって、整理時の混乱を防ぐため撮影内容を記入した撮影カードを対象遺構撮影前に撮影している。その他、調査期間中にセスナ機による航空写真撮影を実施した。

3 室内整理の手順と方法

(1) 作業経過

各遺跡の室内整理期間は前述の例言のとおりで、整理作業は出土遺物の洗浄と遺物の仕分けは野外調査と平行して現地および室内で行った。また、土器の接合・復元作業・実測図作成・拓影作成などの作業は室内で行った。整理担当者はこれらの作業の確認・点検と平行して、図面合成・原稿執筆・各種観察表の作成等の作業を実施した。

(2) 遺物

現場で洗浄した遺物の注記作業から開始し、続いて接合・復元を行った。その過程で本書に掲載するものを抽出し、それらの実測図を作成、トレースした。抽出にあたっては遺構内のものについては小破片でもなるべく掲載するようにした。遺構外のものについては出土地点・層位などを考慮して選別した。実測と平行して、これらを撮影し、合わせて登録作業を行った。

(3) 遺構

実測図を点検・合成しながら遺構の検討を行った。その後、第2原図を作成し、そのトレースを行った。また、野外調査で撮影した遺構の写真も整理し、台帳登録をしている。その後、掲載するものを抽出し、トリミングなどを行った後に写真図版とした。

(4) 掲載図

<山口遺跡・小川屋敷遺跡>

掲載している遺構の縮尺は平面図・断面図ともに竪穴住居跡は 1/60・1/50、住居状遺構・土坑・焼土・井戸跡・溝状遺構・柱穴状土坑は 1/40 とした。また、遺物掲載は土器は 1/3、金属遺物 1/2、剥片石器 1/2 を基本とした。ただし、一部異なるものもあるため、各図にスケールおよび縮尺を付した。また、図中において土器は「p」、石器・礫は「s」と表記した。スクリーントーンの使用は凡例図(第8図)のとおりであるが、これ以外の使用については使用箇所にも用例を表記した。なお写真図版については縮尺不定である。各遺構の計測値表記については土坑類は長軸×短軸、竪穴住居跡は同時期に使用されているカマドの主軸(煙道部)方向に平行する面×主軸と直交する垂線を有する面である。

〔遺構〕



焼土

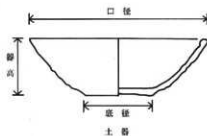


炭化材



柱

〔遺物〕



土器



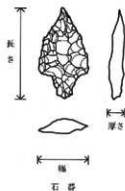
須恵彩



黒色焼流



須恵ナデ



石器



ミガキ



ヘラナデ



ヘラナズリ

第8図 凡例図

Ⅳ 市の川Ⅰ遺跡

1 遺跡の立地

遺跡は北上市の北東部、JR東北本線村崎野駅から北東約3.7kmに位置し、北上川によって形成された自然堤防上に立地する。遺跡の標高は66m前後で、調査前の現況は水田である。

2 基本土層

ⅡE 12m～ⅡE 13mグリッドに跨る南側壁面を基本土層とした。調査区は東西約30m×南北約5mと狭く、調査区内における層序の相違は見られない。第Ⅰ層の耕作土で第Ⅱ層以下は北上川の洪水による影響を受けた堆積層で、第Ⅱ層の上～中位から摩滅の激しい縄文土器片が少量出土した。この第Ⅱ層は山口遺跡第Ⅳ層・小川屋敷遺跡第Ⅴ層と同じく、縄文時代の遺物を包含する層であるが、いずれの遺跡でも出土した土器は小片で摩滅が激しいため、時期の特定ができず、同時期の堆積であるかの判断はできなかった。第Ⅲ層以下からは遺構・遺物は見つかっていない。

詳細については第9図のとおりである。

3 調査の概要

今回の調査は、事業に先立って行われた県教育委員会による試掘調査において遺跡内で遺構等の埋蔵文化財が確認されたために調査を実地したものである。

今回の調査面積は本調査面積 115㎡、確認調査面積 175㎡の計 290㎡で、遺構は検出されない。遺物は縄文土器が少量出土した。

4 出土遺物

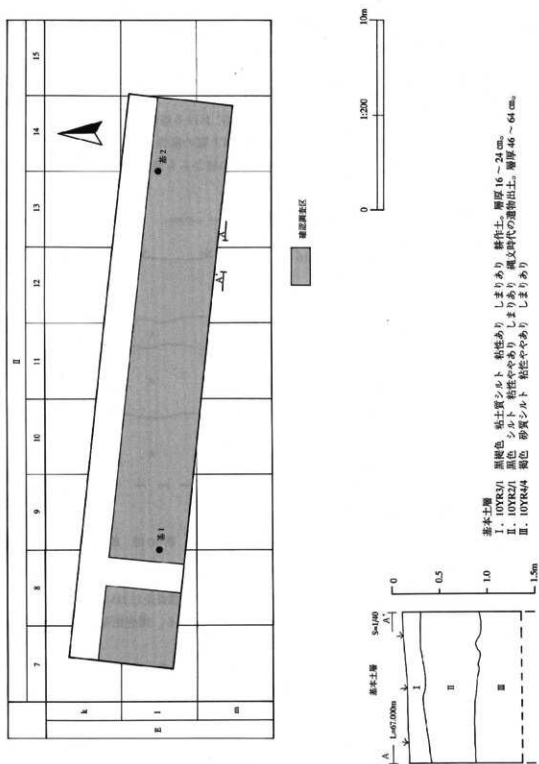
出土した土器は、いずれも小片で表面の摩滅が激しいことから写真のみの掲載である。1は壺か注口土器の体部破片、2～5は深鉢と思われる胴部破片で時期の詳細は不明である。

第2表 土器観察表

No	出土地点・層位	器種	部位	文様・調整		備考	写真
				外面	内面		
1	ⅡE 7 1	Ⅱ層	壺か注口土器	体部	ミガキ		41
2	ⅡE 8 1	Ⅱ層	深鉢	体部		ナデ 摩滅激しい。L線部付近?	41
3	ⅡE 9 1	Ⅱ層	深鉢	体部	R L縄文?	ナデ	41
4	ⅡE 9 1	Ⅱ層	深鉢	体部		ナデ 摩滅激しい。	41
5	ⅡE 9 1	Ⅱ層	深鉢	体部		ナデ	41

5 まとめ

今回の調査では当初予想された古代の遺構・遺物は見つからなかったが、隣接する小川屋敷遺跡では古代の竪穴住居跡が多数検出されており、近隣で集落が営まれていたことが確認されている。また、縄文時代の遺物も本遺跡を含む周辺遺跡からも出土していることなどから、縄文時代の散布地であったことが新たに判明した。



第9図 調査区、基本土層

V 市の川Ⅱ遺跡

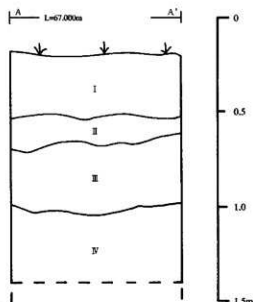
1 遺跡の立地

遺跡は北上市の北東部、JR東北本線村崎野駅から北東約3.6kmに位置し、北上川によって形成された自然堤防上に立地する。遺跡の標高は67m前後で、調査前の現況は水田である。

2 基本土層

IVH3mグリッド東側壁面を基本土層とした。調査区内における層序の相違は見られない。周辺遺跡同様、北上川の洪水による影響を受けた土層堆積で、第Ⅰ層の耕作土下に第Ⅱ層黒色土→第Ⅲ層褐色砂質土→第Ⅳ層褐色土の堆積層序を確認した。いずれの層からも遺構・遺物は確認されておらず、各層の時期を特定することはできなかった。

- 第Ⅰ層：10YR3/1 黒褐色 粘土質土 粘性あり
しまりあり 耕作土。層厚16～24cm。
- 第Ⅱ層：10YR2/1 黒色土 粘性ややあり
しまりあり
- 第Ⅲ層：10YR4/4 褐色 砂質土 粘性ややあり
しまりあり
- 第Ⅳ層：10YR4/4 褐色土 粘性あり
しまりあり



第10図 基本土層

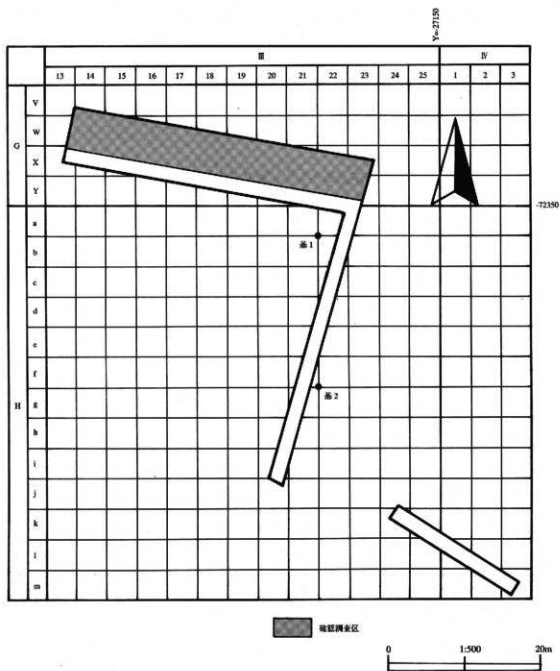
3 調査の概要

今回の調査は、事業に先立って行われた県教育委員会による試掘調査において今回の調査区内、およびその周辺で遺構が確認されたために調査を実地したものである。調査面積は本調査面積200㎡、確認調査面積193㎡の計393㎡である。

調査は事前に行われた県教育委員会による試掘調査によるトレンチを確認しながら、人力による表土除去と検出を行った。試掘時にも確認されていた溝状のプランを検出・精査を行ったが、埋土の状況から現代の水田利用に伴うものと判断した。遺物は出土していない。

4 まとめ

今回の調査では当初予想された古代の遺構・遺物をはじめとする埋蔵文化財は見つからなかったが、隣接する六日市遺跡では古代の堅穴住居跡が見つかっており、本遺跡も集落跡の一部に含まれる可能性が考えられる。



第 11 図 調査区

Ⅵ 山口遺跡

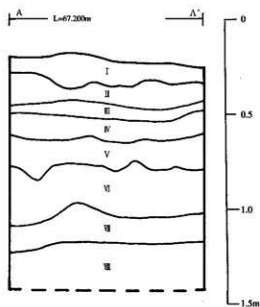
1 遺跡の立地

遺跡は北上市の北東端部にあり花巻市にまたがっている。JR東北本線村崎野駅から北東約4.3 kmに位置し、北上川によって形成された自然堤防上に立地する。遺跡の標高は67m 前後で、調査前の現況は水田である。

2 基本土層

IV B 23 u グリッド北側壁面を基本土層とした。調査区内においては全体に地形による相違はほとんどなく、北上川の洪水による影響を受けた堆積層で、第Ⅰ層の耕作土下に第Ⅱ層の黒色土が堆積し、この面で平安時代の遺構・遺物が確認できる。第Ⅲ層は第Ⅱ層・第Ⅳ層間にあり、これらよりやや薄い黒褐色土層で、場所によっては全くない箇所もある。遺物・遺構を伴わないため時期は判らない。第Ⅳ層からは縄文時代の土器片や石鏃がわずかに出土している。第Ⅴ層以下からは遺構・遺物は見つからない。

- 第Ⅰ層：10YR3/1 黒褐色土 粘性あり しまりあり
耕作土。層厚 8 ～ 18 cm。
- 第Ⅱ層：10YR2/1 黒色土 粘性あり しまりあり
古代の遺構検出面。層厚 6 ～ 17 cm。
- 第Ⅲ層：10YR2/1 ～ 3/1 黒色～黒褐色土 粘性あり
しまりあり 層厚 4 ～ 9 cm。
- 第Ⅳ層：10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりあり
縄文時代の遺物出土。層厚 10 ～ 14 cm。
- 第Ⅴ層：10YR3/2 黒褐色土 粘性なし しまりあり
層厚 10 ～ 22 cm。
- 第Ⅵ層：10YR3/4 暗褐色土 粘性あり しまりあり
層厚 20 ～ 30 cm。
- 第Ⅶ層：10YR4/4 褐色砂質土 粘性ややあり しまりあり
層厚 13 ～ 20 cm。
- 第Ⅷ層：10YR4/4 褐色土 粘性あり しまりあり



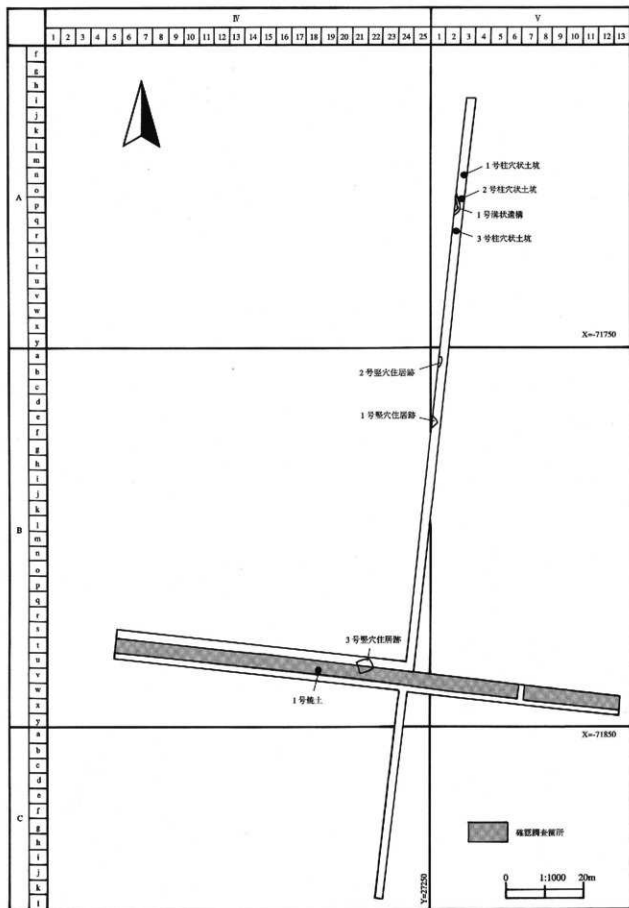
第 12 図 基本土層

3 調査の概要

今回の調査は昨年行った花巻市側調査区の南側にあたり、事業に先立って行われた県教育委員会による試掘調査において今回の調査区を含めた遺跡内で方形周溝・堅穴住居跡等の埋蔵文化財が確認されたために調査を实地したものである。

今回の調査面積は本調査面積795㎡、確認調査面積525㎡の計1,320㎡で、検出された遺構は本調査区から堅穴住居跡3棟（うち1棟は確認調査にまたがる）、溝状遺構1条、柱穴状土坑3個、確認調査区から堅穴住居跡1棟（本調査にまたがる）、焼土遺構1基である。

出土遺物は土器（土師器・須恵器）が小コンテナで1箱、縄文土器2点、金属遺物（刀子）1点である。



第13図 遺構配置図

4 検出遺構と出土遺物

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡(第14図、写真図版4)

<位置・検出・重複関係> VB1e・VB1fグリッドに跨って位置し、表土下の第II層で検出された。重複している遺構はないが遺構の西側が調査区外へと延びている。

<規模> 遺構の大半が調査区外のため、詳細な規模は不明である。

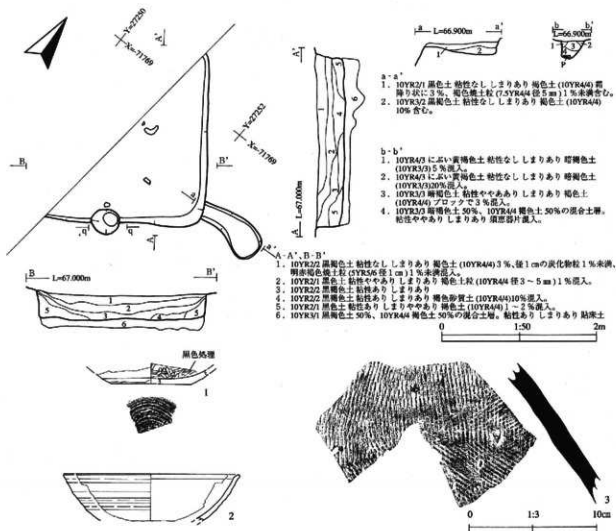
<埋土> 埋土は自然堆積で上～中位は黒褐色土、下位は暗褐色土を主体とする。

<床面・壁面> 床面には黒褐色土と褐色土の混合土によって8～26cmの厚さで貼り床が施され、壁面付近ほど掘り込みが深い傾向であった。壁面は調査で確認できた南東・北東壁面が直立～やや外傾気味に立ち上がる。壁残存値は南東壁面が床面から最大38cm、北東壁面が32cmである。

<カマド> 調査範囲に焼土痕を伴うカマドは検出されていないが、旧カマドの煙道部と思われる溝状の遺構が南東壁面の隅で確認された。埋土の上～中位には焼土粒が混入している。

<遺物> 1～3が出土した。いずれも床面付近からの出土で、1・2はロクロ成形の坏で、1の内面はミガキ調整後に、黒色処理が施されている。3は須恵器甕の体部破片である。

時期 出土した遺物からおおよそ9世紀後半～末葉頃と考えられる。



第14図 1号竪穴住居跡・出土遺物

2号竪穴住居跡 (第15・16図、写真図版5)

〈位置・検出・重複関係〉 VB1a・VB1bグリッドに跨って位置し、表土下の第Ⅱ層で検出された。重複している遺構はないが遺構の西側が調査区外へと延びている。

〈規模〉 遺構の大半が調査区外のため、詳細な規模は不明であるが、検出したカマドの軸方向の壁面の長さは約280cmほどである。

〈埋土〉 埋土の上～中位は黒褐色土を主体とし、褐色・暗褐色砂質土が混合している。下位は黒褐色土と褐色砂質土の混合土から成り、住居床面には板状を呈する炭化物が溶けた状態で混入する。貼り床は黒色・暗褐色土が主体であるが、壁際には褐色砂質土の混入が多くなる。また、さらに下位には旧床面の貼り床土と思われる黒褐色土とにぶい黄褐色土の混合土が確認された。

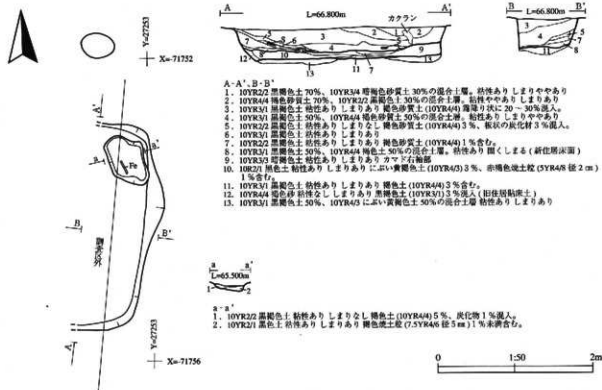
〈カマド〉 調査範囲内でカマドは確認されていないが、煙出部と思われる円形のプランが住居北側(調査区外)で検出された。また、住居の埋土断面(A-A'ベルト)にてカマドの右袖部と思われる暗褐色土の堆積(9層)を確認していることから、北壁にカマドを構築したと推測される。

〈床面・壁面〉 床面には黒褐色土と褐色土の混合土によって8～26cmの厚さで貼り床が施され、確認できた壁面は南東・北東壁で垂直～やや外傾気味に立ち上がる。壁残存値は南東壁が床面から最大38cm、北東壁が32cmである。

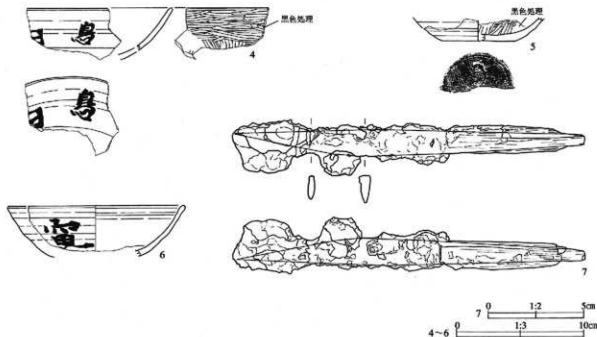
〈土坑〉 北東隅に土坑状のプランを確認した。プランは不整形な形状で径76×54cmの範囲で広がり、深さは6cmと浅く、底面は東側に向かって傾斜して下る。底面からは刀子が出土している。

〈遺物〉 4～7が出土した。4～6は土師器坏で、4・5は住居床面から出土し、内面にはミガキ調整後に黒色処理が施されている。4・6の器面には墨書文字が確認できる。7は土坑から底面から出土した刀子である。

時期 出土した遺物の特徴から9世紀後半～末葉頃と考えられる。



第15図 2号竪穴住居跡



第16図 2号竪穴住居跡出土遺物

3号竪穴住居跡(第17図、写真図版6・7)

<位置・検出・重複関係> IV B 20 u・20 v・21 u・21 v グリッドに跨って位置し、第Ⅱ層で検出された。重複している遺構はないが遺構の南側半分が確認調査区内のため、その部分については検出のみの調査である。また、北東壁隅の一部が調査前に行われた県教育委員会の試掘トレンチによって削平された状況であった。

<規模> 遺構南半分は確認調査区のため検出状況での計測であるが南北 342 cm、東西 366 cm である。

<埋土> 埋土は自然堆積で上～中位は黒褐色土を基調とし、上位には褐色土粒、中位には黄褐色土粒がわずかに混入する。下位は暗褐色土を主体に褐色土がブロック状に混入する層である。

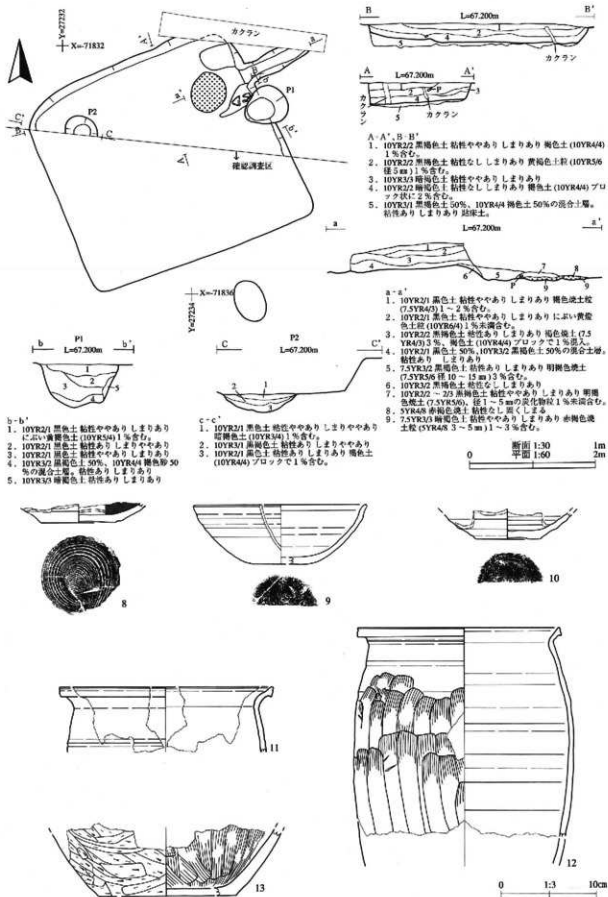
<床面・壁面> 床面は平坦で一部に緩い凹凸がある。壁面は外傾して立ち上がる。床面からの壁残存値は北壁 26 cm、西壁 13 cm、東壁 26 cm である。

<カマド> 北東側の床面に焼土痕を確認し、その東側壁面に煙道部を検出した。また、検出した煙道部の長さは約 100 cm で、東側に向かって傾斜し、やや下る。先端部分が事前の試掘トレンチにより削平され消失していた。カマド袖部については断面による確認を行ったが床面まで確認はできなかったが、遺構全体の写真撮影のためクリーニング作業を行い、柴み状のプランを検出した。その後、遺構南側の確認調査区内で径 58 × 46 cm の楕円形プランを検出した。そのプランには検出段階で焼土粒・炭化粒などの燃焼痕は確認されていないが、位置的にカマドの煙道部の可能性があり、調査した東壁面のカマドは廃棄されたものであると考えられる。

<土坑> 2基検出した。P 1 は東壁に設けられたカマドの右袖部を切って検出された。規模は約 90 × 70 cm、深さは 34 cm である。P 2 は確認調査区との境界で検出したため詳細規模は不明であるが、検出した範囲では径 52 cm、深さは 14 cm を測る。

<遺物> 8～13 が出土した。8～10 は土師器坏で 8 は内面に黒色処理が施されている。11～13 は土師器臺である。9・12 がカマド付近、12 が貼床土からで他は検出面～埋土上位から出土した。

時期 出土した遺物の特徴から 9 世紀後半～末葉頃と考えられる。



第17図 3号竪穴住居跡・出土遺物

(2) 焼土遺構

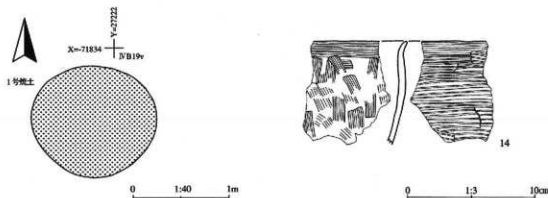
1号焼土 (第18図、写真図版8)

<位置・検出・重複関係> IV B 18 v・19 v グリッドに跨って位置する。表土除去後に第II層で検出した。重複する遺構はない。遺構は確認調査区のため検出のみの調査である。

<平面形・規模> 検出段階で確認した形状は円形基調で、規模は約129×117cmである。

遺物 検出面で土師器甕の口縁部破片が1点(14)が出土している。

時期 検出面および出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。



第18図 1号焼土

(3) 溝状遺構

調査区北端付近で検出した。調査に先立って行われた県教委委員会でも今回検出した遺構の一部と思われるプランを確認しており、これらが同一遺構であれば形状から方形溝の可能性が高い。

1号溝状遺構 (第19図、写真図版8)

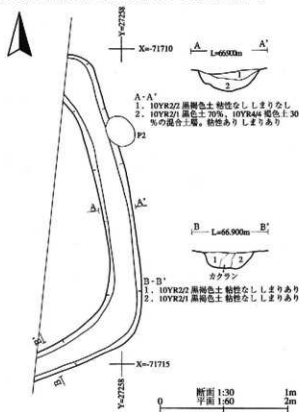
<位置・検出・重複関係> VA 2 p・3 p グリッドに跨って位置する。表土除去後に第II層で検出した。2号柱穴状土坑と重複関係にあり、これに切られる。

<平面形・規模> 「コ」の形状で、調査区外北東方向に180cm、さらに方向を北西に変え、420cmのところで屈曲気味に調査区外へと延びる。幅は42~66cm、深さは12~14cmと浅い。

<底面> 底面は中心部がU字状にないし、緩い凹凸がある。

<埋土> 埋土は2層からなり、黒褐色土を主体とした堆積で底面・側壁面には褐色土が混合する。

時期 検出状況や埋土の状況から古代の遺構と考えられるが詳細は不明である。



第19図 1号溝状遺構

(4) 柱穴状土坑

調査区北側で3個検出した。遺構内から遺物は出土しておらず、いずれも詳細時期は不明である。

1号柱穴状土坑 (第20図、写真図版9)

<位置・検出・重複関係> VA3nグリッドに位置する。表土除去後に第II層で検出した。重複する遺構はないが、遺構の一部が攪乱の影響を受けている。

<平面形・規模> 形状は楕円形を呈し、規模は開口部径 36×22 cm、深さ 20 cm を測る。

<埋土> 埋土は黒褐色土を主体とし、南側は攪乱の影響で褐色砂質土が混入する。

2号柱穴状土坑 (第20図、写真図版9)

<位置・検出・重複関係> VA3pグリッドに位置する。表土除去後に第II層で検出した。1号溝状遺構と重複し、これを切る。

<平面形・規模> 形状は楕円形を呈し、規模は開口部径 52×42 cm、深さ 30 cm を測る。

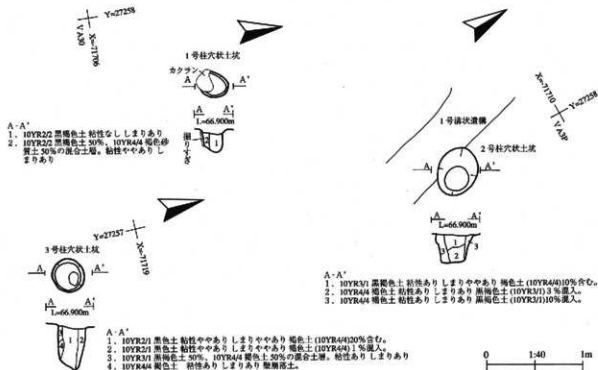
<埋土> 埋土の上位は褐色土粒を少量含む黒褐色土、中～下位は黒褐色土粒を微量含む褐色土が堆積し、壁際では黒褐色土粒がやや多く混入する。

3号柱穴状土坑 (第20図、写真図版9)

<位置・検出・重複関係> VA2rグリッドに位置する。表土除去後に第II層で検出した。重複する遺構はない。

<平面形・規模> 形状は円形を呈し、規模は開口部径 35×34 cm、深さ 47 cm を測る。

<埋土> 埋土は褐色土粒を含む黒色土を主体に構成されている。



第20図 1号～3号柱穴状土坑

(5) 遺構外出土遺物 (第21図、写真図版37)

遺構検出作業中に出土した遺物で、出土した状況から洪水による氾濫や後世の造成工事によって動いた可能性が高い。石敷は第Ⅱ層下の旧沢状地形の検出面からの出土である。縄文土器片は第Ⅳ層から2点出土した。いずれも深鉢の胴部破片であるが、器面は激しく摩滅した状況で詳細時期は不明である。



第21図 遺構外出土遺物

5 まとめ

遺構

今回の調査で検出した遺構は竪穴住居跡3棟、溝状遺構1条、焼土遺構1基、柱穴状土坑3個である。いずれも本文中にも記しているとおり、遺構の一部の調査であったり、確認調査による検出のみの調査のものであるが、3棟検出された竪穴住居跡の構造について補足する。

カマドについては1号竪穴住居跡と3号竪穴住居跡については検出したカマド(煙道部)の状況からカマドを再構築した可能性がある。1号竪穴住居跡は検出した住居のプランに対し、煙道部の位置が壁隅寄り、軸方向も住居軸と異なる方位を向くことから、住居の建て替えと併せ、未調査区部分にある西壁か北壁へ移設したことが推察される。また、3号竪穴住居跡では東壁で検出したカマドの燃焼部付近に焼土が確認できたが、袖部が染み状にしか残存しないことから廃棄されたカマドであると考えられ、確認(検出)のみであるが、煙出部と思われる楕円形のプランが南壁の隣接地で検出されたことから南壁側へカマドを移築した可能性が考えられる。また、床面については1号竪穴住居跡の床面は南壁と東壁際が深く掘られた痕跡があるのに対し、中央部寄りではあまり深く掘られた痕跡が見られないことから、先に述べたカマドの状況と併せて住居を再構築(改築)した可能性が考えられる。2号竪穴住居跡では床面に貼り床が2面確認されたことから、同様に再構築したと考えられるが調査した範囲で時間的な差異までは判らなかった。いずれの住居も埋土に十和田a降下火山灰(To-a)が含まれていないことや出土した遺物から時期は9世紀後葉～末葉頃とした。

遺物

今回の調査で出土した遺物の重量は全体で3076.7gでこのうち2604.9g(84%)が遺構内からの出土である。遺物は土師器坏・土師器甕の破片が大半で須恵器は甕の破片がわずかに出土しているのみで坏は出土していない。また、縄文土器もわずかに出土したが摩滅が激しく、小片のため詳細は不明である。

総括

今回の調査で山口遺跡が縄文時代の土器散布地であること、古代の集落跡であったことが判明した。

周辺の遺跡でも北上川左岸の氾濫平野には縄文・古代の複合遺跡が多く知られており、今回の調査に関わって、本遺跡以外でも小川屋敷・六日市・八天北などの各遺跡で住居跡が確認されており、更木地区に古代の集落が形成されていたことが判明した。

第3表 古代土器観察表

No	出土地点・層位	種類	器種	部位	調整		法量 (cm)			備考	図取	写取		
					外面	内面	口徑	器高	底径					
1	1号壺穴住居跡 埋土下層~床面	土師器	坏	体~底部	ロクロナデ							14 41		
2	1号壺穴住居跡 床面直上	〃	坏	口縁~体部	ロクロナデ							14 41		
3	1号壺穴住居跡 床面	須恵器	甕	体部	タタキメ							14 41		
4	2号壺穴住居跡カ マド付近 床面	土師器	坏	口縁~体部	ロクロナデ						外面に墨書文字あり	16 41		
5	2号壺穴住居跡カ マド付近 床面	〃	坏	体~底部	ロクロナデ 底:回転糸切り							16 41		
6	2号壺穴住居跡 埋土2層	〃	坏	口縁~体部	ロクロナデ						外面に墨書文字あり	16 41		
8	3号壺穴住居跡 検出面	〃	坏	底部	ロクロナデ 底:回転糸切り							6.4	17 41	
9	3号壺穴住居跡 カマド付近	〃	坏	口縁~底部	ロクロナデ 底:回転糸切り							(13.6)	4.7 (4.6)	17 41
10	3号壺穴住居跡 埋土2層	〃	坏	体~底部	ロクロナデ 底:回転糸切り								5.2	17 41
11	3号壺穴住居跡 貼床土	〃	甕	口縁部	ロクロナデ							(17.0)		17 41
12	3号壺穴住居跡 カマド右縁部	〃	甕	口縁~体部	ロクロナデ ヘラナデ(擬)							21.2		17 41
13	3号壺穴住居跡 埋土1・2層・検出面	〃	甕	体~底部	ヘラケズリ								(11.0)	17 41
14	1号焼土 検出面	〃	甕	口縁~体部	口:ロクロナデ 底:ヘラナデ(擬)									18 41

第4表 縄文土器観察表

No	出土地点・層位	種類	器種	部位	調整		備考	図取	写取
					外面	内面			
15	IV B 25 w II層	縄文土器	深鉢	体部	R L縄文	ナデ	粘土に砂较多く含む。	21	41
16	IV B 1 v IV層	縄文土器	深鉢	体部	R L縄文	ナデ	粘土に砂较多く含む。	21	41

第5表 金属物観察表

No	出土地点・層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考	図取	写取
7	2号壺穴住居跡 P 1底面	刀子	18.3	1.4	0.5		16	41

第6表 石器観察表

No	出土地点・層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備考	図取	写取
17	IV B 12 u II層	石磯	2.34	1.30	0.45	0.97	石質		21	41

第7表 土器重量表

遺構内		遺構外			
遺構名	重量 (g)	グリッド	重量 (g)	グリッド	重量 (g)
1号壺穴住居跡	513.6	IV B 12 t	7.9	IV B 12 v	4.7
2号壺穴住居跡	199.9	IV B 13 t	7.5	IV B 14 v	1.1
3号壺穴住居跡	1748.0	IV B 12 u	51.9	IV B 16 v	3.7
1号焼土	143.4	IV B 13 u	117.7	IV B 21 v	3.1
合計	2604.9	IV B 14 u	93.5	IV B 22 v	4.9
		IV B 15 u	20.2	IV B 25 w	16.7
		IV B 21 u	58.8	V B 1 v	29.7
		IV B 11 v	50.4	合計	63.9

Ⅶ 小川屋敷遺跡

1 遺跡の立地

遺跡は北上市の北東部、JR東北本線村崎野駅から北東約4.2kmに位置し、北上川の氾濫によって形成された自然堤防上に立地する。遺跡の標高は66m前後で、調査前の現況は水田および未舗装道路である。

2 基本土層

調査区が広い範囲におよぶため、場所により地形・土層堆積も異なるが、自然堤防高位置に位置し、古代の遺構が多く検出された調査区北側のⅣC19yグリッド南側壁面を基本土層とした。北上川の洪水による影響を受けた堆積層で、第Ⅰ層の耕作土下に第Ⅱ層の黒褐色土が堆積するが遺物・遺構が確認されていないため時期は不明である。第Ⅲ層には黒色土が堆積し、この面で平安時代の遺構・遺物が確認できる。第Ⅳ層は、これらよりやや薄い黒色土層で、調査区北～北西に堆積が確認されたが場所によっては全くない箇所もある。また遺構・遺物を伴わないため時期は判らない。第Ⅴ層は黒色シルトで縄文時代の土器片がわずかに出土している。第Ⅵ層以下からは遺構・遺物は見つかっていない。

第Ⅰ層：10YR3/1 黒褐色土 粘性あり しまりあり 耕作土。層厚20cm前後。

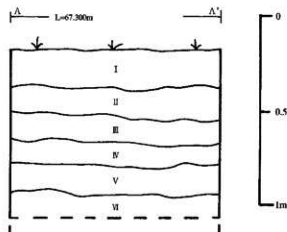
第Ⅱ層：10YR2/2 黒褐色土 粘性なし しまりあり 層厚10～15cm。

第Ⅲ層：10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりあり 層厚15～20cm。古代の遺構検出面。

第Ⅳ層：10YR2/1 黒色土 粘性ややあり しまりあり 暗褐色土(10YR3/3)10%混合。層厚10cm前後。

第Ⅴ層：10YR2/2 黒褐色土 粘性あり しまりあり 縄文時代の遺物出土。層厚15～20cm。

第Ⅵ層：10YR3/4 暗褐色土 粘性あり しまりあり 地山。

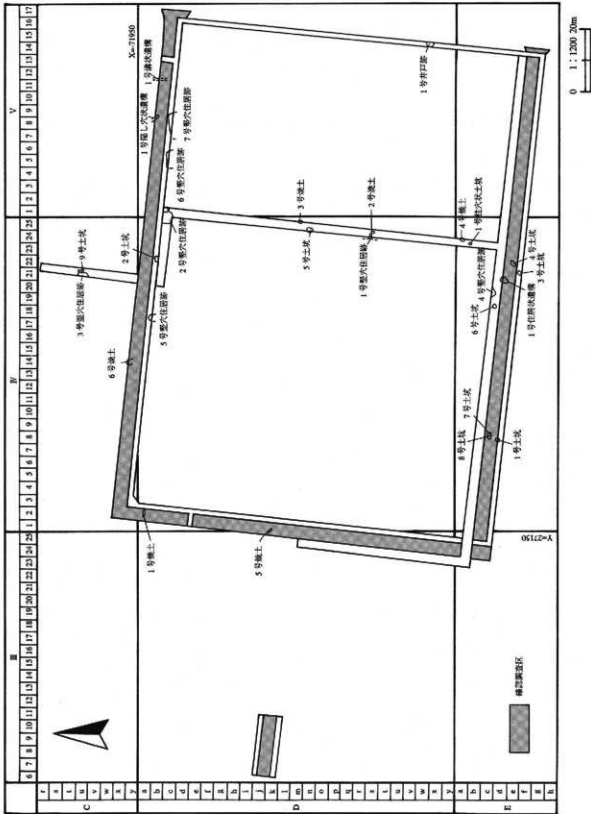


第22図 基本土層

3 調査の概要

今回の調査は、事業に先立って行われた県教育委員会による試掘調査において、今回の調査区を含む遺跡内および遺跡隣接地において堅穴住居跡等の埋蔵文化財が確認されたために調査を実地したものである。

今回の調査面積は本調査面積1,933㎡、確認調査面積1,540㎡の計3,473㎡で、検出した遺構は以下のとおりである。



第 23 図 遺構配置図

本調査区 竪穴住居跡7棟、住居状遺構1棟（確認調査にまたがる）、土坑6基、焼土遺構3基、柱穴状土坑1個、井戸跡1基

確認調査区 住居状遺構1棟（本調査にまたがる）、土坑3基、焼土遺構3基、陥し穴状遺構1基、溝状遺構1条

出土遺物は土器（土師器・須恵器）が大コンテナで2箱、金属遺物（刀子）2点である。他に縄文土器が微量出土している。

4 検出遺構と出土遺物

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第24図、写真図版10）

<位置・検出・重複関係> IVD24sグリッドに位置し、表土下の第Ⅲ層で検出された。重複している遺構はないが遺構大半が西側の調査区外へと延びており、カマド煙道部のみの検出である。

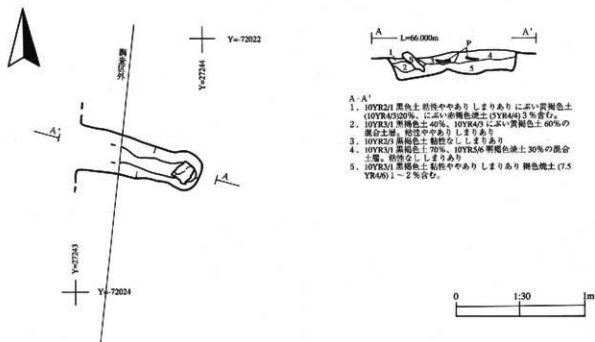
<規模> 遺構の大半が調査区外のため、規模は不明である。

<埋土> カマド煙道部のみの検出で、埋土の上～中位は黒褐色土、下位は暗褐色土が堆積している。煙道部の埋土上位には土器片が混入している。

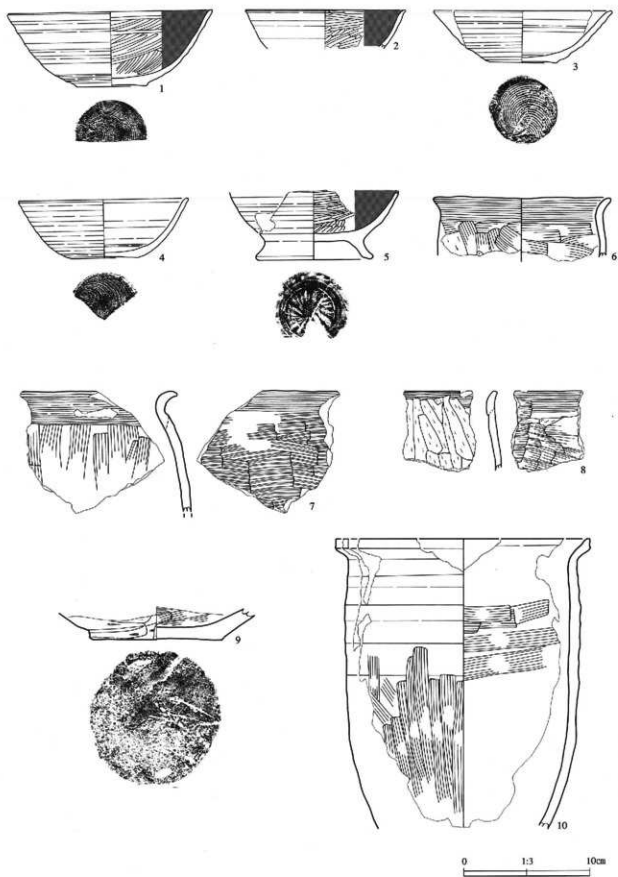
<カマド> カマド煙道部のみの検出で軸方向はE-15°-Sである。煙道部の長さは約100cmで燃焼部側から東へ向かって55cmまでは平坦で、その先から煙出部までは傾斜して下る。

<遺物> 1～10が出土した。10は煙道部埋土3層から出土したが、それ以外は遺構プラン検出時にカマド燃焼部～左袖部付近から出土したものである。1～5はロクロ成形による土師器坏で、5は高台付坏である。1・2・5は内面に黒色処理が施され、1・3・4の底部は回転糸切り痕が残る。6～10は土師器甕で6～8の口縁部外面の調整はヨコナデ、体部は6・7が縦位にヘラナデ、8はヘラケズリが施される。10は口縁部が屈曲し、外面はロクロ使用による整形後、体部下半に縦位のナデを施している。

時期 出土した遺物から9世紀後葉～10世紀前葉頃に属すると考えられる。



第24図 1号竪穴住居跡



第 25 図 1 号竪穴住居跡出土遺物

2号竪穴住居跡 (第26・27図、写真図版11・12)

<位置・検出・重複関係> IV D25b・IV D25c・VD1b・VD1cグリッドに跨って位置し、第Ⅲ層で検出された。重複している遺構はない。

<形状・規模・主軸方向> 形状は方形で、規模は北壁―南壁間が326cm、東壁―西壁間が308cmである。主軸方向はE-4°-Sである。

<埋土> 埋土は自然堆積で上～中位は黒褐色土、下位は黒色土とにぶい黄褐色土の混合土が堆積している。

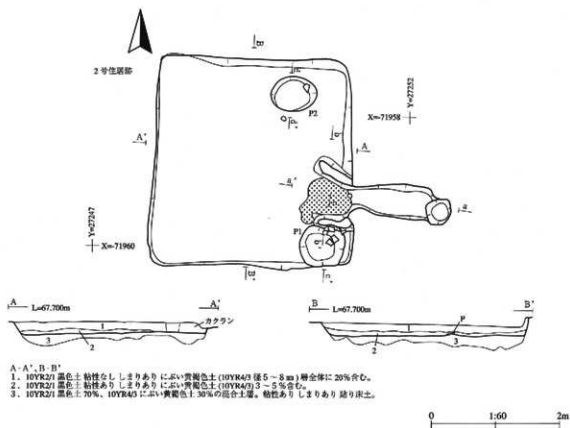
<カマド> カマドは東壁の中央より南側に構築されている。カマド袖部は黒褐色土とにぶい黄褐色土の混合土による。燃焼部には約82×58cmの範囲に焼土粒の広がり方が確認され、焼土の厚さは最大で4cmである。煙道部はほぼ平坦で長さは約123cm、検出面からの深さは22～26cmである。煙出部はピット状を呈し、径40×40cm、深さ72cmを測る。

<床面・壁面> 床面はほぼ平坦で、黒褐色シルトと褐色シルトの混合土によって6～24cmの厚さで貼り床が施される。壁面はいずれも外傾して立ち上がり、壁面残存値は東壁20cm、西壁8cm、南壁30cm、北壁18cmであるが、南壁以外は遺構検出時に確認が遅れて削平したものである。

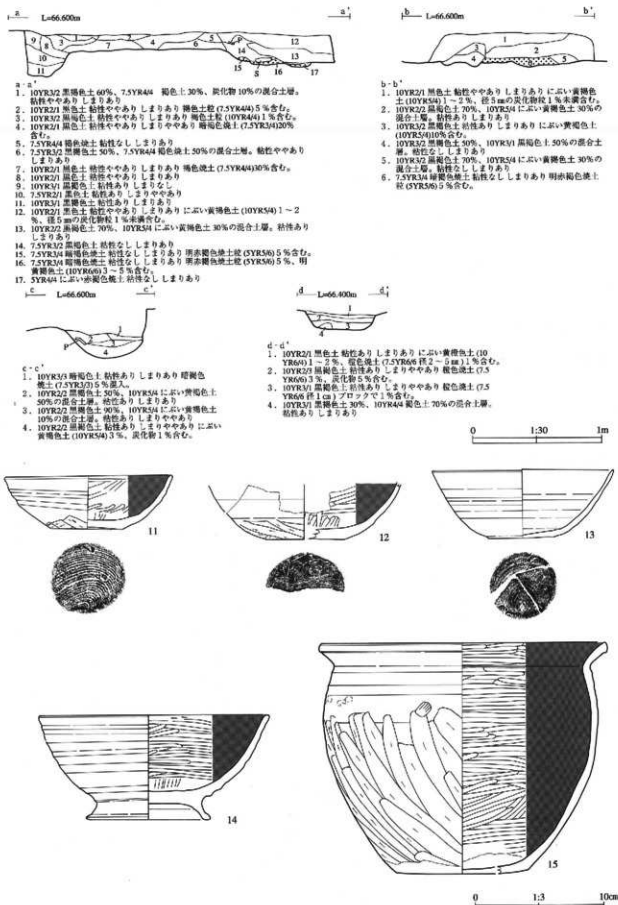
<土坑> 2基検出した。形状はいずれも円形基調で、規模はP1は径70×60cm、深さ20cm、P2は径72×54cm、深さ12cmである。P2からは土師器甕(15)が出土した。

<遺物> 11～15が出土した。11は床面直上、12は埋土1層、13・14はカマド燃焼部、15はカマド南側の土坑内(P1)からそれぞれ出土した。11～14は土師器坏で14は高台付坏である。11・12・14の内面は黒色処理が施され、11・12の体部下半にはケズリが施されている。15は土師器甕で器面調整は外面がロクロナデ後ヘラケズリ、内面はミガキ後黒色処理が施されている。

時期 出土した遺物から9世紀後葉～末葉頃と考えられる。



第26図 2号竪穴住居跡



第27図 2号竪穴住居跡・出土遺物

3号竪穴住居跡(第28・29図、写真図版13)

<位置・検出・重複関係> IV D 21 u グリッドに位置し、表土下の第Ⅱ層で検出された。重複している遺構はないが遺構の西側約2/3以上が調査区外である。

<形状・規模・主軸方向> 形状は方形と推測される。規模は遺構の大半が調査区外のため不明である。主軸方向は検出したカマド煙道部にあわせてとN-71°-Eであるが、検出したカマドは袖部などが除去されていたため、他に改めて構築されたものと考えられるため、住居廃棄時の状態は不明である。

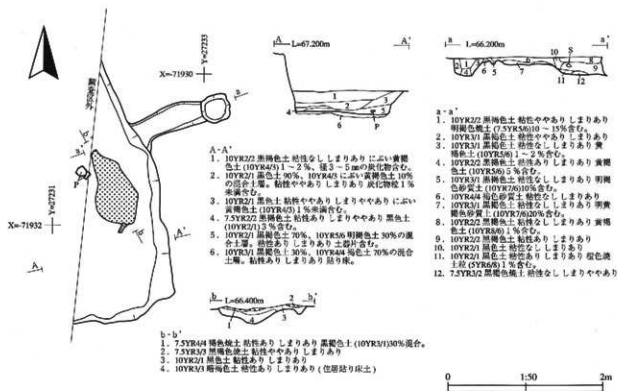
<埋土> 埋土は自然堆積で上位・下位は黒褐色土、中位は黒色土を主体とする堆積である。

<カマド> カマドは東壁の中央よりやや北側に構築されている。カマド袖部は除去され、燃焼部と想定される箇所には約108×56cmの範囲に焼土粒の広がり確認できるが、やや南側に位置がずれる。焼土の厚さは最大で4cmである。煙道部はほぼ平坦で長さは約90cm、検出面からの深さは22～26cmである。煙出部はピット状を呈し、径38×36cm、深さ22cmを測る。

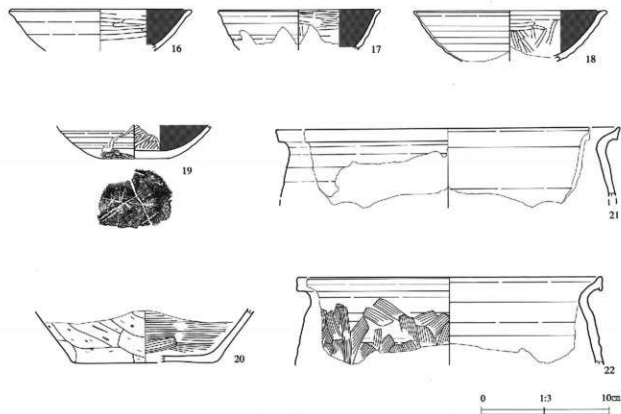
<床面・壁面> 床面には緩やかな凹凸があり、黒褐色土と褐色土の混合土によって2～10cmの厚さで貼り床が施される。壁面は調査で確認できた東壁・南壁については外傾して立ち上がる。

<土坑> 住居外の煙道部南側に径72×58cmの楕円形の形状を呈するプランを検出した。深さは約32cmで埋土から金属遺物(刀子)が出土した。埋土の状況などから本遺構に伴う施設の可能性もあるが、確実ではないため別遺構(9号土坑)とした。

<遺物> 16～25が出土した。床面からの出土は19の一部破片と21のみで、他は埋土中からの出土である。16～19は土師器環で内面にミガキ調整後黒色処理が施されている。20～22は土師器甕で20は底部破片、21・22は口縁部破片で22はロクロ使用による整形後にヘラナデが施されている。時期 出土した遺物の特徴から9世紀後葉～末葉頃と考えられる。



第28図 3号竪穴住居跡



第29図 3号竪穴住居跡出土遺物

4号竪穴住居跡（第30・31図、写真図版14）

〈位置・検出・重複関係〉 IVE19c・IVE20cグリッドに跨って位置し、表土下の第Ⅲ層で検出された。重複している遺構はないが、遺構の北側約2/3以上が調査区外である。

〈形状・規模・主軸方向〉 形状は方形と推測されるが、遺構の大半が調査区外のため規模および主軸方向は不明である。

〈埋土〉 埋土は全体に黒色～黒褐色土を基調とした堆積で4層に分かれる。

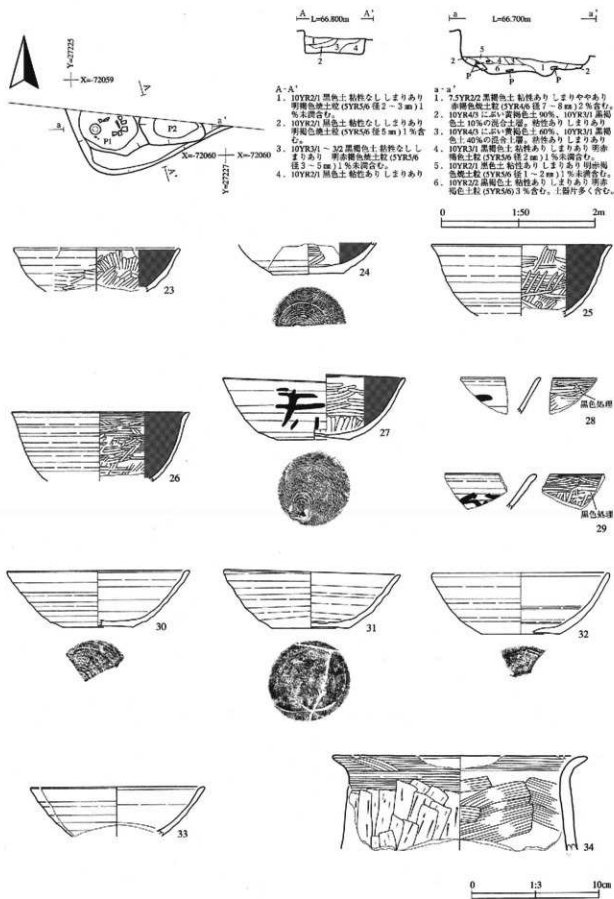
〈カマド〉 調査範囲内においてカマドは確認されていない。

〈床面・壁面〉 床面には緩やかな凹凸があり、黒褐色土と褐色土の混合土によって2～10cmの厚さで貼り床が施される。壁面は確認できたのは南東壁面のみで、直立して立ち上がる。

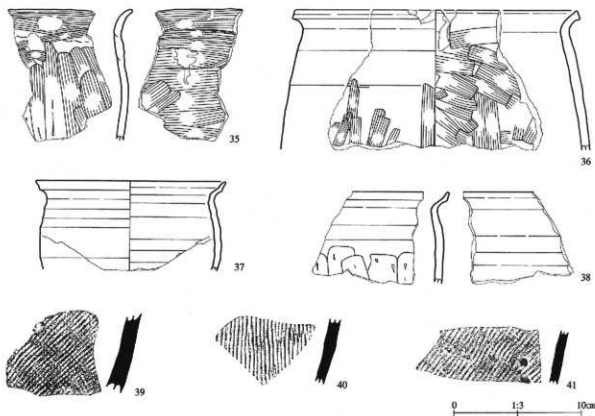
〈土坑〉 2基検出した。重複関係にあり、P2が新しい。規模は調査区外に延びるため不明である。

〈遺物〉 23～41が出土した。23・31・32・39・40は住居検出面、25・26は住居埋土、27～29・35～37はP1、34・38はP2、他は住居内土坑検出面～埋土より出土した。23～33は土師器で27は完形品である。23～29の内面は黒色処理が施されている。また、27～29の外面上には墨書による文字が確認できる。底部の切り離し技法が確認できるのは24・27・30～32でいずれも回転糸切りによる。35～38は土師器甕で34・35は口縁部が外反し、器面調整は外面は口縁部ヨコナデ、体部は34は縦位ヘラケズリ、35は縦位ヘラナデ、内面はいずれも横位のヘラナデが施される。36～38は口縁部が屈曲する形状で、器面調整は内外面ロクロナデにより、さらに36は内外面ヘラナデ、38は外面にヘラケズリが施される。39～41は須恵器甕の体部破片で外面にタタキメが施される。

時期 出土した遺物から9世紀後半～末葉と考えられる。



第30図 4号竪穴住居跡・出土遺物



第31図 4号壁穴住居跡出土遺物

5号壁穴住居跡 (第32図、写真図版15)

<位置・検出・重複関係> IV D 17 a・IV D 17 b グリッドに跨って位置し、耕作土下の第Ⅱ層で検出された。重複している遺構はないが遺構の南側の大部分が調査区外である。また、検出した遺構中央部に幅約60cmほどのトレンチ状の擾乱を受けている。

<形状・規模・主軸方向> 形状は方形と推測されるが、遺構の大半が調査区外のため規模および主軸方向は不明である。

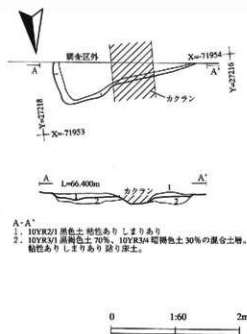
<埋土> 埋土1層は床面直上で黒色シルトである。埋土2層は貼り床土で黒褐色シルトと暗褐色シルトの混合土層である。

<カマド> 調査範囲内においてカマドは確認されていない。

<床面・壁面> 確認した範囲において床面には緩やかな凹凸があるが、概ね平坦である。壁面は確認できた北壁・東壁については外傾して立ち上がり、壁面残存値は2~6cmと浅い。

<遺物> なし。

<時期> 検出状況から古代の遺構と考えられるが詳細は不明である。



第32図 5号壁穴住居跡

6号竪穴住居跡（第33図、写真図版16）

<位置・検出・重複関係> VD4c～VD6cグリッドに跨って位置し、耕作土下の第Ⅱ層で検出された。重複している遺構はないが、遺構の9割以上が調査区外であるため全容は不明である。

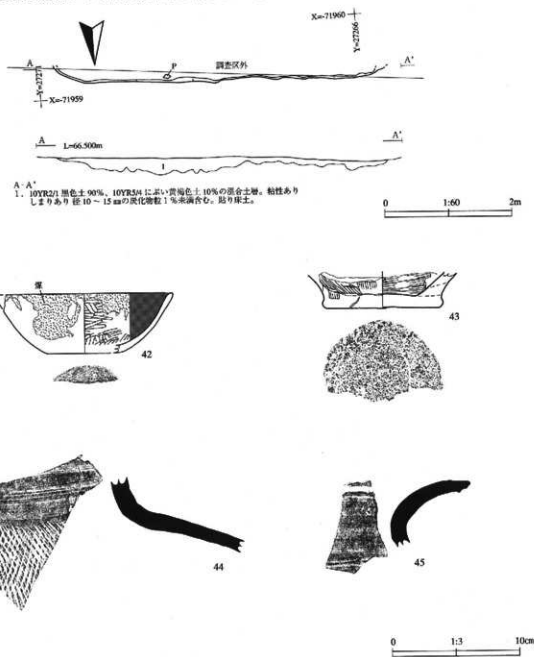
<形状・規模・主軸方向> 形状は方形と推測されるが、遺構の大半が調査区外のため規模および主軸方向は不明である。

<埋土> 埋土は黒褐色シルトと明黄褐色シルトの混合土層で、住居の貼り床土である。

<カマド> 調査範囲内においてカマドは確認されていない。

<遺物> 遺構の検出時に42～45が出土した。43は土師器坏で内面は黒色処理が施され、内外面に煤が付着している。43は土師器甕の底部破片、44・45は須恵器甕で44は口縁～体部上半で体部外面にタタキメが施される。

<時期> 出土した遺物から9世紀後半頃と考えられる。



第33図 6号竪穴住居跡・出土遺物

7号竪穴住居跡(第34図、写真図版16)

<位置・検出・重複関係> VD7c～VD9cグリッドに跨って位置し、耕作土下の第Ⅱ層で検出された。複数の遺構が重複している可能性も考えられるが、調査した範囲においては平面・断面等で切り合いの判断はできなかった。検出した部分の中央部付近に攪乱を受けており、この部分が遺構間の境界である可能性も考えられる。

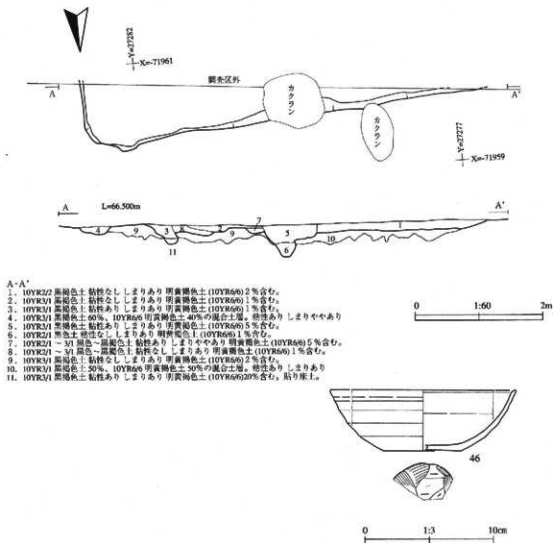
<形状・規模> 検出した部分から方形の形状と推測される。検出した範囲での遺構の規模は東西620cmを測り、それ以上の規模の遺構と判断できる。

<埋土> 住居の埋土は明黄褐色シルト粒を含む黒褐色土層、貼り床にも明黄褐色土を含む黒褐色土が貼られている。また埋土5層・6層は攪乱でこれより東側は埋土(貼り床?)が浅くなっている。

<カマド> 調査範囲内においてカマドは確認されていない。

<遺物> 住居の貼り床土中から土師器片が1点出土した。46は土師器坏で器面調整はロクロナデにより、底面の切り離し技法はヘラナデ、ヘラケズリによる再調整のため不明である。

<時期> 遺構を検出した状況から平安時代に属すると考えられるが詳細は不明である。



第34図 7号竪穴住居跡・出土遺物

(2) 住居状遺構

調査区南側で1棟検出した。通常の住居跡より規模が小さくカマド設けられていないことから住居状遺構とした。

1号住居状遺構(第35図、写真図版17)

<位置・検出・重複関係> IV E 20 d・IV E 21 dグリッドに跨って位置し、表土下の第Ⅱ層で検出された。重複している遺構はないが、遺構の南半分は確認調査区のため検出のみの調査である。

<形状・規模> 検出したプランの形状は菱形を呈するが、本調査した部分の形状と確認調査区部分の検出プランがやや曖昧なことなどから判断すると方形を呈する可能性も考えられる。規模は一部検出のみのためおおよそではあるが各壁面の長さは180～190cmの範疇である。

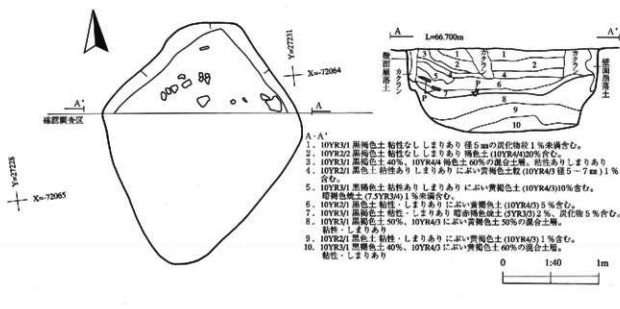
<埋土> 10層に分層される。1～7層は住居埋土、8～10層は貼り床土である。住居の埋土上位(1～2層)は黒褐色土層、中位(3～5層)は褐色土を多く含む黒褐色土層、下位(6・7層)は黒褐色土を主体にする層で、暗赤褐色焼土粒、炭化物粒、にぶい黄褐色土粒とともに土器片が混入する。貼り床(8～10層)は30～40cmの厚さで、上位と下位は黒褐色土とにぶい黄褐色土の混合土層で中位に黒色土を挟む。

<カマド> 調査範囲内においてカマドは確認されていない。

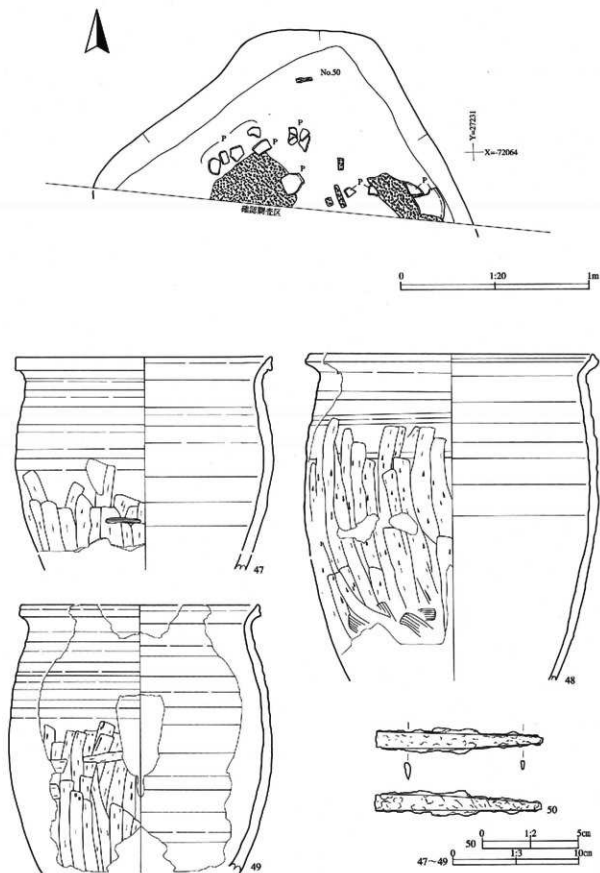
<床面・壁面> 床面には緩やかな凹凸があるが、平坦に近い。黒褐色土と黄褐色土の混合土によって30～40cmの厚さで貼り床が施される。壁面が確認できたのは北西壁・北東壁のみであるが、貼り床部分より上位の壁面は直立して立ち上がるが、貼り床部分は底にいくほど狭く窄んだ形状である。検出面までの深さは最深で88cmである。

<遺物> 47～50が出土した。49は埋土7層内、他は床面直上から出土した。47～49は土師器甕で器面調整は外面ロクロ整形後、47・49は体部中～下半、48は体部上位より下に縦位のケズリ調整が施される。50は住居床面北側より出土した刀子で先端部分が欠けている。

時期 出土遺物の特徴から9世紀後半～末葉頃と考えられる。



第35図 1号住居状遺構



第 36 図 1号住居状遺構・出土遺物

(3) 焼土遺構

今回の調査で焼土遺構6基を検出した。いずれも重複遺構はなく単体での検出である。このうち1号焼土・5号焼土については確認調査により検出のみ、また6号焼土についても調査対象部分が生活道路として利用されている箇所であったため隣接箇所でのトレンチ掘りによる確認に止めた。時期は遺物が少ないこともあり、詳細は不明であるが、住居跡と同じ検出面であるため、9世紀後半～末葉頃と考えられる。

1号焼土 (第37図、写真図版20)

<位置・検出> IV D 1 a グリッドに位置し、表土下の第Ⅱ層で検出された。確認調査区のため検出のみの調査である。

<形状・規模> 検出した形状は長楕円形状を呈する。形状から堅穴住居跡の煙道部である可能性も考えられる。焼土範囲は約140×40 cmである。

<堆積土> 検出面による確認では色調は黒褐色土を主体とし、明赤褐色焼土粒が少量混入する。

2号焼土 (第37図、写真図版19)

<位置・検出> IV D 24 s グリッドに位置し、表土下の第Ⅱ層で検出された。

<形状・規模> 形状は不整形で、約80×68 cmの範囲に焼土粒の広がりを確認した。

<堆積土> 黒褐色土と明褐色焼土が混合している。厚さは13 cmを測る。

3号焼土 (第37図、写真図版20)

<位置・検出> IV D 25 m グリッドに位置し、表土下の第Ⅱ層で検出された。

<形状・規模> 円形基調の形状を呈し、焼土範囲は約80×68 cmである。

<堆積土> 焼土の色調は赤褐色で、厚さは12 cmを測る。

4号焼土 (第37図、写真図版20)

<位置・検出> IV E 24 a グリッドに位置し、表土下の第Ⅱ層で検出された。

<形状・規模> 形状は不整形で、約62×47 cmの範囲に焼土粒の広がりを確認した。

<堆積土> 黒褐色土と明褐色焼土が混合している。厚さは13 cmを測る。

5号焼土 (第37図、写真図版20)

<位置・検出> III D 25 k・IV D 1 k グリッドに跨って位置し、表土下の第Ⅱ層で検出された。確認調査区のため検出のみの調査である。

<形状・規模> 形状は不整形で、約80×58 cmの範囲に焼土粒の広がりを確認した。

<堆積土> 検出面による確認では色調は黒褐色シルトを主体とし、明赤褐色焼土粒が少量混入する。

<遺物> 検出面より土師器甕(51)が出土した。器面調整は内外面ともに口縁部がヨコナア、体部が縦位ヘラナアが施されている。

6号焼土 (第37図、写真図版20)

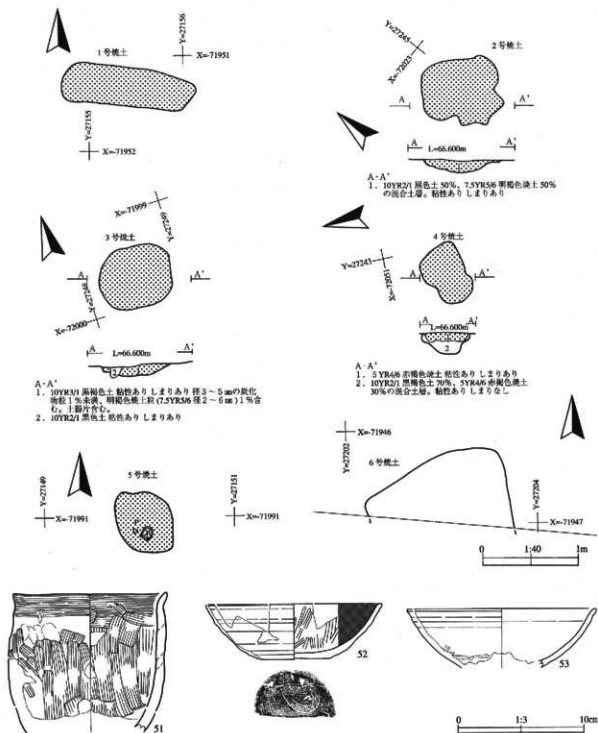
<位置・検出> IV C 14 y グリッドに跨って位置し、表土下の第Ⅱ層で検出された。確認調査区範囲が調査対象であるが、生活道路として利用されている状況であったため、道路に平行したトレンチ

調査を行い遺構を確認した。

<形状・規模> 検出した形状から方形状を呈すると推測される。未検出部分があることから規模は不明であるが、調査範囲内においては約 150 cm 幅に焼土粒が広がることを確認した。

<堆積土> 検出面による確認では色調は黒褐色シルトを主体とし、明赤褐色焼土粒が少量混入する。

<遺物> 検出面より土師器坏が2点出土した。52 は内面ミガキ調整後、黒色処理が施されている。



第37図 1号~6号焼土・出土遺物

(4) 土 坑

土坑を9基検出した。このうち本調査区6基、確認調査区3基で検出されている。このうち7号土坑と8号土坑が重複する。

1号土坑 (第38図、写真図版18)

<位置・検出> IV E 8 d グリッドに位置する。表土除去後に第VI層で検出した。

<平面形・規模> 調査完掘時に掘りすぎたため形状は東側半分が広がっているが、元来の形状は楕円形を呈する。規模は開口部径132×102 cm、底面径118×72 cm、深さ18 cmを測る。

<底面・壁面> 底面は緩い凹凸があり、壁は北側は直立、南側はやや内傾して立ち上がる。

<埋土> 自然堆積で埋土は黒褐色土を基調とする3層からなる。

時期 不明である。

2号土坑 (第38図、写真図版18)

<位置・検出> IV E 22 b グリッドに位置する。表土除去後に第III層で検出した。

<平面形・規模> 不整な形状を呈し、規模は開口部径130×106 cm、底面径119×87 cm、深さ15 cmを測る。

<底面・壁面> 底面は緩い凹凸があり、壁面は東側は内湾気味、西側は緩やかに傾斜して立ち上がる。

<埋土> 自然堆積で埋土は3層からなり、上～中位は暗褐色焼土を含む黒色土、下位は黒褐色土からなる。

時期 遺構の検出状況から古代に属すると考えられる。

3号土坑 (第38図、写真図版18)

<位置・検出> IV E 21 e グリッドに位置する。表土除去後に第III層で検出した。

<平面形・規模> 形状は楕円形を呈し、規模は開口部径162×80 cm、底面径156×70 cm、深さ16 cmを測る。

<底面・壁面> 底面は緩い凹凸があり、壁面は内湾気味に立ち上がる。

<埋土> 自然堆積で埋土は3層からなり、上位は明赤褐色焼土を含む黒色土、中位は炭化物を多く含む黒色土、下位は黒褐色土からなる。

時期 遺構の検出状況から古代に属すると考えられる。

4号土坑 (第38図、写真図版19)

<位置・検出> IV E 22 e グリッドに位置し、表土除去後に第III層で検出した。確認調査区のため検出のみである。

<平面形・規模> 形状は長楕円形を呈し、検出で確認した規模は径188×51 cmである。

<底面・壁面> 底面は緩い凹凸があり、壁面は内湾気味に立ち上がる。

時期 遺構の検出状況から古代に属すると考えられる。

5号土坑 (第39図、写真図版18)

<位置・検出> IV E 25 m グリッドに位置する。表土除去後に第III層で検出した。遺構の一部は調

査区外である。

<平面形・規模> 形状は楕円形を呈し、規模は開口部径 174×133cm、底面径 167×122cm、深さ 21cmを測る。

<底面・壁面> 底面は平坦ではなく、断面形は丸底の浅鉢状を呈する。壁面は南壁は緩く内湾気味に立ち上がる。

<埋土> 自然堆積で埋土は5層からなり、上位は灰白色火山灰を含む黒色土、褐色焼土層と黒色土層からなる。下位は暗褐色焼土層と黒色土層からなる。

時期 遺構の検出状況から古代に属すると考えられる。

6号土坑（第39図、写真図版19）

<位置・検出> IV E 18 c グリッドに位置する。表土除去後に第VI層で検出した。

<平面形・規模> 形状は楕円形を呈し、規模は開口部径 118×82 cm、底面径 102×60 cm、深さ 28 cmを測る。

<底面・壁面> 底面は平坦ではなく凹凸がある。壁面は内湾気味に立ち上がる。

<埋土> 自然堆積で埋土は5層からなり、上～中位は黒色土層が主体で、一部上位に黒褐色土が含まれる。下位はより濃色の黒色土層からなる。

遺物 検出面から須恵器甕の破片が1点出土した(54)。

時期 遺構の検出状況と出土した遺物から古代に属すると考えられる。

7号土坑（第39図、写真図版19）

<位置・検出・重複関係> IV E 8 c グリッドに位置し、表土除去後に第VI層で検出した。8号土坑と重複関係にありこれを切る。確認調査区のため検出のみである。

<平面形・規模> 形状は楕円形を呈し、検出で確認した規模は径 87×66 cmである。

遺物 検出面から須恵器甕の破片が1点出土した(55)。

時期 不明である。

8号土坑（第39図、写真図版19）

<位置・検出・重複関係> IV E 8 c グリッドに位置し、表土除去後に第VI層で褐色土が混合する黒褐色のプランを検出した。7号土坑と重複関係にありこれに切られる。確認調査区のため検出のみである。

<平面形・規模> 形状は長方形を呈し、検出で確認した規模は径 214×128 cmである。

時期 不明である。

9号土坑（第39図、写真図版19）

<位置・検出・重複関係> IV D 21 u グリッドに位置し、第III層で検出した。重複する遺構はない。3号堅穴住居跡に隣接するが、関連は不明である。

<平面形・規模> 形状は円形を呈し、規模は開口部径 72×58 cm、底部径 42×36 cm、深さ 32 cmを測る。

<底面・壁面> 底面は中央部が凹み、壁面は外反気味に立ち上がる。

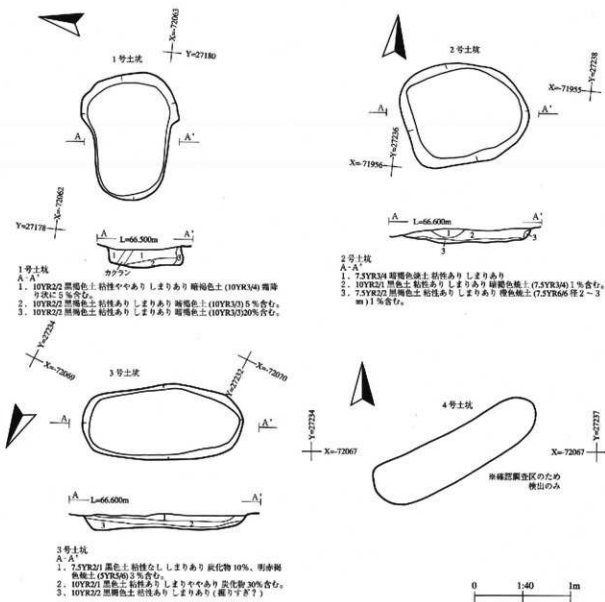
<埋土> 埋土は4層からなり、上位にはぶい黄褐色土粒を含む黒褐色土を主体とする層、中位は黒

4 検出遺構と出土遺物

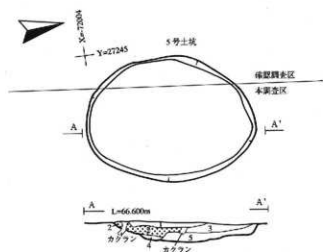
色土、下位は褐色砂質土と黒色土の混合土層からなる。

遺物 埋土から 56 が出土した。56 は鉄製品で扁平な形状を呈し、先端部が尖っていることから刀子の一部と考えられる。

時期 遺構の検出状況と出土した遺物から古代に属すると考えられる。



第38図 1号～4号土坑



5号土坑

A-A'

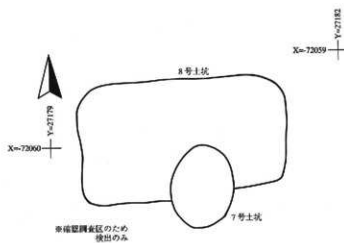
1. 10YR2/1 黒色土 粘性なししりあり 径5mmの炭化物粒1%、灰白色火山灰(10YR7/2)10%含む。
2. 7.5YR4/6 褐色土 粘性なししりあり
3. 10YR2/1 黒色土 粘性なししりあり
4. 7.5YR3/3 暗褐色土 粘性ややありしりあり
5. 10YR2/1 黒色土 粘性なししりあり 褐色土(10YR4/4)10%含む



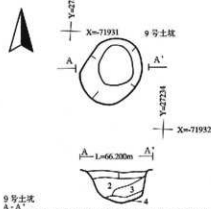
6号土坑

A-A'

1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なししりあり 褐色土(10YR4/4)1%、明赤褐色土(5YR5/6)1%含む。
2. 10YR2/1 黒色土 粘性なししりあり
3. 10YR3/1 ~ 3/2 黒褐色土 粘性ややありしりあり
4. 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性ややありしりあり 褐色土(7.5YR4/4)1%含む。
5. 10YR2/1 黒色土 粘性ややありしりあり



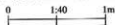
※特殊調査区のため
検出のみ



9号土坑

A-A'

1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性ややありしりありにぶい黄褐色土(10YR5/4 径8~10mm)1~2%含む。
2. 10YR2/1 黒色土 粘性ありしりありにぶい黄褐色土(10YR5/4)3%含む。
3. 10YR2/1 黒色土 粘性ありしりあり
4. 10YR2/1 黒色土 30%、10YR4/4 褐色土 70%の混合土層。粘性ありしりあり



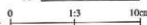
54



55



56



54・55

第39図 5号~9号土坑・出土遺物

(5) 井戸跡

1号井戸跡(第40図、写真図版17)

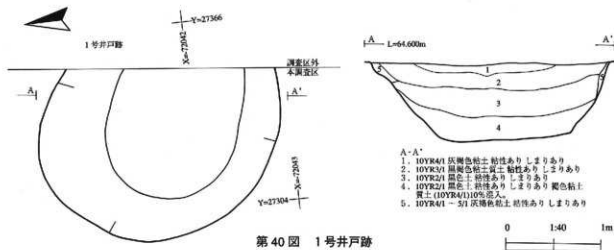
<位置・検出> IV E 14 w・IV E 14 xグリッドに跨って位置する。表土除去後、第VI層で検出された。遺構の東側が調査区外へと延びる。

<平面形・規模> 平面形は円形状で、規模は開口部の南北径246cm、深さ82cmを測る。

<底面・壁面> 底面は平坦で壁面外傾はやや内湾気味に立ち上がる。

<埋土> 埋土は4層からなり、上位は灰褐色・黒褐色粘土、中位は黒色土、下位は褐色粘土を含む黒色土が堆積する。

時期 検出状況などから近世以降と考えられる。



第40図 1号井戸跡

(6) 陥し穴状遺構

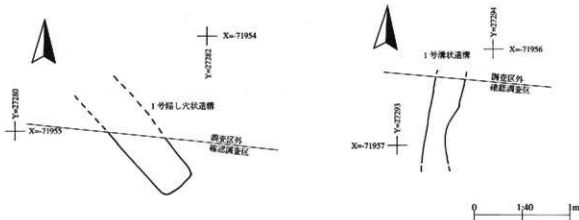
1号陥し穴状遺構(第41図)

VD 8 bグリッドに位置する。表土除去後、第V層で検出された。遺構の北側が調査区外へと延びるため確認調査区内のみの検出である。遺構の一部が遺構外へと延びるため全容は不明である。

(7) 溝状遺構

1号溝状遺構(第41図)

VD 11 bグリッドに位置する。表土除去後、第V層で検出された。遺構の北西側が調査区外へと延びるため確認調査区内のみの検出である。遺構の一部が遺構外へと延びるため全容は不明である。なお、確認調査区の一部は生活道路に使用されており、この部分の調査は行っていない。



第41図 1号陥し穴状遺構、1号溝状遺構

(8) 柱穴状土坑

1号柱穴状土坑 (第42図)

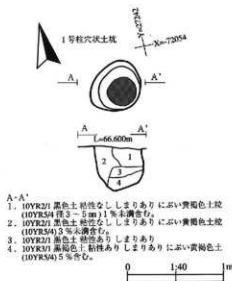
<位置・検出> IV E 23 b グリッドに位置する。表土除去後、第Ⅱ層で検出された。重複する遺構はない。

<平面形・規模> 形状は円形を呈し、規模は掘り方部分が径56×48 cm、柱痕部分が径30 cm、深さは47 cmを測る。

<底面・壁面> 底面は中央が凹み、西側壁面は外傾、東側壁面は内傾して立ち上がる。

<埋土> 埋土は4層からなり、上～中位は黒色土を主体とした層で、上位にはにぶい黄褐色土粒が混入するが中位にはない。下位は黒褐色土が主体でにぶい黄褐色土粒を少量含む層で構成される。

時期 遺物が出土していないため詳細は不明である。



第42図 1号柱穴状土坑

(9) 遺構外出土遺物 (第43図、写真図版46)

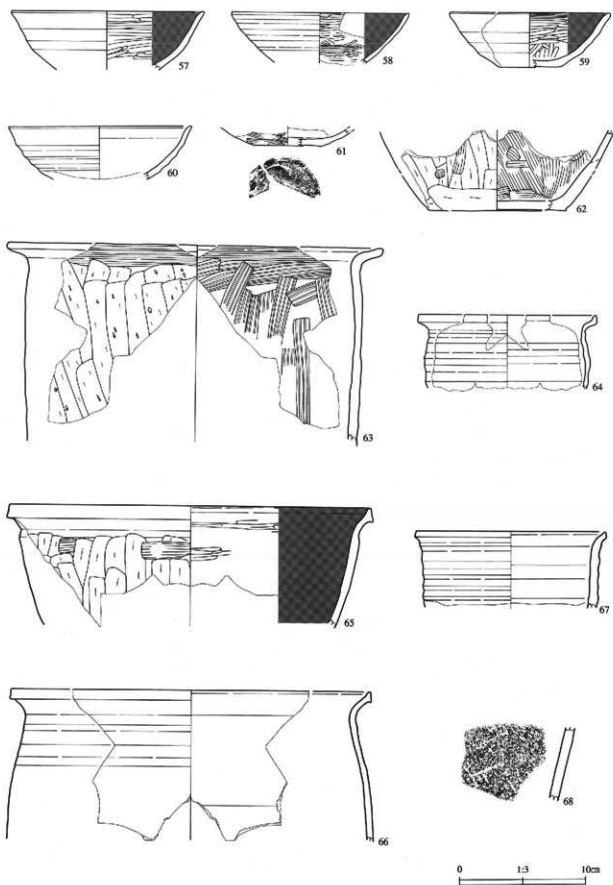
遺跡から出土した土器の総重量は11842.2 gでこのうち遺構外から出土したものは3881.9 gである。遺構外出土遺物の土器はIV E 8 c・8 dグリッドの溝状の形状を呈する攪乱土中から出土したものが大半である。攪乱は当初遺物が集中して出土していることから、住居煙道部と想定して調査を進めたが、掘り込みが浅いうえに埋土の大半が水田耕作土であり、仮に住居と想定した場合の住居壁面や燃焼部付近に焼土の痕跡もないことから、遺構と確認できなかった。ただし、遺物の出土状況から隣接する調査区外に存在する遺構から混入したか削平されて消滅した遺構のものである可能性が高い。

また、他に縄文時代の遺物は摩滅した土器片が数点出土しているのみで、遺構に伴うものではない。

57～61は土師器坏でいずれも体部が内湾して立ち上がるが、57・59・60の口唇部は外反、58は内湾する。また成形はロクロによるもので、器面調整は内外面ロクロナデによるが、57～59の内面は黒色処理に伴うミガキが施され、体部では横方向(57～59)、底部では縦方向(59)に施される。

62～67は土師器甕で62は体部下半～底部、63～67は口縁～体部上半である。63は頸部が大きく屈曲し、器体外面の調整は口縁部ヨコナデ、体部は縦位にヘラケズリが施される。64～67は外面ロクロナデによる調整が施され、65は縦位にヘラケズリが施される。

68は縄文土器片で器種は深鉢と思われる。原体は表面の摩滅により不明である。



第43図 遺構外出土遺物

第8表 古代土器観察表(1)

No	出土地点・層位	種別	調整			法線 (cm)		備考	図版 写真		
			器種	外面	内面	口径	底径				
1	1号壺穴住居跡カマド崩落土・燃焼部	土師器	坏	口：ロクロナデ 底：回転糸切り			16.2	4.2	6.0	25	42
2	1号壺穴住居跡カマド崩落土	土師器	坏	ロクロナデ			12.6			25	42
3	1号壺穴住居跡カマド崩落土・燃焼部	土師器	坏	口：ロクロナデ 底：回転糸切り			7.1	4.2	5.4	25	42
4	1号壺穴住居跡カマド燃焼部・検出面	土師器	坏	口：ロクロナデ 底：回転糸切り			13.4	4.7	(5.3)	25	42
5	1号壺穴住居跡カマド崩落土・燃焼部	土師器	高舌付坏	ロクロナデ						25	42
6	1号壺穴住居跡カマド崩落土・燃焼部・検出面	土師器	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ (縦)			7.0			25	42
7	1号壺穴住居跡カマド崩落土	土師器	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ (縦)			21.0			25	42
8	1号壺穴住居跡カマド崩落土	土師器	甕	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ (縦)			14.0			25	42
9	1号壺穴住居跡カマド埋設部 3層	土師器	甕	底：ヘラケズリ				10.4		25	42
10	1号壺穴住居跡カマド崩落土・燃焼部	土師器	甕	口：ロクロナデ (縦) ヘラナデ (縦)			20.2			25	42
11	2号壺穴住居跡 床面	土師器	坏	口：ロクロナデ、ケズリ 底：回転糸切り			13.1	4.5	5.7	27	43
12	2号壺穴住居跡 掘上1層	土師器	坏	口：ロクロナデ、ケズリ 底：ヘラケズリ					(6.0)	27	43
13	2号壺穴住居跡カマド燃焼部	土師器	坏	口：ロクロナデ 底：回転糸切り			14.2	5.5	5.2	27	43
14	2号壺穴住居跡カマド燃焼部・床面直上	土師器	高舌付坏	ロクロナデ			18.2	8.3	9.8	27	43
15	2号壺穴住居跡内1号土坑 埋土	土師器	甕	口：ロクロナデ→ヘラケズリ (縦) 黒色処理			22.2	18.3	(10.4)	27	43
16	3号壺穴住居跡 埋土	土師器	坏	ロクロナデ			14.0			29	43
17	3号壺穴住居跡 掘土	土師器	坏	ロクロナデ			12.8			29	43
18	3号壺穴住居跡カマド燃焼部?	土師器	坏	ロクロナデ			15.2			29	43
19	3号壺穴住居跡 掘土1層・床面	土師器	坏	口：ロクロナデ、ヘラナデ 底：ヘラケズリ					(5.6)	29	43

第8表 古代土器観察表(2)

No	出土地点・層位	種別	調査		法量 (cm)		備考	図版	写真		
			器種	外面	内面	口径				器高	底径
20	3号壑穴住居跡 埋土2層	土師器	壺	ヘラケズリ 底:ヘラナデ	ヘラナデ(横)				29	43	
21	3号壑穴住居跡 表層	土師器	壺	ロクロナデ	ロクロナデ	(27.0)		(11.5)		29	43
22	3号壑穴住居跡 検出面	土師器	壺	ロクロ成形→ヘラナデ	ロクロナデ	(24.0)				29	43
23	4号壑穴住居跡 検出面	土師器	坏	ミガキ 黒色処理	黒色処理	(13.0)				30	44
24	4号壑穴住居内 底面	土師器	坏	口:ロクロナデ 底:回転糸切り	黒色処理			5.6		30	44
25	4号壑穴住居跡 埋土2層	土師器	坏	ロクロナデ	黒色処理	(14.2)				30	44
26	4号壑穴住居跡 埋土2層	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ 黒色処理	(14.0)				30	44
27	4号壑穴住居内1号土坑 底面	土師器	坏	口:ロクロナデ 底:回転糸切り	黒色処理	14.5	5.2	5.8	遺書あり	30	44
28	4号壑穴住居内1号土坑 埋土	土師器	坏	ロクロナデ	黒色処理	—			遺書あり	30	44
29	4号壑穴住居内1号土坑 底面	土師器	坏	ロクロナデ	ミガキ 黒色処理	—			遺書あり	30	44
30	4号壑穴住居跡内土坑 検出面(住居表面)	土師器	坏	口:ロクロナデ 底:回転糸切り	ロクロナデ	(14.4)	4.5	(5.6)		30	44
31	4号壑穴住居跡 検出面	土師器	坏	口:ロクロナデ 底:回転糸切り	ロクロナデ	14.2	4.7	6.5		30	44
32	4号壑穴住居跡 検出面	土師器	坏	口:ロクロナデ 底:回転糸切り	ロクロナデ	(14.0)	4.9	(6.0)		30	44
33	4号壑穴住居内土坑 埋土	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	(13.8)				30	44
34	4号壑穴住居内土坑2 埋土	土師器	壺	口:ヨコナデ 体:ヘラナデ(横)	口:ヨコナデ 体:ヘラナデ(横)					30	44
35	4号壑穴住居内1号土坑 埋土	土師器	壺	口:ヨコナデ 体:ヘラナデ(横)	口:ヨコナデ 体:ヘラナデ(横)					31	44
36	4号壑穴住居内1号土坑 底面	土師器	壺	ロクロナデ→ヘラナデ(縦)	ヘラナデ	(22.0)				31	44
37	4号壑穴住居内1号土坑 底面	土師器	壺	ロクロナデ	ロクロナデ	(15.0)				31	44
38	4号壑穴住居内土坑2 埋土	土師器	壺	ロクロナデ→ヘラナズリ(縦)	ロクロナデ					31	44
39	4号壑穴住居跡 検出面	須恵器	壺	体:タタキス						31	44

第8表 古代土器観察表(3)

No	出土地点・層位	種別	調整		法量 (cm)		同版	写真
			外面	内面	口径	器高		
40	4号墓穴住居跡 検出面	須恵器 壺	体：タタキメ				31	44
41	4号墓穴住居内土坑2 掘上	須恵器 壺	体：タタキメ				31	44
42	6号墓穴住居内土坑 掘上	土師器 坏	口：ロクロナデ 底：回転糸切り ヘラナデ			(13.8)	33	45
43	6号墓穴住居跡 検出面	土師器 壺	口：ロクロナデ 体：タタキメ				33	45
44	6号墓穴住居跡 検出面	須恵器 壺	口：ロクロナデ 体：タタキメ				33	45
45	6号墓穴住居跡 検出面	須恵器 壺	口：ロクロナデ				33	45
46	7号墓穴住居跡 掘上	土師器 坏	口：ロクロナデ 底：ヘラナデ、ヘラケズリ	口：ロクロナデ		(14.6)	34	45
47	1号住居跡 床面	土師器 壺	口：ロクロナデ 底：ヘラナデ、ヘラケズリ(縦)	口：ロクロナデ		(20.6)	36	45
48	1号住居跡 床面	土師器 壺	口：ロクロナデ、ヘラケズリ(縦)	口：ロクロナデ		23.5	36	45
49	1号住居跡 埴土7層	土師器 壺	口：ロクロナデ、ヘラケズリ(縦)	口：ロクロナデ		(19.0)	36	45
51	5号埴土 検出面	土師器 壺	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ(縦)	口：ヨコナデ 体：ヘラナデ(縦)		12.2	37	45
52	6号埴土 検出面	土師器 坏	口：ロクロナデ 底：回転糸切り	口：ロクロナデ 底：回転糸切り		(14.0)	37	45
53	6号埴土 検出面	土師器 坏	口：ロクロナデ	口：ロクロナデ		(15.0)	37	45
54	6号土坑 検出面	須恵器 壺	体：タタキメ				39	45
55	7号土坑 検出面	須恵器 壺	体：タタキメ				39	45
57	IV E 8 d カクラン	土師器 坏	口：ロクロナデ	口：ロクロナデ		(15.2)	43	46
58	IV E 8 d カクラン	土師器 坏	口：ロクロナデ	口：ロクロナデ		(14.0)	43	46
59	IV E 20 d 皿	土師器 坏	口：ロクロナデ 底：回転糸切り	口：ロクロナデ 底：回転糸切り		(12.8)	43	46
60	IV D 18 b 皿	土師器 坏	口：ロクロナデ	口：ロクロナデ		(14.4)	43	46
61	IV E 8 d カクラン	土師器 坏	口：ロクロナデ 底：回転糸切り	口：ロクロナデ		(5.4)	43	46
62	IV E 8 c カクラン	土師器 壺	体：ヘラケズリ	口：ヨコナデ		(11.0)	43	46
63	IV E 8 d カクラン	土師器 壺	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ(縦)	口：ヨコナデ 体：ヘラケズリ		(29.7)	43	46

第8表 古代土器観察表(4)

No	出土地点・層位	種別	器種	調整		法量 (cm)		備考	写真
				外面	内面	口徑	器高		
64	NE 8 d カクラン	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	(14.0)			43 46
65	NE 8 d カクラン	土師器	甕?	ロクロナデ→ヘラケズリ(縦)	ミ万平 黒色成理	(28.8)			43 46
66	NE 8 c カクラン	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	(28.6)			43 46
67	NE 8 d カクラン	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	(15.0)			43 46

* () は測定値

第9表 縄文土器観察表

No	出土地点・層位	種別	器種	部位	調整		備考	写真
					外面	内面		
68	NE 22 d III層	縄文土器	深鉢	体部	L.R編文?	ナデ		43 46

第10表 金属遺物観察表

No	出土地点・層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考	写真
50	3号住居跡内土坑 埋土	刀子	8.8	0.9	0.3		36 45
56	9号土坑 埋土	刀子?	3.0	0.7	0.4		39 45

第11表 土器重量表

遺構内			遺構外		
遺構名	重量 (g)	遺構名	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)
1号壁穴住居跡	1897.9	3号焼土	53.3	NE 8 c	783.5
2号壁穴住居跡	1759.4	4号焼土	10.0	NE 9 c	8.0
3号壁穴住居跡	1080.1	6号焼土	80.3	NE 8 d	2135.1
4号彩穴住居跡	1279.0	1号土坑	173.9	NE 20 d	64.6
6号壁穴住居跡	259.0	4号土坑	83.3	NE 22 d	108.9
7号壁穴住居跡	191.1	5号土坑	124.4	NE 7 d	30.1
1号住居状遺構	741.9	7号土坑	123.0	NE 7 e	105.1
2号焼土	122.2	1号住穴状土坑	11.5	NE 6 e	73.1
		合計	7960.3	NE 10 f	13.4
				NE d 18 a	560.1
				合計	3881.9

5 ま と め

遺構

今回の調査で検出した遺構は竪穴住居跡7棟、住居状遺構1棟、焼土遺構6基、土坑9基、溝状遺構1条、陥し穴状遺構1基、井戸跡1基、柱穴状土坑1基である。このうち竪穴住居跡・焼土遺構・土坑以外はいずれも半数の検出である。各遺構について述べるに竪穴住居跡についてはプラン全体を確認できたのは1棟のみである。カマドの設置を確認できたのは3棟で、うち1棟は煙道部のみの調査である。よって竪穴住居跡の構造などについては比較検討できるものではない。焼土遺構は6基中3基、土坑についても9基中3基は確認調査のため検出のみの調査であるが、検出前や出土した遺物から大半が住居跡と同様の時期のものと考えられる。ただし、1・7・8号土坑については新しい時期の可能性もある。今回の調査に関連して一部遺跡（山口遺跡）で十和田a火山灰（To-a）と考えられる灰白色土粒が検出されているが、本遺跡の遺構からは検出されていない。

遺物

今回の調査で出土した遺物の重量は全体で11842.2gでこのうち7960.3g（67.2%）が遺構内からの出土である。また、遺構外出土遺物の土器は全体の約3割にあたる3881.9gで古代の遺物出土傾向としては高い割合を示すが、本文中に記したようにⅣE8c・8dグリッド付近の攪乱から集中して出土したことから遺構が存在した可能性のある箇所から出土したことによるものである。遺物は土師器坏・土師器甕の破片が大半で須恵器は非ロクロ成形の甕の破片がわずかに出土しているのみで坏は全く出土していない。遺構からまとまって出土したのは1～4号竪穴住居跡と1号住居状遺構からである。このうち1号住居状遺構からはロクロ成形による土師器甕が3点出土し、いずれも体部下半に縦位のヘラケズリ調整が施されている。竪穴住居跡は2号竪穴住居跡以外は遺構の一部のみの調査のため、1遺構からの出土土器の組成は不明であるが、土師器坏の出土傾向としてはロクロ成形で内面に黒色処理が施された坏がロクロナ調整のみの坏に比べてやや多い傾向にある。住居床面から出土した土器の時期はおよそ9世紀後半～末葉頃に比定されると考えられる。

このほか縄文土器もわずかに出土したが摩滅が激しく、小片のため詳細は不明である。

総括

今回の調査で小川原敷遺跡が主に古代の集落跡であったことが判明した。集落構造については詳細は不明であるが、本遺跡以外では山口遺跡・六日市遺跡・八天北遺跡などの各遺跡でも住居跡が確認されており、更木新田地区の沖積平野に古代の集落跡が点在して存在していたことが判明した。

縄文時代については陥し穴状遺構が検出されたことや遺物がほとんど出土していないことから主に狩猟場としてこの場が利用されていたと考えられる。また、今回行われた更木新田地区の遺跡調査では縄文時代の遺物が市の川Ⅰ遺跡、山口遺跡、六日市遺跡、八天北遺跡などで見つかっているが、出土量は多くない。遺構は陥し穴状遺構のみであり、本遺跡を含めて主に狩猟活動に利用された場所であったと考えられる。

Ⅶ 六日市遺跡

1 遺跡の立地

六日市遺跡は、北上川東岸にある自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は南北 300m、東西 250m の細長い形をしている。概ね平坦な地形ではあるが北部がやや高く、中央・南部は若干低くなる。これは後述する遺構検出面でもほぼ同じであり、北部は隣接する市ノ川遺跡と同一面に立地しているといえよう。調査区は遺跡の北端と西端に沿って設定されている。調査区北東端では旧河道へと達する際までが調査範囲に含まれていた。

この旧河道は現在も航空写真などでその痕跡を容易にたどることができる。幅は約 50m と広く、現在の北上川の川幅と近い。従ってかつての北上川なのかも知れないがこの旧河道周辺からはあまり遺物が出土しておらず時期については不明である。

2 基本土層

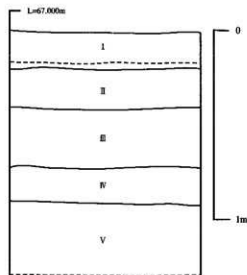
本遺跡は北部と中央・南部とでは北部のほうが若干高い面に立地していることは前述したとおりである。堆積土についても北部と中央・南部では少し異なる。ここでは主要な遺構が集中する北部を主に記載していく。なお、中央部以南はシルトと砂が交互に堆積しており、水位が高くなると水に浸かることが多かったようである。縄文時代の遺物が出土する面より下位でも同様の堆積が続いていたが、遺物・自然物共に出土しなかった。

第Ⅰ層: 褐灰色砂質土 水田(Ⅱ層との境に床土)、粘性・締まりやや有り。

第Ⅱ層: 褐色砂質土 粘性やや弱くしまっている。洪水堆積か。遺構検出面(平安時代)。

第Ⅲ層: 黒褐色土 粘性がやや有りしまっている。

第Ⅳ層: ぶい黄橙色砂 粘性なく、しまっている。遺構検出面(縄文時代)。

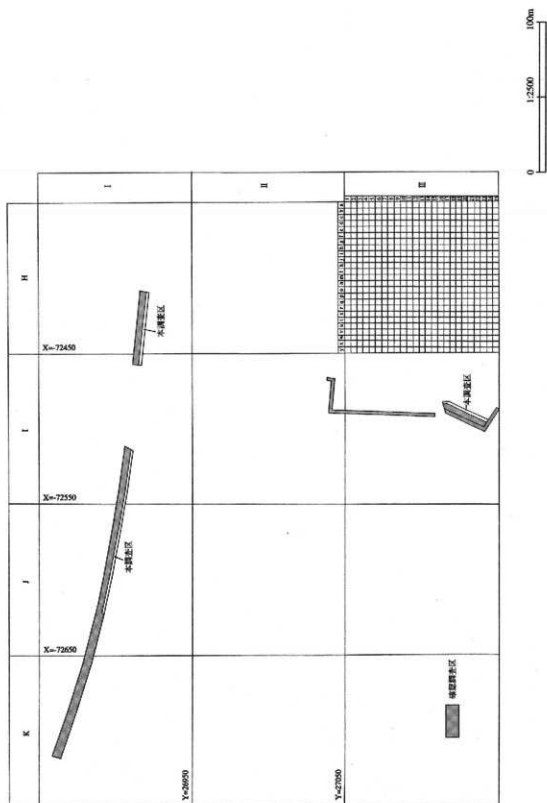


第44図 基本土層

3 調査の概要

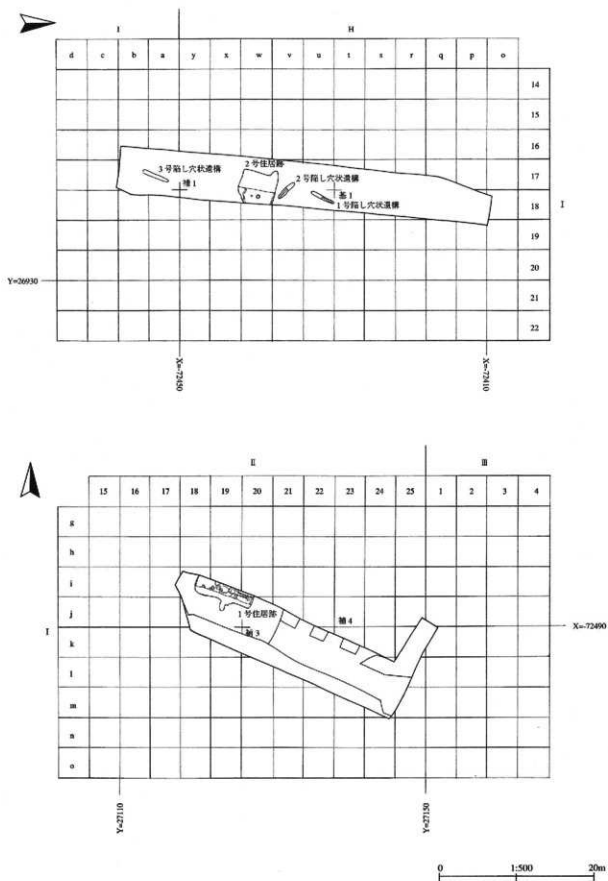
遺跡のある更木地区はこれまでは付近において調査があまり行われておらず、今回の圃場整備の計画によって新たに発見された遺跡である。本調査に先行して県教育委員会が試掘調査をして遺跡の範囲を定めており、今回が本格的な発掘調査となる。

調査面積は本調査面積 600㎡、確認調査面積 1,305㎡の計 1,905㎡で、検出した遺構は縄文時代の陥し穴状遺構 3基、平安時代の竪穴住居跡 2棟・焼土遺構 1基・溝跡 1条である。出土遺物は土師器・須恵器が大コンテナ 3箱、縄文土器・石器が 9号袋 2.5袋、金属製品 6点である。

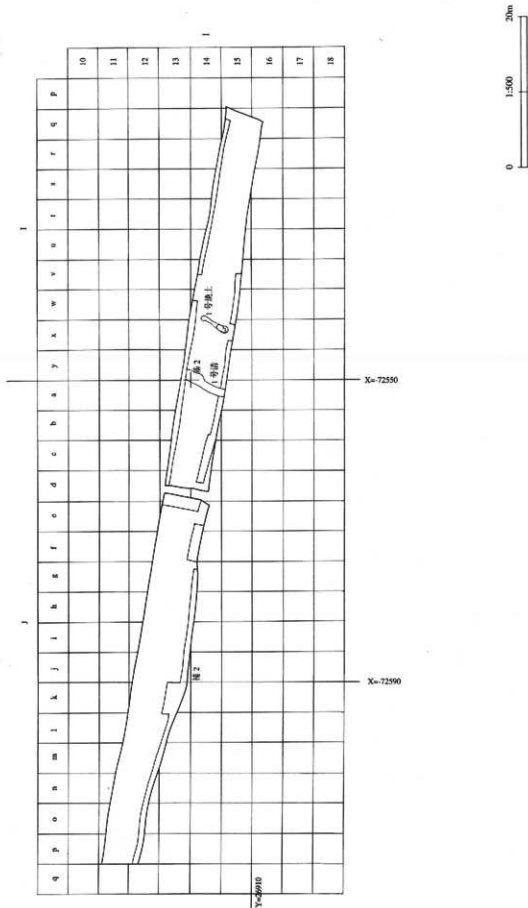


第 45 図 調査区全体図

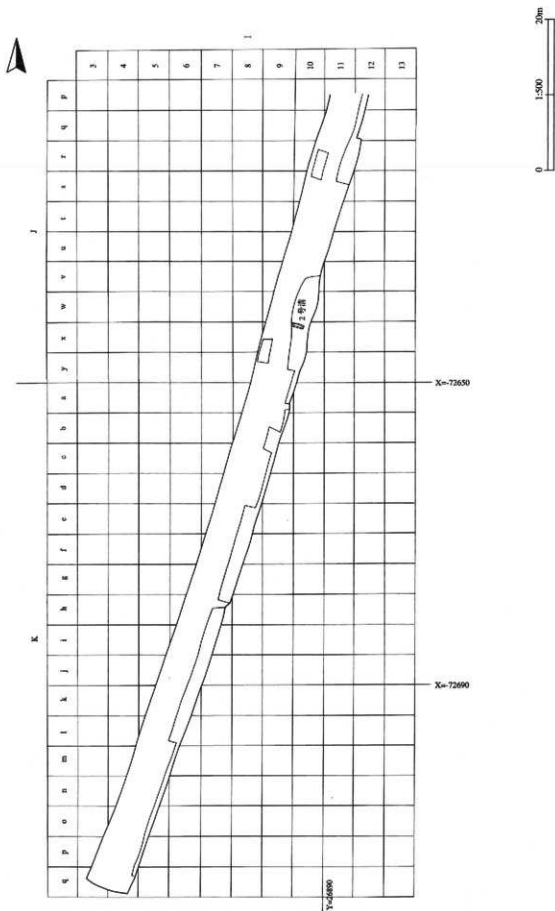
3 調査の概要



第46図 遺構配置図(1)



第47図 遺構配置図(2)



第 48 図 遺構配置図(3)

4 検出遺構と出土遺物

(1) 陥し穴状遺構

遺跡北西端から3基の陥し穴状遺構を検出した。縄文時代の遺構であろうが遺物を伴わないため具体的な時期ははっきりしない。周辺地域の調査が進めば明らかになるであろう。

1号陥し穴状遺構(第51図、写真図版28)

I H 18 u グリッドに位置する。長軸 3.3m、短軸 0.4m で北東-南西方向に細長い長円形を呈する。埋土は黒褐色土・暗褐色土の流れ込んだ自然堆積である。開口部より底面は狭くなっており深さは 0.8 m を測る。底面に小穴などは確認できなかった。北半部のみを精査し、南半部は検出のみで記録をとった。

2号陥し穴状遺構(第51図、写真図版28)

I H 18 v グリッドに位置する。長軸 2.9m、短軸 0.5m の北西-南東方向に細長い長円形を呈する。1号陥し穴状遺構とは向きが 90° 異なる。埋土は黒褐色土・明黄褐色砂質土などが流れ込んだ自然堆積である。深さ 0.3m 程である。底面に小穴は確認できなかった。南半部のみ精査し、北半部は検出のみで記録した。

3号陥し穴状遺構(第46図、写真図版29)

I I 18 a グリッドに位置する。長軸 3.5m、短軸 0.4m の北東-南東方向に細長い長円形を呈する。1号陥し穴状遺構と同じ方向である。遺構検出のみで記録をとった。

(2) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡(第49・52・53図、写真図版24・25・47・48)

縮小されて使用された遺構である。

【新段階】

<位置・検出・重複関係> 遺跡北東端部にあたる II I 19 i グリッドに位置している。西から東へ緩やかに下る斜面に立地している。地山面で検出した。他の遺構との重複はない。

<規模> 平面形は隅丸方形を基調としていると思われるが北東部は調査区外へ続いている。北西-南東方向が 570 cm、南西-北東方向は 180 cm まで検出された。

<埋土> 黒褐色土を主体とした自然堆積である。

<床面・壁面> 壁は底面より外傾して立ち上がる。壁溝は見られない。床はほぼ全面貼り床であった。堅く締まっており、やや凹凸がある。

<カマド> 南東壁際に1基検出された。30～40 cmの礫と粘土で燃焼部付近は造られていたようである。焚き口付近には 50×60 cm で焼土が広がっている。煙道は下半部のみ残存しており詳細は不明である。全長 285 cm を測り、煙出し部は1段深く掘り込まれている。

<柱穴> 南西隅の1個は深さ約 27 cm ある。他は浅く柱穴とはならない。

<その他> 床面から複数の小土坑が検出され中には焼土粒が埋土の中に含まれるものもあった。土器などは出土しなかった。

<遺物> 主にカマド周辺から新・旧段階の遺物が混ざって出土していた。不掲載遺物を含めて土師器坏5～6個体、須恵系土器坏2～3個体、須恵器坏1個体、土師器壺(ロクロ整形)4個体、土師

器甕（非ロクロ整形）2個体、小形甕（非ロクロ整形）2個体、須恵器大甕片1点、須恵器甕片（タタキ痕あり）3点、須恵器甕片（タタキ痕なし）3点（1個体分）が出土している。坏類には底部再調整を施すものは無かった。土師器甕（ロクロ整形）はロクロ整形後に体部下半にケズリが入る。口縁部の作りだしはやや小さい。土師器甕（非ロクロ整形）は体部全体にケズリを施しているものが多い。個体数は調査担当者が出土遺物全部をみながら数えたものである。

時期 平安時代。

【占段階】

<規模> 北東部は調査区外に延びるが、隅丸方形を呈するようである。北西-南東方向が720cm、南西-北東方向は180cmまで検出された。

<埋土> 黒褐色土を主体とした自然堆積である。

<壁面・床面> 壁溝は見られなかった。床面は新段階より高かったため、新段階と重複するところは失われている。南東側のみ残存しており地山を床面としている。貼り床ではない。

<カマド> 南西壁のほぼ中央に1基設置されているが検出のみで精査は行っていない。

<柱穴> 前述した1個は古段階に伴う可能性もある。

時期 平安時代。

2号竪穴住居跡（第50・54～56図、写真図版26・27・48～51）

<位置・検出・重複関係> 遺跡北西隅にあたるIH18wグリッドに位置している。V層上面で検出した。他の遺構との重複はない。

<規模> 東側が調査区外に続いているが、形状は隅丸方形を呈すると推測される。南-北方向470cm、東-西方向は370cmまで検出された。主軸方向はN-77°-Wである。

<埋土> 自然堆積である。1・2層の砂は洪水堆積である。本遺構の大半、床面の一部までも覆っていた。

<壁面・床面> 壁は土層断面によると底面から60cm程の高さがあると考えられる。壁溝は無い。床面は貼り床ではなく、地面をそのまま使っている。

<カマド> 西壁の北端部に1基設置されている。このカマドは検出のみで精査は行っていない。

<柱穴> 南東部より1個検出され深さ49cmを測る。

<その他> 床面には大小複数の浅い掘り込みが検出されている。南東部の比較的大きな掘り込みからは土師器片が捨てられた状態で出土している。

<遺物> 床面からはその場でつぶれたような状態で、床に掘られた浅い土坑などからは廃棄されたような破片の状態出土した。土師器坏2個体、須恵系土器坏4個体、須恵器坏4～5個体（自信ない）、土師器甕（ロクロ整形）5個体、土師器甕（非ロクロ整形）4個体、土師器鉢（ロクロ整形）1個体、土師器壺（非ロクロ整形）1個体、須恵器甕1個体分が出土している。25は須恵系土器坏としたが焼の悪い須恵器かもしれない。底部付近を再調整しているようである。内外面に火禿痕がみられる。30は壺とした。内部の中央付近には煤がよく付着していた。ロクロ整形の甕類はタタキ調整もなされているようである。

時期 平安時代。

(3) 焼土遺構

1号焼土(第51図、写真図版28)

<位置・検出・重複関係> 遺跡西端部やや北側のI114xグリッドに位置している。V層上面で検出し、他の遺構との重複はない。

<平面形・規模> 遺構検出面での規模は長軸370cm、短軸80cmで南東-北西方向に細長い不整形円形を呈する。南東部はさらに長軸150cm、短軸80cm、深さ26cmを測る。

<埋土> 中がよく燃えていることからこの掘り込みが燃焼部と考えられる。このことから北西部は深さ1cmほどしかないが煙道・煙出部になると思われる。断面図を見ても明らかのように上半部は確認できないまま削ってしまった。

時期 出土遺物はないが、土師器・須恵器が散布する面で検出されていることから平安時代とするのが妥当である。竪穴住居跡のカマド部分のみを検出した可能性もあるが、その他の施設は精査しても見つからなかった。

(4) 溝跡

1号溝(写真図版29)

遺跡西端のJ114aグリッドに位置している。北西-南東方向に伸びており長さ5.6m程検出した。両端は調査区外へと続いている。溝の幅は90~150cm、深さは10cm前後であった。人工的な溝か自然流路かよくわからなかった。埋土は自然堆積で褐色砂が主体で遺物・自然木・礫などは含まない。周囲では土師器・須恵器などが散在する面で検出されており、平安時代またはそれよりやや新しい時期の溝跡と考えられる。

(5) 遺構外出土遺物(第56・57図、写真図版52・53)

44は須恵器の大甕である。1号焼土の南20m、自然流路から割れた状態で出土した。周辺で使用されていたものがある時流されてきたようで、この場におかれて使われていた感じではなかった。接合しなかったが下半部の破片もある。還元炎焼成に失敗したようで硬質ではあるが全体に橙色をしている。

46~56は縄文土器である。46~50は晩期で47・48は壺、49は浅鉢と思われる。46は縄文が横走しており、弥生時代とした方がよいのかもしれない。51~55は前期の深鉢であろう。56の時期はよく分からなかった。

57は磁器染付皿であるが窯で焼かれているときに歪んでしまったものようである。見込には他個体の溶けたものが付着している。近世と思われるが詳細は不明である。58は大塚相馬産陶器小碗で18世紀代のものである。

61は石匙、59・60は不定形石器である。62は中央に穿孔があるので石製品とした。63は鉄製であるが、種類は不明である。

1号遺跡外A・A'・D・D'

1. 2.5YR4/8 赤褐色焼土ブロック、暗褐色ブロックとの混合土。

粘性やや有り。磨りや有り。

2. 2.5YR5/8 明赤褐色土 粘りなし。磨まっている。(焼成面)

3. 10YR2/3 黒褐色土 焼土ブロックを混含む。粘性、磨りや有り。

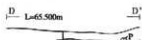
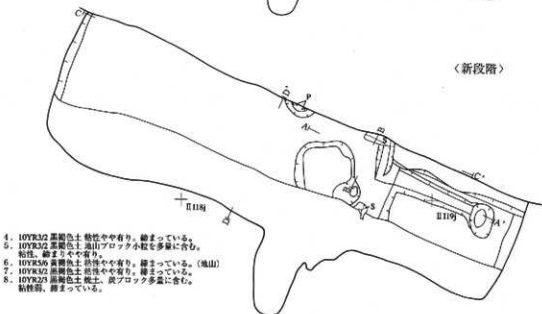
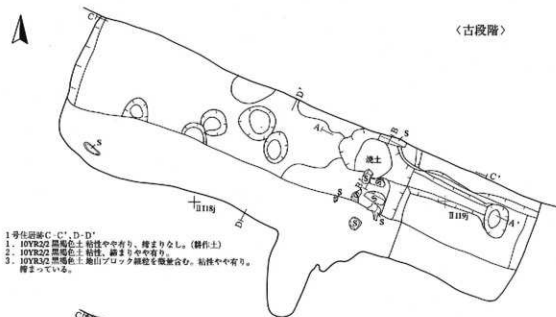
4. 7.5YR2/2 黒褐色土 粘性、磨りや有り。

5. 7.5YR2/2 黒褐色土 地山ブロック少量含む。粘性、磨りや有り。

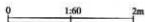
6. 2.5YR4/8 赤褐色土 焼土ブロックを混含む。粘性、磨りや有り。

7. 10YR3/3 黒褐色土 地山ブロックを混含む。粘性やや有り。磨りや有り。

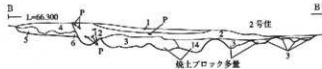
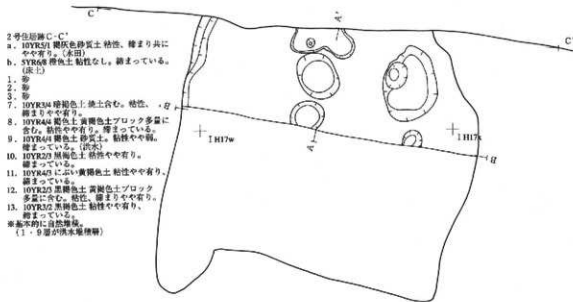
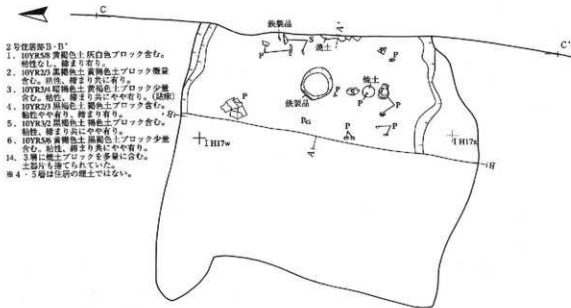
8. 2.5YR4/8 赤褐色土 焼土。粘性なし。磨りや有り。



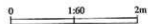
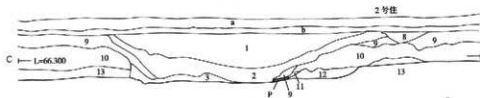
9. 7.5YR22 黒褐色土 粘土、地山ブロック多量に含む。粘性、雑まり共にやや有り。
10. 10YR23 黒褐色土 地山ブロック多量を含む。粘性やや有り、雑まっている。(地山)



第49図 1号竪穴住居跡

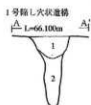
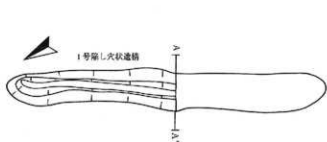


- 10YR58 黄褐色土 粘性なし。締まりやや有り。
- 10YR23 黒褐色土 粘性、締まり共に有り。



第50図 2号竪穴住居跡

4 検出遺構と出土遺物



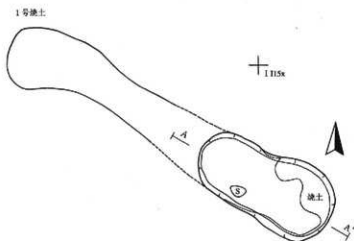
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘土ブロック少量含む。
粘性、締まり共にやや有り。
2. 10YR3/3 暗褐色土 明黄褐色土ブロック少量含む。
粘性、締まり共にやや有り。

+ I115a



1. 10YR2/2 黒褐色土 明黄褐色砂質土ブロック少量含む。
粘性、締まり共にやや有り。
2. 10YR7/6 明黄褐色砂質土 黒褐色土ブロック少量含む。
粘性、締まり共にやや有り。

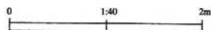
× I117a



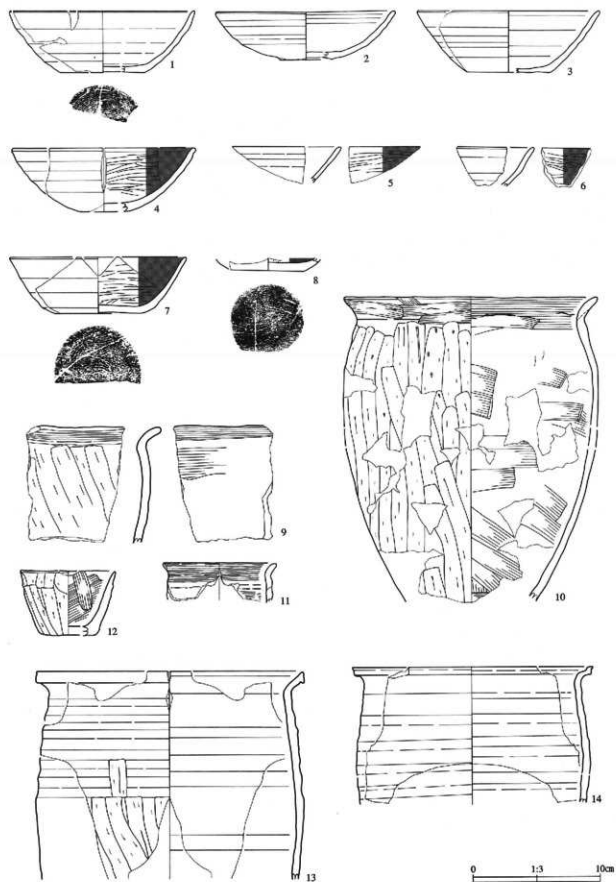
1号陥し



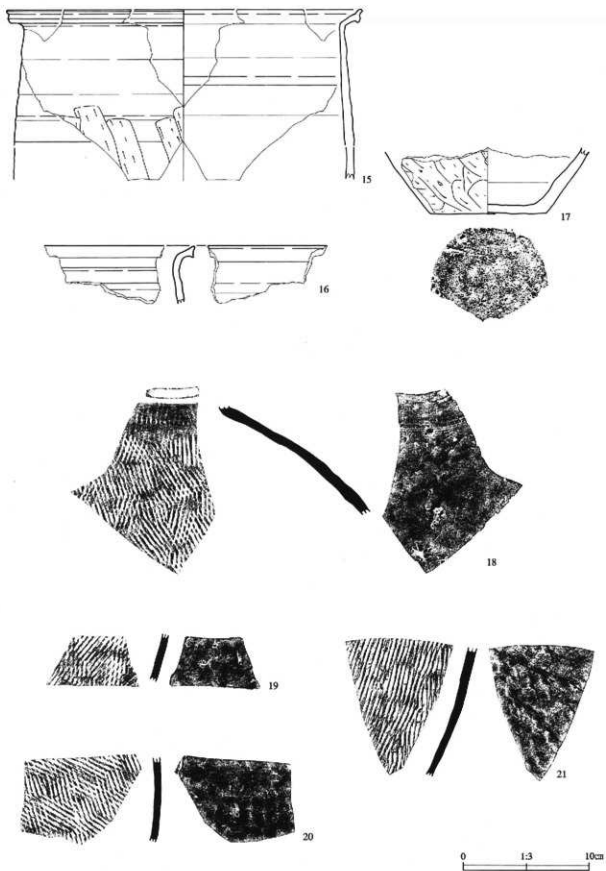
1. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質土 粘性やや有り、締まり弱。
2. 2.5YR5/8 明褐色流土 粘性弱、締まりやや弱。
動いている流土。
3. 2.5YR6/8 褐色流土 粘性弱、締まりやや弱。
動いていない流土。
4. 10YR2/2 黒褐色土 に近い黄褐色土ブロック多量を含む。
炭酸が3層との境に雲かたように広がっていた。
粘性弱、締まりやや弱。



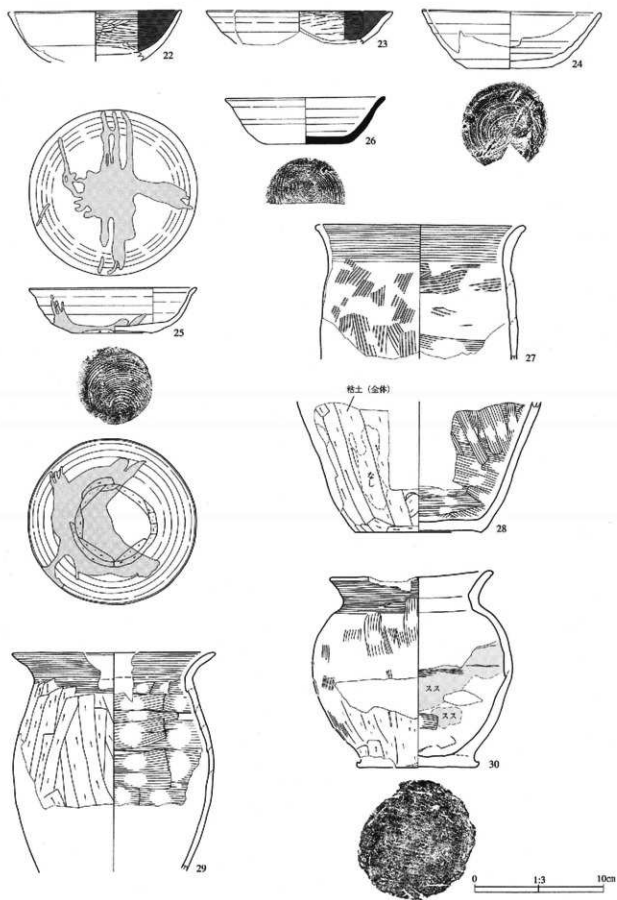
第51図 1号・2号陥し穴状遺構、1号陥し



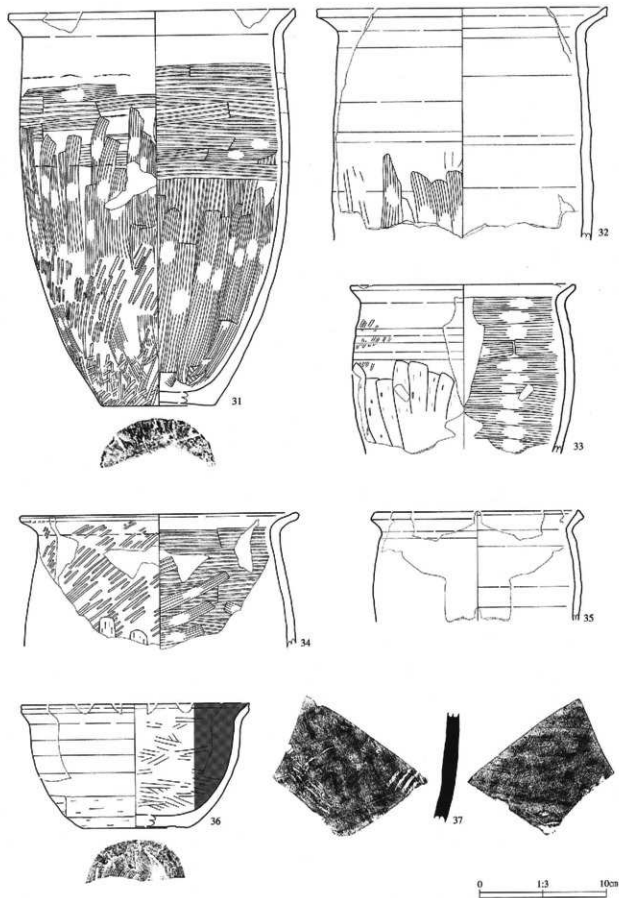
第52図 1号竪穴住居跡出土遺物(1)



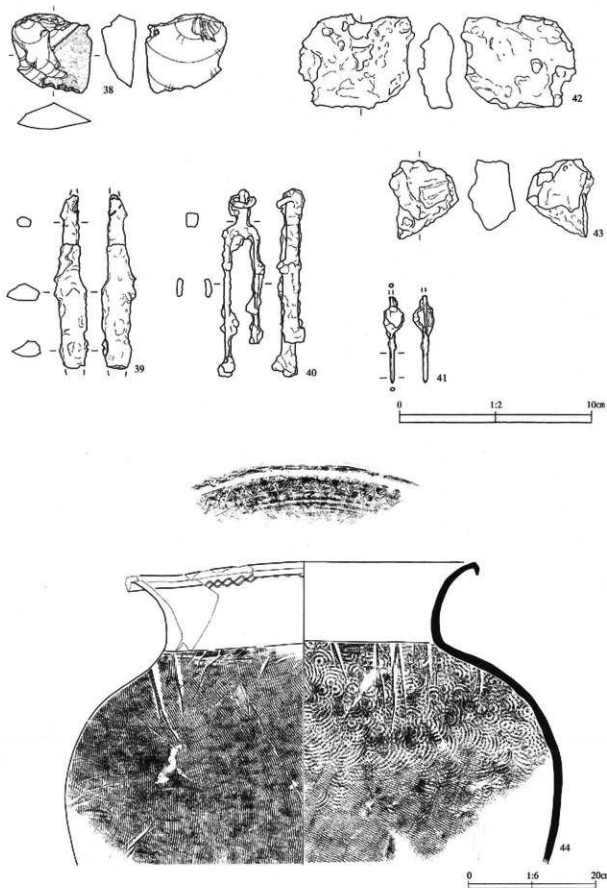
第53図 1号竪穴住居跡出土遺物(2)



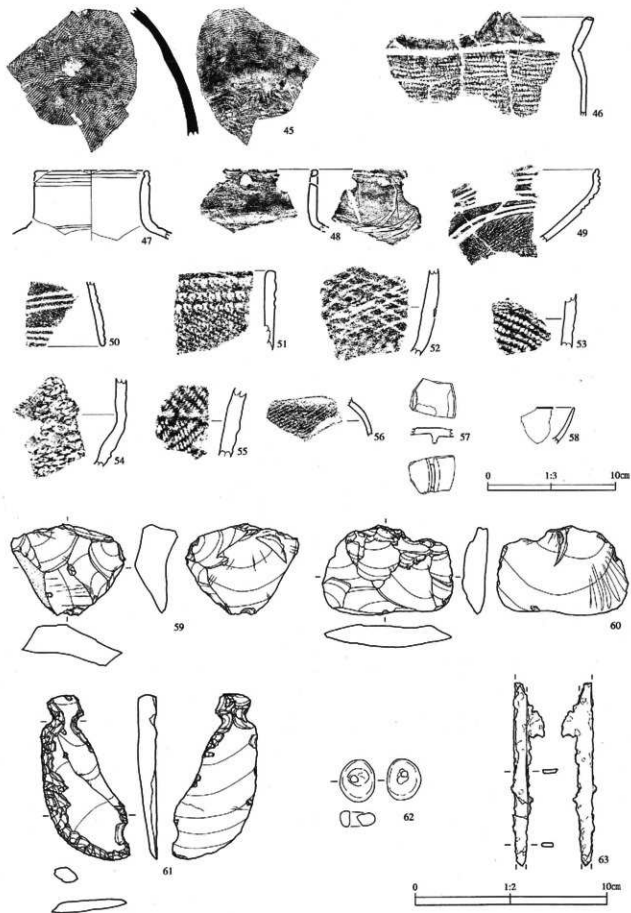
第54图 2号竖穴住居跡出土遺物(1)



第55図 2号竪穴住居跡出土遺物(2)



第56図 2号竖穴住居跡出土遺物(3)、遺構外出土遺物(1)



第57図 遺構外出土遺物(2)

第12表 古代土器観察表

No	出土地点・層位	種類 器種	計測値 (cm)			外面調整	内面調整	底部 調整	色調		胎子	備考
			口径	底径	高さ				外面	内面		
1	1号壺穴住居跡 埴土	須恵系土 器坪	(14.6)	(6.6)	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	浅黄緑	にぶい 黄緑		
2	1号壺穴住居跡 埴土	須恵系土 器坪	14.2	4.2	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	浅黄緑	にぶい 黄緑		
3	1号壺穴住居跡 カマド	須恵系土 器坪	(14.4)	(6.4)	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り再調整	黄緑	黄緑	胎粒多 く含む	器託
4	1号壺穴住居跡 埴土	土師器坪	(14.6)	(4.0)	(5.1)	ロクロナデ	ヘタミガキ 黒色処理		にぶい 黄緑	黒緑		
5	1号壺穴住居跡	土師器坪	(14.0)	-	(2.9)	ロクロナデ	ヘタミガキ 黒色処理		にぶい 黄緑	黒緑		
6	1号壺穴住居跡 埴土	土師器坪	-	-	(3.1)	ロクロナデ	ヘタミガキ 黒色処理		にぶい 黄緑	黒緑		
7	1号壺穴住居跡 カマド	土師器坪	(14.0)	(7.0)	(4.5)	ロクロナデ	ヘタミガキ 黒色処理	回転糸切り	にぶい 黄緑	黒緑		底部付近ヘラズリ 再調整?底部に 器託付着
8	1号壺穴住居跡 埴土	土師器坪	-	5.8	(1.0)	ロクロナデ	ヘタミガキ 黒色処理	回転糸切り後ヘ ラズリ調整	にぶい 黄緑	黒緑		
9	1号壺穴住居跡 埴土	土師器坪	-	-	(9.1)	口縁部:ヨコナデ 胴部:ヘラズリ	口縁部:ヨコナデ 胴部:ヘラズリ		黄	黄		外面の胴部に器付 着
10	1号壺穴住居跡 カマド	土師器 小壺	(20.0)	-	(24.5)	口縁部:ヘラズリ 胴部:ヘラズリ	口縁部:ヨコナデ 胴部:ヘラズリ		黄	黄		
11	1号壺穴住居跡 埴土	土師器 小壺	(9.0)	-	(3.1)	口縁部:ヨコナデ 胴部:ヘラズリ	口縁部:ヨコナデ 胴部:ヘラズリ		にぶい 黄緑	にぶい 黄緑		
12	1号壺穴住居跡 埴土	土師器小 形土器	(7.5)	4.5	5.2	ヘラズリ	ヘラズリ	ヘラズリ	黄	黄		外面の口縁部付近 に器付着
13	1号壺穴住居跡 埴土	土師器 小壺	(21.1)	-	(16.6)	ロクロナデ ヘラズリ	ロクロナデ		灰白	灰白		
14	1号壺穴住居跡 埴土	土師器 小壺	(19.0)	-	(10.9)	ロクロナデ	ロクロナデ		浅黄緑	浅黄緑		内面:口縁-胴部 に器付着
15	1号壺穴住居跡 カマド	土師器 小壺	(28.2)	-	(13.7)	ロクロナデ ヘラズリ	ロクロナデ		灰白	灰白		
16	1号壺穴住居跡 カマド	土師器 小壺	-	-	(4.7)	ロクロナデ	ロクロナデ		にぶい 黄緑	にぶい 黄緑		
17	1号壺穴住居跡 カマド	土師器 小壺	-	9.2	(5.0)	ヘラズリ	ロクロナデ	ヘラズリ	灰黄緑	灰黄緑		
18	1号壺穴住居跡 埴土	須恵系 土器	-	-	-	平行押き	ナデ		灰	灰		
19	1号壺穴住居跡 カマド	須恵系 土器	-	-	-	平行押き	ナデ		黄灰	黄灰		
20	1号壺穴住居跡 埴土	須恵系 土器	-	-	-	平行押き	ナデ		黄灰	黄灰		
21	1号壺穴住居跡 埴土	須恵系 土器	-	-	-	平行押き	同心円文角具 ヘラズリ		黄灰	黄灰		
22	2号壺穴住居跡 埴土土坑	土師器坪	(13.6)	-	(4.0)	ロクロナデ	ヘタミガキ 黒色処理		にぶい 黄緑	黒色		
23	2号壺穴住居跡 埴土土坑	土師器坪	(14.6)	-	(3.6)	ロクロナデ	ヘタミガキ 黒色処理		にぶい 黄緑	黒色		
24	2号壺穴住居跡 埴土土坑	須恵系土 器坪	14.0	6.8	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り 再調整	灰白	浅黄		胎粒器小
25	2号壺穴住居跡 埴土土坑2	須恵系土 器坪	13.2	6.0	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り ヘラズリ	灰白	灰白		内面に火燒あり。 胎粒器小
26	2号壺穴住居跡 埴土	須恵系 土器	(12.4)	6.2	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	灰	灰		
27	2号壺穴住居跡 埴土	土師器 小壺	(16.6)	-	(15.6)	口縁部:ヨコナデ 胴部:ハケメ	口縁部:ヨコナデ 胴部:ヘラズリ		浅黄緑	浅黄緑		
28	2号壺穴住居跡 埴土土坑・埴土 土坑2	土師器 小壺	-	10.0	(10.4)	ヘラズリ	ヘラズリ	ヘラズリ	黄	黄		胎子を部分的に 貼り付けている。
29	2号住居跡埴土 土坑	土師器 小壺	(16.0)	-	(17.4)	口縁部:ヨコナデ 胴部:ヘラズリ	口縁部:ヨコナデ 胴部:ヘラズリ		にぶい 黄緑	にぶい 黄緑		胎粒黄あり。
30	2号壺穴住居跡 土師器用分	土師器 小壺	12.9	9.7	15.6	口縁部:ヨコナデ 胴部:ハケメ ヘラズリ	口縁部:ヨコナデ 胴部:ヘラズリ	ヘラズリ	にぶい 黄緑	にぶい 黄緑	砂粒多 く含む	内面にこげ痕。底部 に円形の痕あり。 支脚器用か?
31	2号壺穴住居跡 埴土	土師器 小壺	31.4	(9.0)	26.5				褐色	黄		外面-器付着

4 検出遺構と出土遺物

No.	出土地点・層位	種類 器種	計測値 (cm)			外周測定	内周測定	基部 測定	色調		胎土	備考	
			口徑	底径	器高				外周	内周			
32	2号墓穴内陪葬 埴土	土師器類	(22.8)	-	(18.4)	ロクロナデ・ ヘラナデ	ヘラナデ		黄褐色	黒		外周一部割れ付着	
33	2号墓穴内陪葬 土坑	土師器類	(17.5)	-	(13.4)	ロクロナデ・ ヘラケズリ	ロクロナデ		明赤褐色	にぶい 赤褐色			
34	2号墓穴内陪葬 埴土	土師器類	(22.0)	-	(10.3)	タタキ・ ヘラケズリ	ヘラナデ			緑	緑		
35	2号墓穴内陪葬 土師器類部分	土師器類	(16.0)	-	(8.7)	ロクロナデ	ロクロナデ			緑	黒褐色	砂粒多く含む 外周割れ	
36	2号住居跡埴土 坑・埴土1坑2	土師器 魂鉢	(18.0)	(8.2)	(9.8)	ロクロナデ 底部下層：回転・ ヘラケズリ行調整	ヘラミガキ・ 黒色施焼	回転糸切り・ ヘラケズリ		黄	黄		内周の黒色とんで いる。
37	2号墓穴内陪葬 埴土	須恵器 大甕				平行叩き	ロクロナデ			灰	灰		
44	1 J 13 d 埋藏	須恵器 大甕	54.8	-	(48.0)	平行叩き	体部上層：同心円 文並具部 底部下 層：平行叩き具部	叩き	黄褐色	黄褐色		45と同一個体	

第13表 縄文・弥生土器観察表

No.	出土地点・層位	器種	残存 部位	計測値 (cm)			外周調整・胎文	内周調整	胎土	重量 (g)	備考
				口徑	底径	器高					
46	東側調査区低地 V層	甕	口縁部	-	-	(8.2)	L.R.、山形突起	L口縁付近に比線	赤褐色		
47	東側調査区低地 V層	甕	口縁部	(9.0)	-	(5.5)	L口縁と頸部に比線	L口縁部に比線			
48	東側調査区低地 V層	甕	口縁部	-	-	(4.9)	穿孔				補修孔3ヶ所あり
49	東側調査区低地 V層	浅鉢小 口樽部					L.R.、変形工字文				
50	1 K 8 c 甕類	高杯	胴部				3本1單位の比線			12.6	焼割
51	1 K 8 c 甕類	深鉢	口縁部				口：肩付、R.L. 網目状施赤文		緑褐色	42.2	焼割
52	1 J 12 i 及びその周辺 甕類	深鉢	体部						緑褐色	61.8	磨耗
53	1 H 17 y 及びその周辺 甕類	深鉢	体部				小髷部赤文、R.L.		緑褐色	19.1	焼割
54	1 H 17 i 及びその周辺 甕類	深鉢	体部				原色不均		緑褐色	31.3	
55	1 H 18 q 及びその周辺 甕類	深鉢	体部				紅紫 (L.R.・R.L.)		小砂多	35.5	磨耗
56	1 J 13 y 及びその周辺 甕類	甕類	甕部				R.L.			10.3	

第14表 陶器観察表

No.	出土地点・層位	産地・種類	器種	年代	残存 部位	計測値 (cm)		特徴	重量 (g)	備考
						口徑	底径			
57	1 J 17 b 甕類	尾瀬	甕	不明	底部	-	(1.2)	縁金あり	10.5	
58	1 J 14 y 及びその周辺 甕類	大塚相馬・陶器	小甕	18世紀代	L口縁部	(7.0)	(2.9)	施焼		

第15表 金属遺物観察表

No.	出土地点	層位	種類 (金属遺物)	計測値 (cm)			重量 (g)	特徴	備考
				長さ	幅	厚さ			
39	2号墓穴内陪葬	埴土	鉄	(9.2)	(1.7)	(0.9)		小刀小	
40	2号墓穴内陪葬	埴土	鉄	(9.9)	2.5	1.8		鑄り小	
41	2号墓穴内陪葬	埴土	鉄	(4.6)	(1.2)	(0.2)		釘	
42	2号墓穴内陪葬	埴土	鉄滓	5.0	6.0	1.8	44.4	磁石内添	
43	2号墓穴内陪葬	ベルト一括	鉄滓	(3.2)	(3.6)	(3.5)	26.4	磁石内添	
63	1 H 17 y	甕類	鉄	(9.7)	1.6	0.2			

第16表 石器観察表

No.	出土地点・層位	種類	計測値 (cm)			重量 (g)	石材	特徴	備考
			長さ	幅	厚さ				
38	2号墓穴内陪葬内土1坑2	不定形石器	4.2	4.2	1.8	34.9	頁岩		
59	東側調査区低地 V層	不定形石器	4.8	5.9	2.2	51.4	頁岩		
60	1 H 17 y 及びその周辺	不定形石器	4.7	6.8	1.3	18.4	燧石巻		
61	西側調査区中央	石器	9.8	4.6	1.0	27.1	頁岩		

第17表 石製品観察表

No.	出土地点	層位	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
62	遺構外一括		石製品	2.2	1.8	0.8	3.5	

5 まとめ

本遺跡は北上市更木町六日市地内に所在し、北上川東岸に形成された自然堤防上に立地している。遺跡の範囲は南北 300m、東西 250m と広大で北部が中央・南部に比べて若干高い地形である。また遺跡東端・西端共に旧河道際までとなっている。標高は 67～66m で、現況は水田を主とし集落・畑が散在する。今回の調査区は遺跡の北辺部から西辺部にかけて細長くかかっており、遺跡内でも北・西側縁辺部の状況について明らかになったといえる。

検出された遺構は縄文時代の陥し穴状遺構 3 基、平安時代の堅穴住居跡 2 棟・焼土遺構 1 基、溝跡 1 条、出土遺物は平安時代の土師器・須恵器が大コンテナ 3 箱、縄文時代の上器・石器が 9 号袋 2.5 袋出土している。以下、時期ごとに調査状況を整理し遺跡の内容について考えていきたい。

縄文時代

陥し穴状遺構が 3 基確認された。いずれも遺跡北西端に位置している。この地域が狩猟の場として利用されていたことが判明したが、縄文時代のいつ頃かは遺物が少なくよく分からない。縄文土器や石器は調査区中・南側にかけても散布している（晩期の上器が多い）が遺構は検出されていない。よって遺跡西側はあまり使われておらず、集落があるとすれば調査の及んでいない遺跡中央部のあたりと予想される。

平安時代

1号堅穴住居跡は遺跡北東端に位置している。出土した土器類を見ると坯は土師器坯と須恵系土器坯からなり、須恵器坯は 1 点が細破片でしか出土していない。甕類はロクロ・非ロクロ整形共にあるがロクロ整形の甕のほうが多い。須恵器甕類は破片であるが 2～3 個体分確認できた。こういった組成を基にし、且つこの遺構が造り替えなど長い期間使用された可能性があることなどを踏まえて 9 世紀後葉から 10 世紀前葉頃の遺構・遺物と位置づけた。

2号堅穴住居跡は遺跡北西端に位置している。土器類のなかでも坯類は須恵器坯と須恵系土器坯が同量程度、内黒坯はその半分程度の個体数となる感じであった。甕類はロクロ・非ロクロ整形がほぼ同量、須恵器甕は 1 個体分の破片が少量しかない。ほかに土師器鉢・小壺などで構成されている。末系土器が増える傾向がある中で、須恵器坯はまだ一定量ありそうなのでここでは 9 世紀後葉頃と考えた。なお本遺構は廃絶後間もなく使用中に洪水によって埋まっている。

1号焼土は遺跡西側、2号住居跡から南に 105m のところにある。燃焼部と頸出部からなるカマド状遺構である。伴出遺物はなく、平安時代のいつごろかは不明である。

44 須恵器大甕は 1号焼土の南 25m、自然流路から割れた状態で出土した。周辺で使用されていたものがある時流されてきたようでこの場に置かれて使われていた感じではなかった。

このような状況から平安時代の集落は遺跡北部の地形的にも若干高い面を中心に立地していたといえる。そうなると遺跡中・南部は主に農地であったのであろうか、また中・南部でも現在住宅がある部分は地形的に若干高かった可能性があるためその下には平安時代の集落があるかもしれない。時期は 9 世紀後葉から 10 世紀前葉頃と推察された。

その他

隣接する市ノ川地区には中世城館市野川原館跡がある。市の川 I・II 遺跡の今回の調査ではこの城館に関連する遺構・遺物の出土は無いようである。しかし本遺跡も含め城館に近接しており、中世の集落や道路・墓などが検出されても不思議ではなく、今後何らかの機会で見聞調査が実施された際には中世の遺構・遺物にも注意が必要であろう。

Ⅸ 八天北遺跡

1 遺跡の立地

本遺跡は北上川東岸の南北に細長い自然堤防上に立地している。調査区周辺に限ってみれば北側が高く、南へ行くほど低くなっている。さらに東辺部・西辺部が低く中央部が高くなっている。その差は微妙なもので標高は64.5～63.1mである。遺跡の範囲は南北約350m東西約90mである。今回の調査は遺跡北端、中央、北端と中央の間、南端部をそれぞれ細長く調査したことになる。

2 基本土層

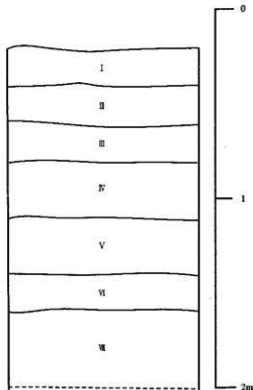
基本層序は調査区の中央付近で記録した。

- 第Ⅰ層：黒褐色土 現在の水山面 層厚 20 cm
第Ⅱ層：暗褐色土 粘性・しまりややあり 層厚 20 cm
第Ⅲ層：黒褐色土 粘性・しまりややあり 層厚 20 cm
第Ⅳ層：褐色土 粘性・しまりややあり 層厚 30 cm
第Ⅴ層：黄褐色土 粘性ややあり、しまっている
層厚 30 cm
第Ⅵ層：暗褐色土 粘性・しまりややあり 層厚 20 cm
第Ⅶ層：黄褐色砂 粘性なし、しまっている

Ⅰ・Ⅱ層の間には床土がある。遺構検出面はⅤ層上面である。明瞭な洪水堆積層はみられなかった。

3 調査の概要

今回の調査面積は本調査面積490㎡、確認調査面積853㎡の計1,343㎡で、検出された遺構の総数は平安時代と思われる焼土遺構1基、近世の柱穴状土坑113個、時期不明の土坑6基・溝跡3条で、遺物は縄文土器片、平安時代の土師器、近世陶磁器など小コンテナ(9×40×30cm)で1箱分出土している。



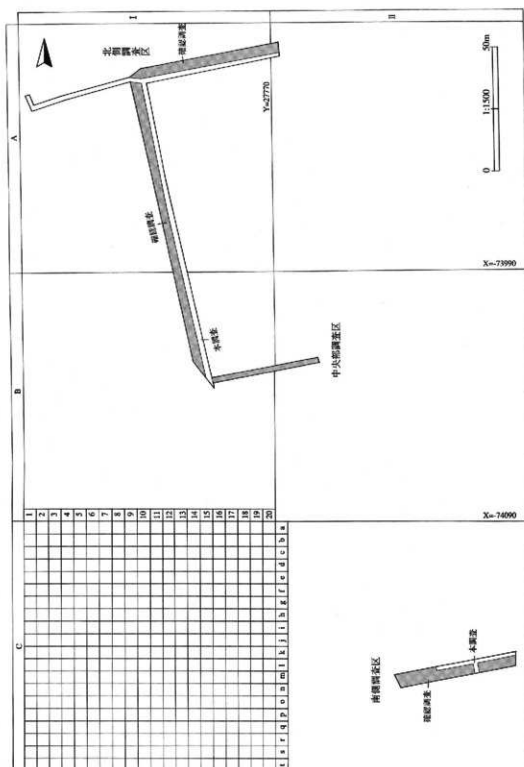
第58図 基本土層

4 検出遺構と出土遺物

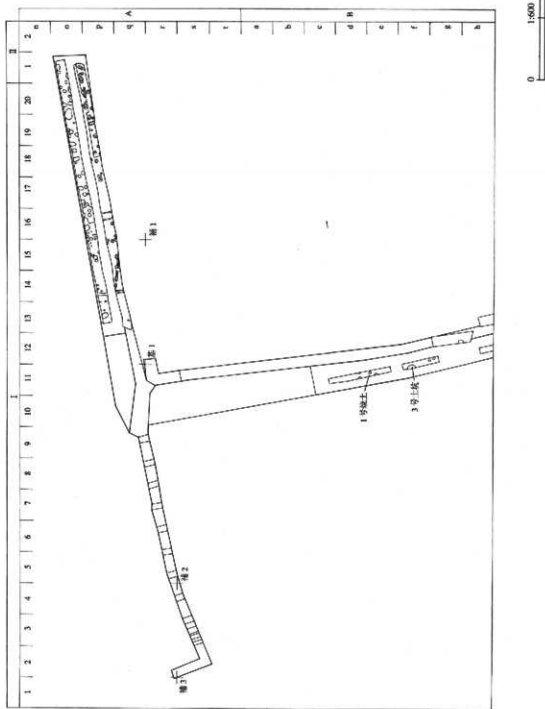
(1) 各調査区の状況(第59～61図・写真図版32～38)

北側調査区(西半部)は、現況が水田へ行く未舗装の狭い道路であった。西へいくほど低くなっていく地形で調査区西端部は自然堤防と旧河道部の境にあたる。調査は幅2～3m程度のトレンチを連続して設定し掘り下げを行った。トレンチとトレンチの間は1～1.5mである。遺構・遺物が見つければそこから拡張して精査していく方針であった。結果的には遺構はなく、遺物は1点のみの出土であったが、写真と平面図で記録した。西端部は旧河道部への境にあたり、水が湧いてくるところであった。遺構・遺物はなかった。

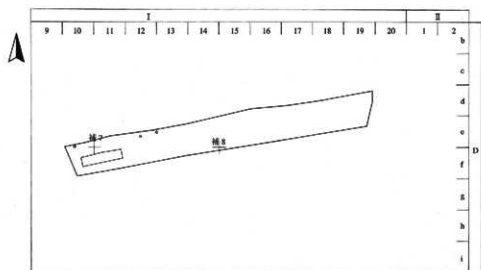
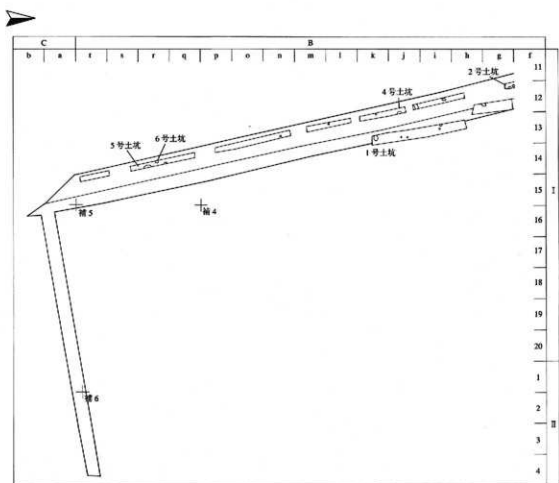
北側調査区(東半部)は、自然堤防上を東西に横切るように設けられている。概ね平坦な地形で現況は砂利道・小水路・水田であった。調査は水田面をはじめに精査・実測し、次に道路部の検出・実



第 59 図 調査区全体図



第60図 遺構配置図(1)



0 1:600 20m

第 61 図 遺構配置圖(2)

測をした。道路部分は遺構検出のみで記録を撮っている。その際に道路は調査の及ばない水田側へ切り替えている。主に近世の遺構・遺物が見つかった。

中央部調査区は北側調査区と同じく、遺跡の自然堤防上を東西に横切るように設けられている。概ね平坦な地形だが、東へ向かうほど若干低くなっている。現況は水田であった。遺構検出面まで重機と人力により掘り下げたが遺構・遺物は見つからなかった。

北側調査区と中央部調査区間の調査区は自然堤防上を南北方向に細長く縦断するようにある。概ね平坦だが北側が南側より若干高い地形で、現況は水田と未舗装の狭い道路・小水路であった。初めに水田部分の遺構検出・精査から実施したが、水田・水路から水が流れ込むため写真撮影と図を作成したらすぐに埋め戻していった。遺構・遺物は少ない。道路部分も水が流れ込むため1.5～2.5㎡のトレンチを連続して設けて調査した。遺構・遺物が確認できたら拡張していく方針で調査した。用地外の水田や水路を壊さないよう境に幅を持たせている。検出面での状況写真と図面を作成して埋め戻した。

南側調査区は、自然堤防の南端部付近に位置し、東西方向に横切るように設定されたかたちになっている。東側は旧河道部へ接する部分までかかっており、ここが今回調査した中でもっとも低いところとなった。重機と人力により掘り下げていったが遺構・遺物は確認できなかった。検出面での状況写真と図面を作成して調査記録とした。

(2) 焼土遺構

1号焼土(第60図、写真図版38)

<位置・検出・重複関係> I B 11 d グリッドに位置している。V層上面で検出し、他の遺構との重複関係はない。

<規模・堆積土> 平面的には40×(20)cmの柱穴状の掘り込み内に黒褐色土に混じるように焼土粒と炭粒が確認された。その場で使われた焼土ではなく、廃棄された焼土・炭粒である。

時期 遺構の近くで土師器瓦片が出土しており、本遺構も平安時代のもかもしれない。

(3) 近世の柱穴群(第63～65図、写真図版39・40)

北側調査区(東半部)を中心に113個の柱穴が密集して検出された。その多くは掘立柱建物跡(民家)を構成する柱穴のようであったが、調査区が狭いため建物を復元することはできなかった。周辺から出土した陶磁器などの年代を参考にすれば18世紀後半以降の柱穴群といえる。各柱穴の計測値は一覧表にまとめた。

(4) 土坑

1号土坑(第64図、写真図版38)

<位置・検出・重複関係> I B 13 k グリッドに位置する。V層上面で検出し、他の遺構との重複関係はない。

<規模> 検出面での規模は78×73cm、深さは17cm前後を測る。

<埋土> 埋土は黒褐色土の単層で遺物は出土しなかった。

時期 不明である。

2号土坑 (第64図、写真図版38)

<位置・検出・重複関係> I B 12 g グリッドにある。V層上面で検出し、他の遺構との重複関係はない。

<規模> 遺構検出面での規模は88×(62)cm、深さは11cm前後となる。

<埋土> 黒褐色土の単層で出土遺物はない。

時期 不明である。

3号土坑 (第64図、写真図版38)

<位置・検出・重複関係> I B 11 f グリッドに位置する。V層上面で検出し、他の遺構との重複関係はない。

<規模> 遺構検出面での規模は108×(60)cmである。

<埋土> 遺構検出のみ。

時期 不明である。

4号土坑 (第64図、写真図版38)

<位置・検出・重複関係> I B 12 j グリッドに位置している。V層上面で検出し、他の遺構との重複関係はない。

<規模> 検出面での規模は87×(45)cmである。

<埋土> 遺構検出のみ。

時期 不明である。

5号土坑 (第65図、写真図版39)

<位置・検出・重複関係> I B 14 r グリッドにある。V層上面で検出し、他の遺構との重複関係はない。

<規模> 検出面での規模は130×(38)cmである。

<埋土> 遺構検出のみ。

時期 不明である。

6号土坑 (第65図、写真図版39)

<位置・検出・重複関係> I B 14 r グリッドに位置する。V層上面で検出し、他の遺構との重複関係はない。

<規模> 遺構検出面での規模は94×(42)cmである。

<埋土> 遺構検出のみ。

時期 不明である。

(5) 溝 跡 (第62図、写真図版39)

1号溝跡

北側調査区東半部、I A 14 q グリッドにて検出された。北北西-南南東方向に延びており、長さ1.3m分検出された。上幅40cm、深さは10cm前後である。埋土は黒褐色土の単層で自然堆積である。近代まで下る遺構ではないが出土遺物はなく時期は不明である。

2号溝跡

北側調査区の東半部、I A 14 q グリッドにて検出された。東南東-西北西方向に途切れながらも延びており調査区内では長さ4.7m分検出されている。上幅0.25m、深さは0.1mに満たない。埋土は黒褐色土の単層で自然堆積と判断した。遺構検出状況から考えて近代以降の新しい遺構ではないが、出土遺物がないたため詳しい時期は不明である。

3号溝跡

北側調査区の東半部、I A 17 p グリッドに位置する。北北西-南南東方向に延びており、調査区内では長さ1.7m分検出された。上幅110cm、深さは10cm前後である。埋土は自然堆積で黒褐色土の炭層である。遺構の検出状況から、近代まで降らないことは分かったが出土遺物がないたため詳しい時期は不明である。

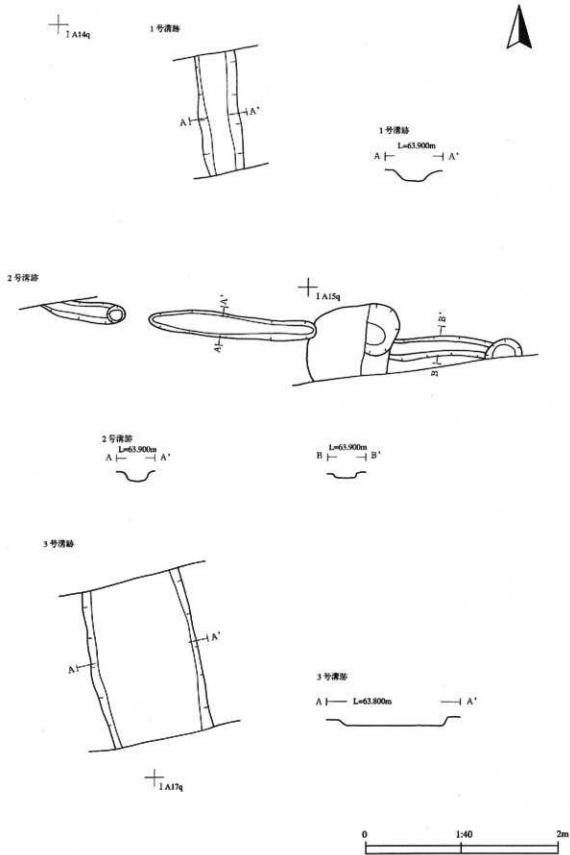
(6) 出土遺物(第66図、写真図版54)

1は縄文土器で鉢類の体部破片である。後晩期と思われるが摩滅しておりよく分からない。2は土師器甕である。非ロクロ整形で口縁部の作りが小さいので10世紀代と思われる。7も非ロクロ整形の土師器甕、6は須恵系土器坏片。9は須恵器壺類の破片である。3は陶器拵鉢で、19世紀以降、産地は不明である。8は瀬戸産の腰鉋碗で18世紀頃のもの。4は砥石である。

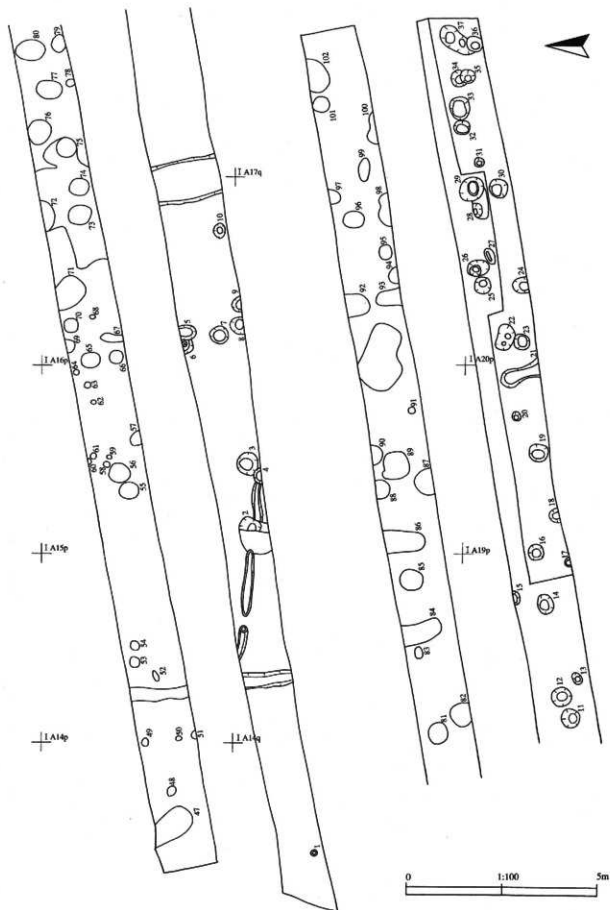
第18表 柱穴観察表

No	径 (cm)	深さ (cm)	検出向標高 (m)	底面標高 (m)	No	径 (cm)	深さ (cm)	検出向標高 (m)	底面標高 (m)
1	16 × 16	20.3	65.600	63.542	24	43 × 42 α	56.8	65.600	62.831
2	56 × 32 α	24.3	65.600	63.458	25	47 × 45	56.1	65.600	62.935
3	57 × 52	19.3	65.600	63.532	26	57 × 43	74.2	65.600	62.765
4	38 × 19 α	12.0	65.600	63.590	27	46 × 24	10.9	65.600	63.359
5	43 × 38 α	36.4	65.600	63.235	28	37 × 24	61.3	65.600	62.872
6	37 × 29 α	20.0	65.600	63.459	29	68 × 60	50.9	65.600	63.013
7	48 × 47	10.3	65.600	63.521	30	51 × 45	54.2	65.600	62.825
8	47 × 34 α	37.0	65.600	63.268	31	26 × 25	14.2	65.600	63.239
9	42 × 22 α	39.3	65.600	63.256	32	40 × 44	53.1	65.600	62.866
10	41 × 32	12.0	65.600	63.488	33	62 × 51	31.9	65.600	63.109
11	52 × 48	34.4	65.600	63.306	34	45 × 23	45.8	65.600	62.966
12	52 × 47	31.7	65.600	63.249	35	39 × 34	33.0	65.600	63.079
13	31 × 26	24.5	65.600	63.424	36	43 × 42	7.1	65.600	63.307
14	52 × 44	39.1	65.600	63.258	37	105 × 50	7.6	65.600	63.277
15	39 × 13 α	36.9	65.600	63.299	38	88 × 62	16.6	65.500	63.426
16	42 × 40	11.4	65.600	63.365	39	30 × 12 α	6.1	65.500	63.536
17	19 × 13 α	17.7	65.600	63.341	40	23 × 20	10.1	65.500	63.473
18	40 × 26 α	9.8	65.600	63.378	41	21 × 23	16.3	65.500	63.451
19	51 × 49	12.5	65.600	63.174	42	25 × 20	10.4	65.500	63.495
20	25 × 21	17.4	65.600	63.078	43	83 × 72	17.9	65.500	63.405
21	104 × 52 α	8.6	65.600	63.284	44	35 × 30	21.2	64.600	63.09
22	72 × 41	31.6	65.600	63.039	45	25 × 23	25.3	64.600	62.894
23	45 × 38	26.5	65.600	63.112	46	21 × 17	28.5	64.600	62.856

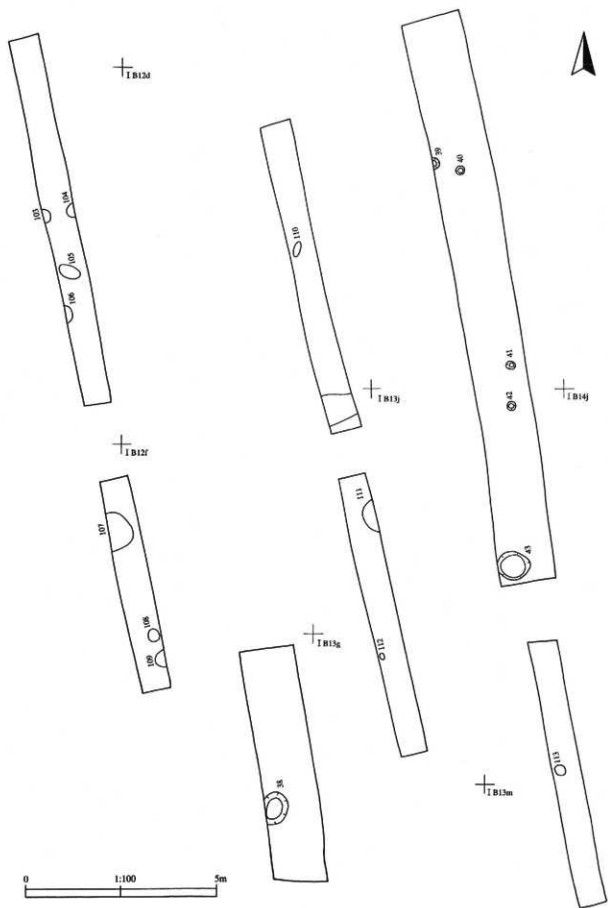
※ 47～117は未掘



第62図 1号~3号清跡

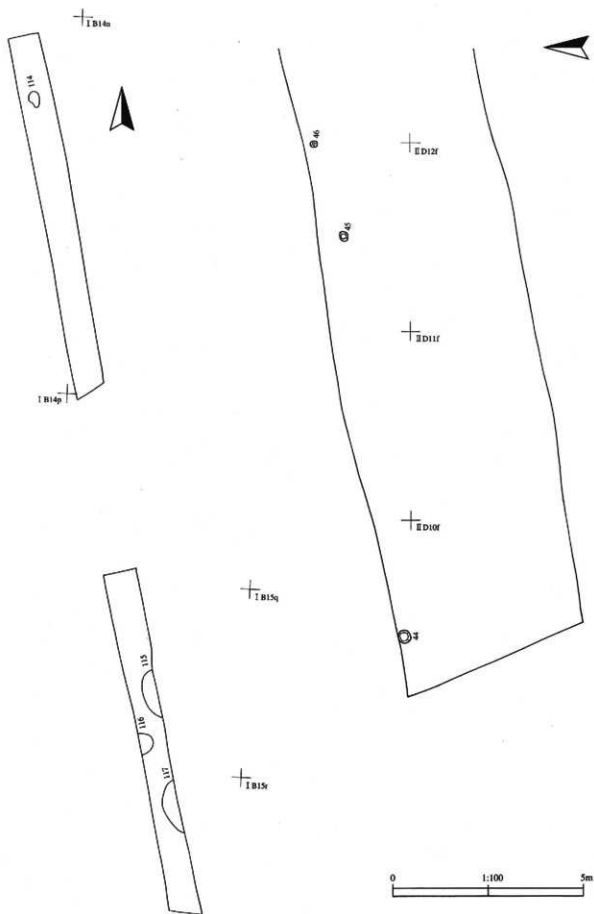


第63図 柱穴群(1)

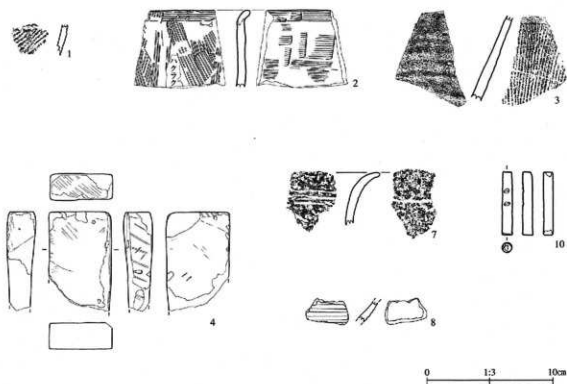


第 64 図 柱穴群(2)

4 検出遺構と出土遺物



第 65 図 柱穴群(3)



第66図 出土遺物

第19表 古代土器観察表

No	出土地点/遺構名/層位	種類 器種	計測値 (cm)			外形調整	内面調整	外面色調	内面色調	重量 (g)	備考
			口径	底径	器高						
2	I号竈土	土製器類	-	-	0.7	ハケメ	ハナナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	44.7	内面こげ黒
7	北畑調査区西溝	土器器			0.7			にぶい黄緑	にぶい黄緑	4.2	
6	I C 15b付添・床土下層	土器器			0.5	ハケメ		灰白	灰白		
9	表土	須臾器			0.6	ロクロナデ	ロクロナデ	灰	灰	8.2	

第20表 縄文土器観察表

No	出土地点	種類	器種	残存位置	外形調整・施文	内面調整	粘土	重量 (g)	備考
1	遺構外一拵	縄文土器	鉢類	各部破片	R.L.			3.5	磨耗

第21表 陶磁器観察表

No	出土地点	産地・種類	器種	年代	残存位置	特徴	重量 (g)	備考
3	北畑調査区西溝	産地不明・陶器	楕鉢	19世紀以降	係部		5.3	
8	II D 14 f付添	瀬戸・陶器	碗	18世紀	破片	彫刻線	6.4	

第22表 金属遺物観察表

No	出土地点	層位	種類	計測値 (cm)			重量 (g)	特徴	備考
				長さ	幅	厚さ			
5	中央部調査区	表土近く	針			1.0			
10	北畑調査区 西溝		管?	5.0	0.7	0.7	4.2	柄に銅付着	

第23表 石器類観察表

No	種類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	特徴
4	砥石	II D 14 f付添	7.9	5.0	2.2	125.5		

5 まとめ

八天北遺跡の所在する北上市更木34地割ほかは、北上川東岸に発達した谷底平野に立地している。本遺跡に限らず更木地区の遺跡の多くは北上川の旧流路によって形成された自然堤防上に占地しているものが多い。八天北遺跡の自然堤防は南北に細長いかたちをしており、その東西側には旧流路が残る。遺跡範囲は南北約350m東西約90mである。今回の調査は遺跡北端、中央、北端と中央の間、南端部をそれぞれ細長く調査したことになる。

検出された遺構は平安時代の可能性のある焼土遺構1基、近世の柱穴状土坑113個、時期不明の土坑6基、時期不明の溝跡3条である。遺物は縄文土器片、平安時代の土師器、近世陶磁器、砥石が出上した。時期ごとに状況を整理して本報告書のまとめとしたい。

縄文時代

遺構は検出されず、土器もごく微量しか得られなかった。岩手県教育委員会生涯学習文化課（以下文化課と略す）による試掘調査では遺跡中央部の西側付近には縄文時代の遺物包含層が確認されている。今回この部分は調査範囲に含まれていない。遺物包含層の近くに集落を想定するならば、遺跡中央部のやや南側付近にその可能性がある。国史跡八天遺跡はすぐ南側に隣接するもの本遺跡より約15m高い丘陵上に立地している。両遺跡が同時期に存在していたかどうかは遺構・遺物量が少なく明らかにできなかった点として残った。自然堤防など低い面で集落がみられるのは縄文時代でも後晩期になってからが中心であろうから、仮に八天遺跡と本遺跡は同時期に営まれた隣接する遺跡であるならば、両遺跡は立地に大きな違いがあるので、検出遺構・遺物の内容も比較できれば具体的な集落どうしの関係・性格の違いについても考察できるかもしれない。

平安時代

土師器片が出土しているのは遺跡中央から北部にかけてである。1号焼土もこの時期と考えたが、あまり根拠はない。文化課の試掘調査では竪穴住居跡が数棟確認されている。主に遺跡中央から北部に分布しているようである。調査範囲が狭く今回はこの時期の竪穴住居跡を検出できなかったが、集落は遺跡中央から北側を中心に広がっていたといえる。遺跡南端を調査したが、遺構・遺物がなかったことから大過ないであろう。自然堤防上に集落を営み東側の小規模な後背湿地などを水田化していったのかと想像している。数少ない出土遺物から10世紀頃と考えているが、成立期・廃絶時期などについては未解明のまま残った。何れ縄文時代からは一旦断絶があることは確かで、この後近世集落ができるまでにもこの遺跡は空白時期となる。

近世

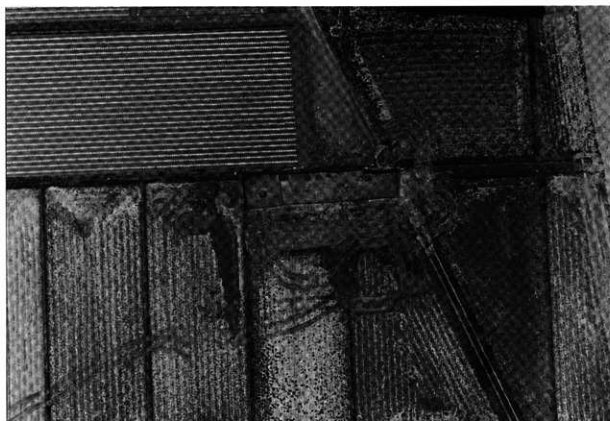
北側調査区（東半部）からは近世陶磁器とともに多数の柱穴が検出された。比較的密集して分布していたが調査範囲が狭く掘立柱建物跡を想定することはできなかった。それでもこれらの柱穴群の多くは建物を構成する柱穴であったとみるべきと調査してみている。近世の遺物は僅かであったが、中でも最も古いものとして瀬戸産の腰鉋碗があり18世紀頃と考えられる。そしてこれを遺構の時期の根拠にした。遺物の中には近代以降のものもあったがその頃には建物も礎石が主となり柱穴はあまり掘れなないと考えている。柱穴群の広がりは現在の集落のある北側に延びそうで、水田の広がる南側にはそれほど分布しないようである。こうしたことから、本遺跡の近世集落は現在の集落と重複するようであると推察される。この地区の現在の集落が18世紀頃には成立しており、自然堤防の北側を中心に展開していったといえる。

写 真 図 版

- | | |
|---------|------------------|
| 市の川Ⅰ遺跡 | 写真図版 1・2・41 |
| 市の川Ⅱ遺跡 | 写真図版 2 |
| 山 口 遺 跡 | 写真図版 3～9・41 |
| 小川屋敷遺跡 | 写真図版 10～20・42～46 |
| 六日市遺跡 | 写真図版 21～29・47～53 |
| 八天北遺跡 | 写真図版 30～40・54 |



遺跡遺景（上が北）



市の川上遺跡調査区全景（上が南）



市の川Ⅱ遺跡調査区全景（上が南）



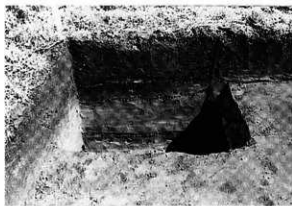
調査区（市の川Ⅰ遺跡）



調査区（市の川Ⅱ遺跡）



基本土層（市の川Ⅰ遺跡）

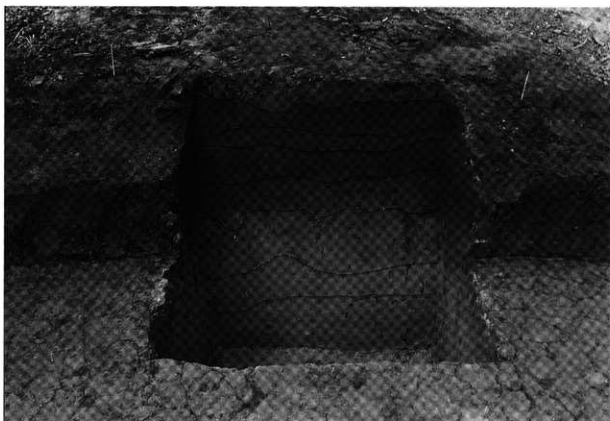


基本土層（市の川Ⅱ遺跡）

写真図版2 航空写真、調査区、基本土層



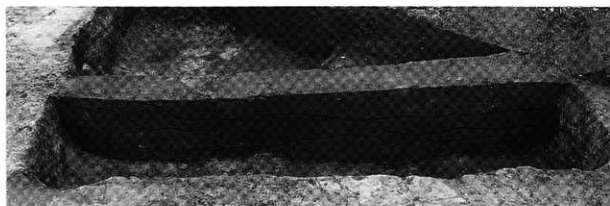
調査区全景（上が東）



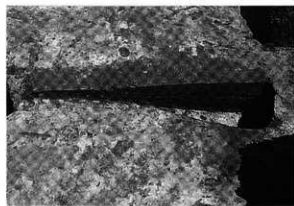
基本土層



1号竪穴住居跡（平面）



埋土断面（南→北ベルト）

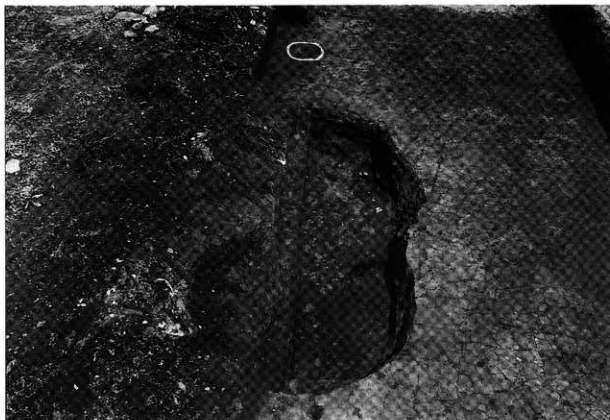


カマド煙道部（断面・S→）

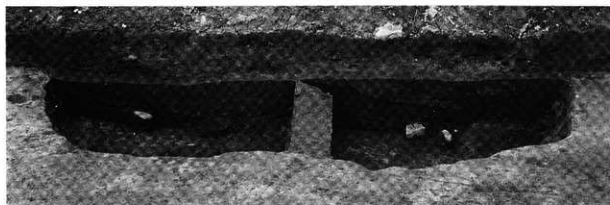


P1（断面・NW→）

写真図版4 1号竪穴住居跡



2号竪穴住居跡（平面・S→）



埋土断面（E→）



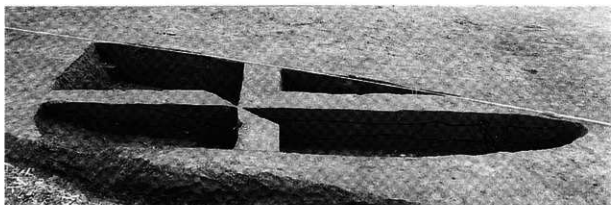
P 1（断面・S→）



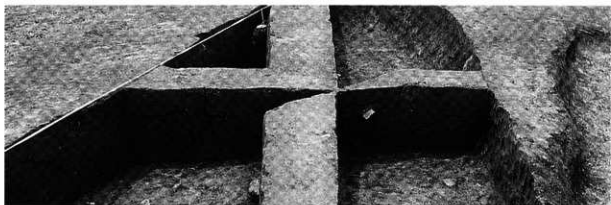
鉄製品出土状況（No. 7）



3号雙穴住居跡（平面・W→）



埋土断面（N→）



埋土断面（E→）

写真図版 6 3号雙穴住居跡



カマド (平面・W→)



カマド煙道部 (断面・N→)



カマド燃焼部 (断ち割り・N→)



カマド袖部 (W→)



P 2 (平面・N→)



P 2 (断面・N→)



P 1 (断面・W→)



土器出土状況



1号溝状遺構 (平面・S→)



断面 (E→)

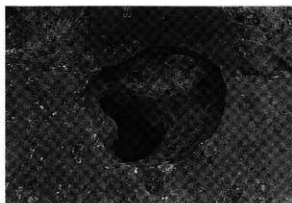


断面 (S→)



1号焼土 (検出・W→)

写真図版 8 1号溝状遺構、1号焼土



1号柱穴状土坑 (平面・E→)



断面 (E→)



2号柱穴状土坑 (平面・SE→)



断面 (SE→)



3号柱穴状土坑 (平面・E→)



断面 (E→)



調査区東側 (W→)



調査区南側 (N→)



調査区全景（上が北）



1号竪穴住居跡（平面）



遺物出土状況（W→）

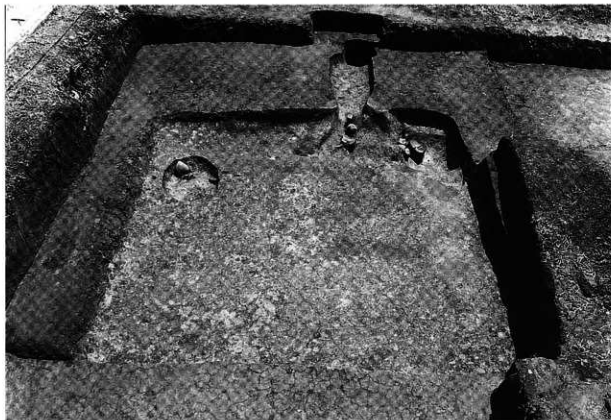


カマド煙道部（平面・W→）



カマド煙道部（断面・N→）

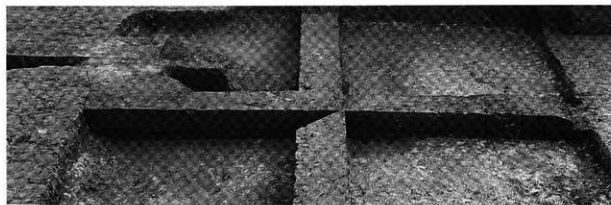
写真図版 10 航空写真、1号竪穴住居跡



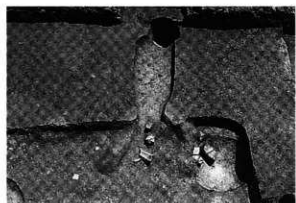
2号竪穴住居跡 (平面・W→)



埋土断面 (N-Sベルト)



埋土断面 (E-Wベルト)



カマド (平面・W→)



カマド煙道部 (断面・N→)



カマド袖部 (断ち割り・W→)



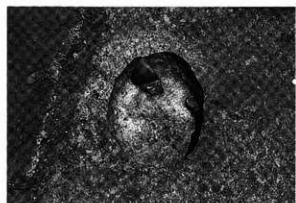
カマド燃焼部 (断面・N→)



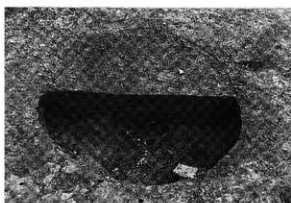
P 1 (平面・W→)



P 1 (断面・W→)



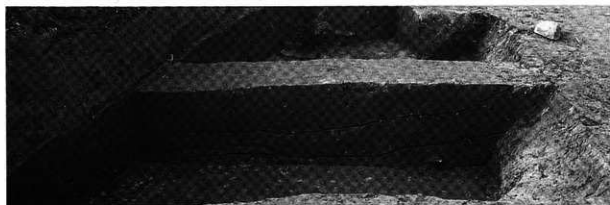
P 2 (平面・W→)



P 2 (断面・W→)



3号竪穴住居跡 (平面・S→)



埋土断面 (W-Eベルト)



カマド煙道部 (断面・N→)



焼土 (断面・E→)



4号竪穴住居跡 (平面・S→)



埋土断面 (N-Sベルト)



P1 (断面・S→)



P1 (平面・S→)



5号竪穴住居跡 (平面・W→)



埋土断面 (E-Wベルト)



6号雙穴住居跡 (平面・W→)



7号雙穴住居跡 (平面・W→)



1号住居状遺構 (検出・S→)



平面 (N→)



埋土断面 (N→)



遺物出土状況① (N→) < No.50 >



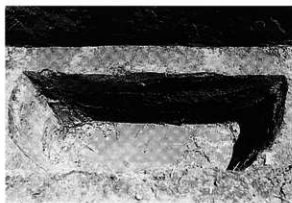
遺物出土状況② (N→)



遺物出土状況③ (N→)



1号井戸跡 (平面・W→)



1号井戸跡 (断面・W→)



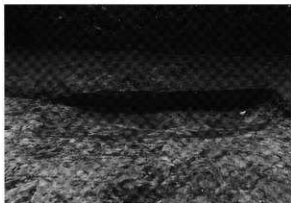
1号土坑 (平面・W→)



1号土坑 (断面・W→)



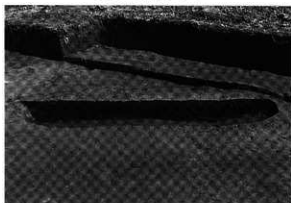
2号土坑 (平面・S→)



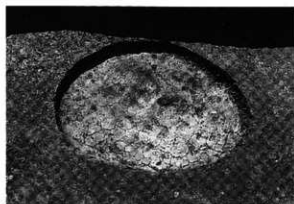
2号土坑 (断面・S→)



3号土坑 (平面・NW→)



3号土坑 (断面・NW→)



5号土坑 (平面・E→)



5号土坑 (断面・E→)



6号土坑 (平面・SE→)



6号土坑 (断面・SE→)



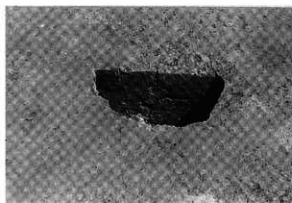
4号土坑 (検出・NW→)



7号・8号土坑 (検出・N→)



9号土坑 (平面・W→)



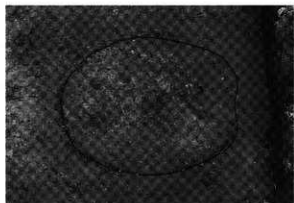
9号土坑 (断面・S→)



2号焼土 (検出・NW→)



2号焼土 (断面・SW→)



3号焼土 (検出・S→)



3号焼土 (断面・S→)



4号焼土 (検出・W→)



4号焼土 (断面・W→)



1号焼土 (検出・W→)



5号焼土 (検出・S→)



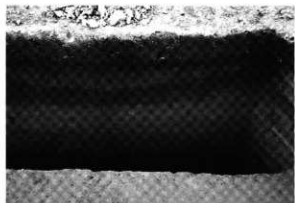
6号焼土 (検出・N→)



基本土層



写真上が北、中央には喜久盛酒造がみえる



基本土層



北側調査区東端（西から）



北側調査区中央現況（北から）



北側調査区中央検出面（北から）



北側調査区中央現況（東から）



北側調査区中央検出面（西から）



西側調査区中央現況（北から）

写真図版 22 調査前風景、調査区



西側調査区北側検出面（北から）



西側調査区北部検出面（北から）



西側調査区中央部検出面（北から）



東側調査区検出面（東から）



西側調査区南側検出面（南から）



1号竪穴住居跡平面（西から）、南側と西側にカマドがあった



1号竪穴住居跡断面（南から）



遺物出土状況



カマド・遺物出土状況



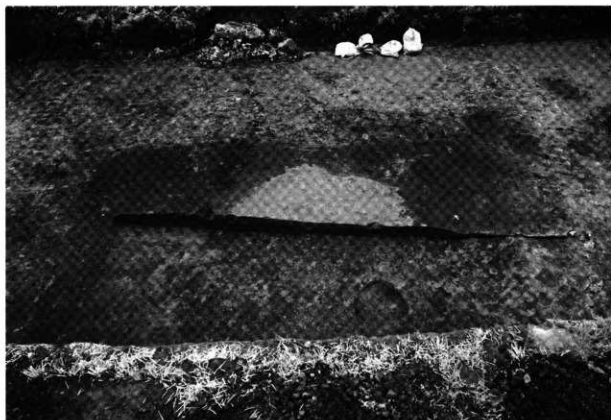
断面（東から）
壁の残りは良くない。
床は貼床であり平坦では
なかった



カマド断面（南から）
新段階のカマドである。袖部
などに礫を用いている。
写真手前のやや大きな礫は
古段階のカマドに用いられたもの。



煙道部断面（南東から）



2号竪穴住居跡平面（東から）



2号竪穴住居跡断面（西から）



出土遺物 1



出土遺物 2



検出（南から）
カマドは北西隅にある。



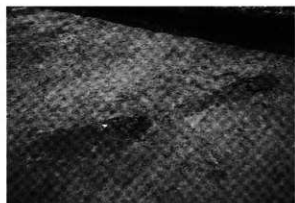
断面（南から）
洪水堆積層が床面直上にまで
達していた。



住居内小土坑



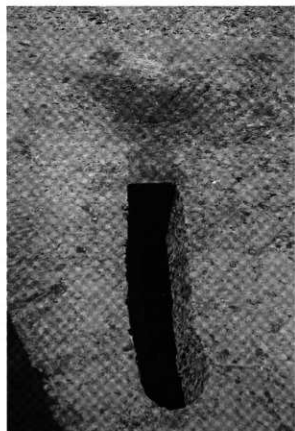
2号竪穴住居跡平面（南西から）



1号焼土平面（北東から）



1号焼土断面（南から）



1号陥し穴状遺構平面（北から）



2号陥し穴状遺構平面（南西から）



1号陥し穴状遺構断面（北から）

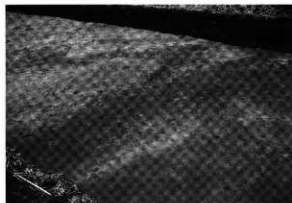


2号陥し穴状遺構平面（南西から）

写真図版 28 1号焼土、1号・2号陥し穴状遺構



3号陥し穴状遺構平面（南から）



1号溝跡平面（南西から）



1号溝跡断面（西から）



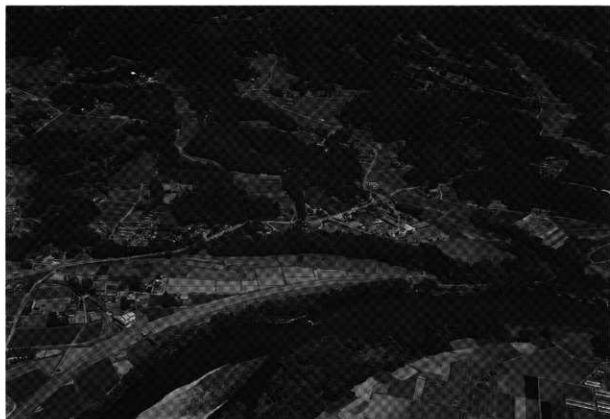
西側調査区南側検出面（南から）



西側調査区中央検出状況（南から）



2号陥し穴住居跡調査中



遺跡遠景（西から）



遺跡近景（南から）



調査前現況（東から）



道跡近景（北から）



北側調査区現況（東から）



中央部調査区南端 基本層序



南部調査区基本層序（西から）



北部調査区の東側検出面（西から）

写真図版 32 調査前風景、基本土層、北部調査区



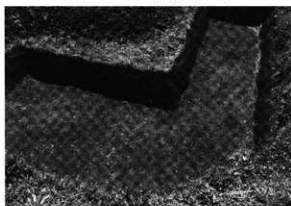
北部調査区の東側検出面（西から）



北部調査区検出中（西から）



北部調査区東側検出面（東から）



北部調査区中央検出面（北から）



北部調査区の西側①検出面（東から）



北部調査区の西側②検出面（東から）



北部調査区の西側③検出面（東から）



北部調査区の西側④検出面（東から）



北部調査区の西側⑤検出面（西から）



中央部調査区T1検出面（南から）



中央部調査区T2検出面（南から）



中央部調査区南東側検出面（東から）



中央部調査区南東側検出面（西から）



中央部調査区 T 3 横出面 (南から)



中央部調査区 T 4 横出面 (南から)



中央部調査区 T 5 横出面 (南から)



中央部調査区 T 6 横出面 (北から)



中央部調査区T7横出面(南から)



中央部調査区T8横出面(南から)



中央部調査区T9横出面(南から)



中央部調査区T10横出面(南から)



中央部調査区T11①検出面（北から）



中央部調査区T11②検出面（北から）



中央部調査区T11③検出面（北から）



中央部調査区T11④検出面（北から）



中央部調査区検出状況（北から）



調査風景



中央部調査区南東側検出面（南から）



中央部調査区南東側検出面（東から）



中央部調査区南東側検出面（東から）



南部調査区検出面（南から）



1号焼土遺構平面（東から）



1号土坑平面（東から）



2号土坑平面（南から）



3号土坑平面（東から）



4号土坑平面（南から）

写真図版 38 中央部調査区(5)、1号焼土、1号～4号土坑



5・6号土坑平面 (西から)



1号溝跡平面 (南から)



2号溝跡平面 (東から)



3号溝跡平面 (南から)



柱穴群検出1 (西から)



柱穴群検出2 (南から)



柱穴群検出3 (西から)



柱穴群4検出(東から)



柱穴群5検出(東から)



北部調査区調査状況



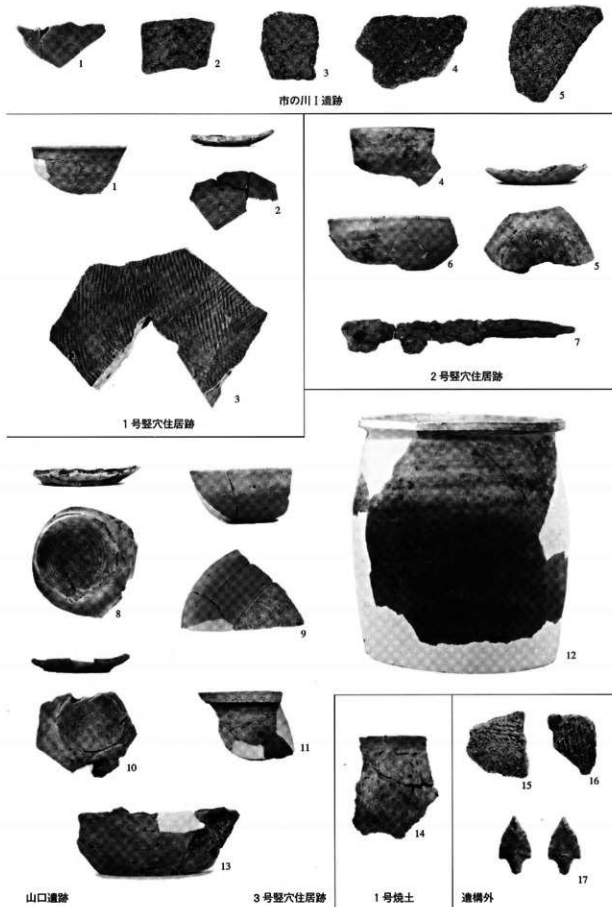
中央部調査区南西側調査状況



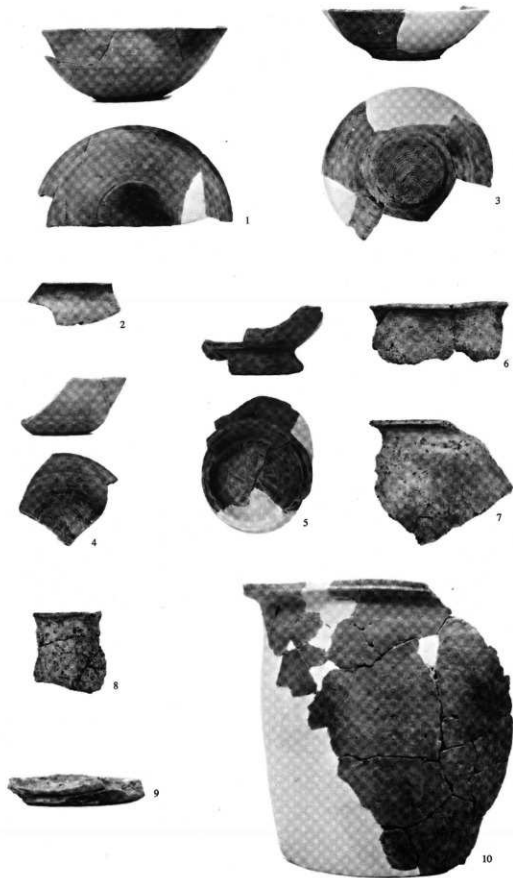
北部調査区表土除去



北部調査区調査状況



写真図版 41 市川I遺跡、山口遺跡出土遺物



1号竪穴住居跡

写真図版 42 遺構内出土遺物(1)



写真図版 43 遺構内出土遺物(2)



4号竪穴住居跡

写真図版 44 遺構内出土遺物(3)



6号竪穴住居跡



47



49



48



50



1号住居状遺構



46

7号竪穴住居跡



54

6号土坑



55

7号土坑



51

5号焼土



52



6号焼土



56

9号土坑



53

写真図版 45 遺構内出土遺物(4)



57



58



59



60



61



62



63



64



66



65



67

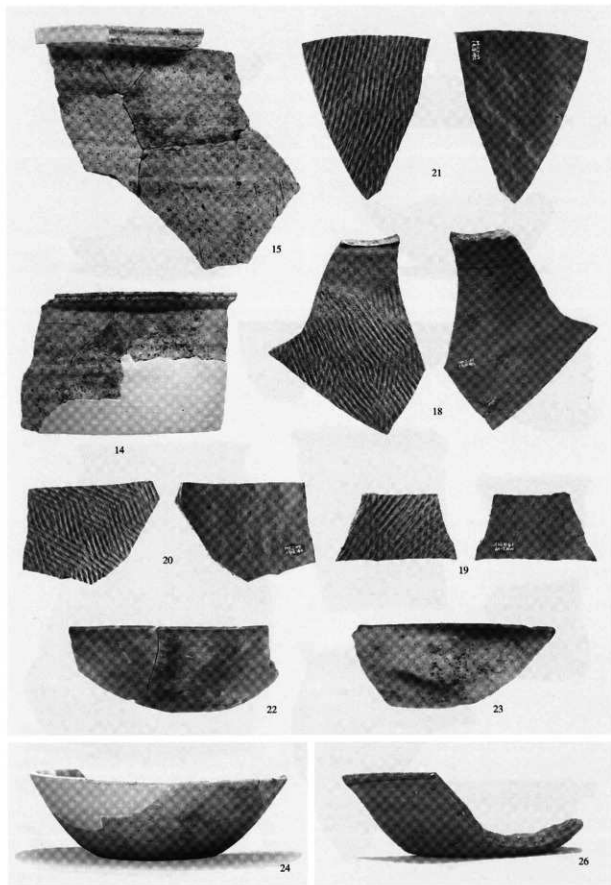


68

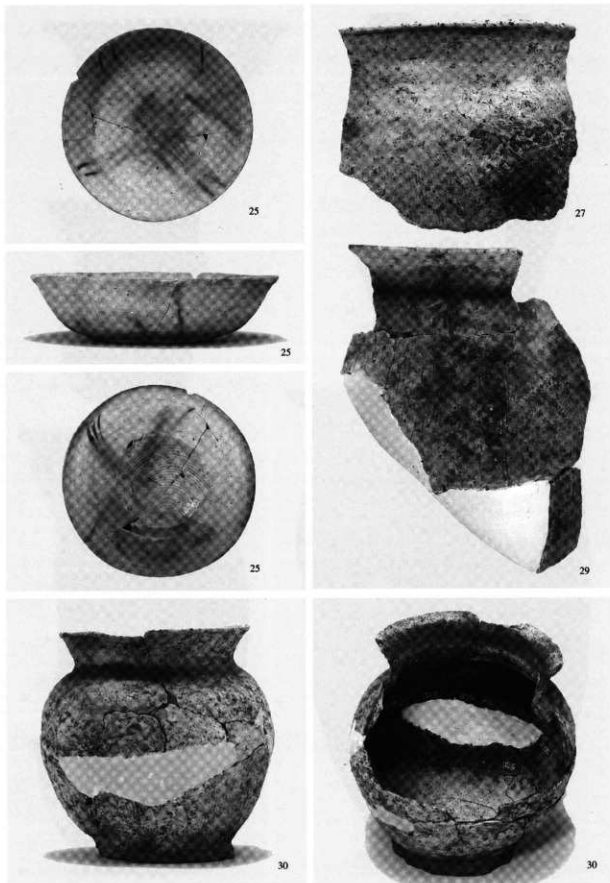
写真図版 46 遺構外出土遺物



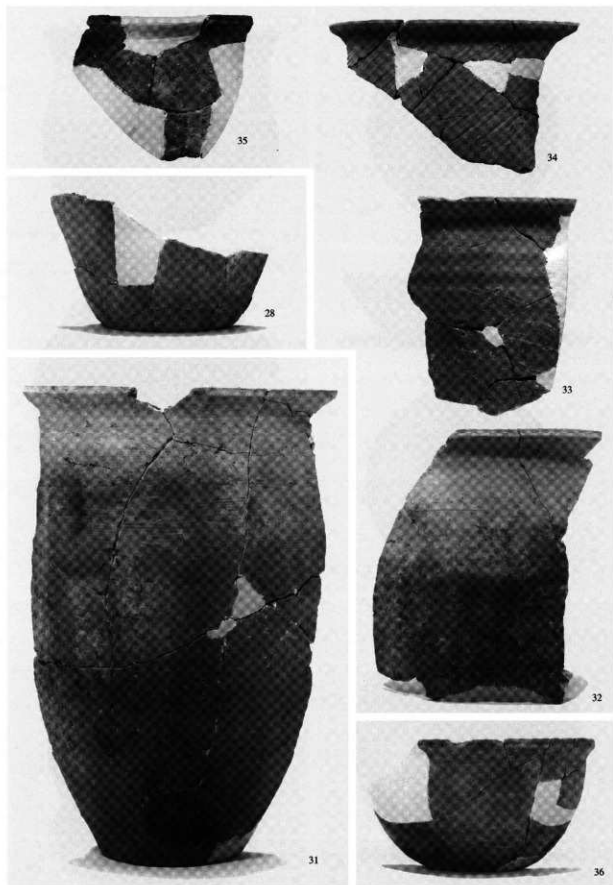
写真図版 47 遺構内出土遺物(1)



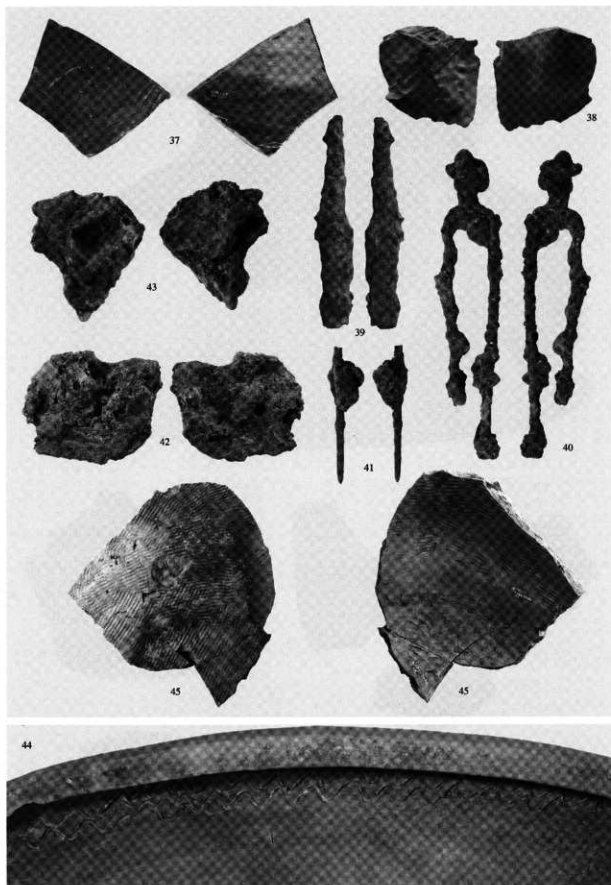
写真図版 48 遺構内出土遺物(2)



写真図版 49 遺構内出土遺物(3)



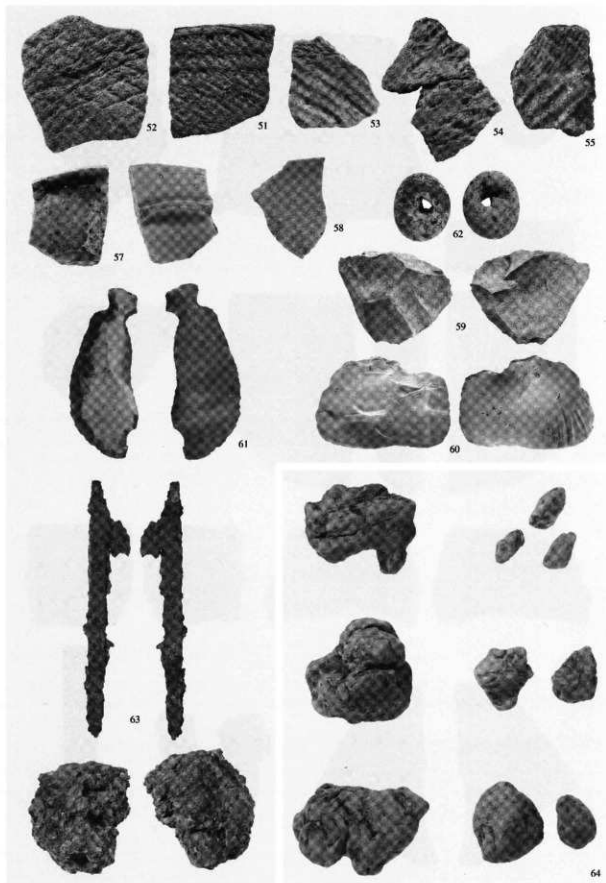
写真図版 50 遺構内出土遺物(4)



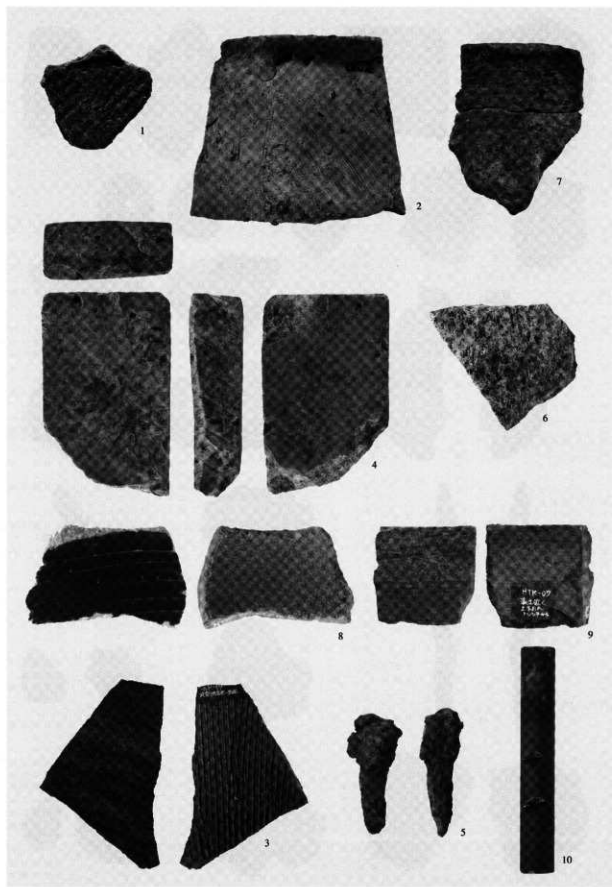
写真図版 51 遺構内出土遺物(5)



写真図版 52 遺構外出土遺物(1)



写真図版 53 遺構外出土遺物(2)



写真図版 54 出土遺物

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第543集
市の川Ⅰ遺跡・市の川Ⅱ遺跡・山口遺跡・小川屋敷遺跡・
六日市遺跡・八天北遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業更木新田地区関連遺跡発掘調査

印刷 平成20年11月25日

発行 平成20年11月28日

編集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話(019)638-9001

発行 岩手県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室

〒024-8520 岩手県北上市芳町2-8

電話(0197)65-2733

(財)岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号

電話(019)654-2235

印刷 第一印刷有限会社

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ四丁目6-40

電話(019)646-6001

